

42609

教科書文庫

4
810
51-1928
20000 19638

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

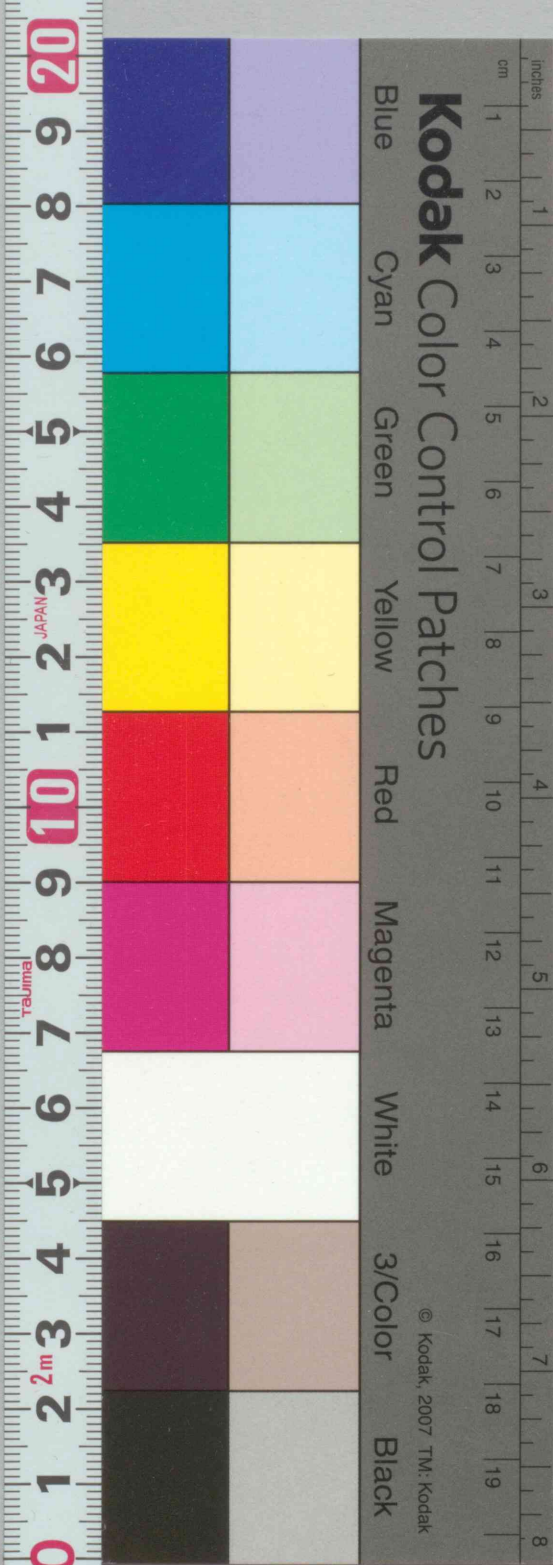


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
51-1928
2000019638

編部輯編院書治明

本讀學文代現

(版三第)

下



資料室

教科書文庫
4
810
51-1928
2000019638

日一十三月三年三和昭

濟定檢省部文

用科語國校學女等高・校學中・校學範師

現代文學讀本

第三版

広島大学図書

2000019638



院書治明

375-9
Me9

廣島大學圖書印



はしがき

一、本書は、師範學校、中學校、高等女學校等、中等諸學校に於ける下級學年の學生に課すべき國語副讀本として、その情操を振作せしめ、その人格を陶冶しようとする目的の下に編纂したものであります。

一、本書は、成るべく短い章節を抄出することを避け、一篇の全部を採り得るものを選びました。上記の目的を達成するためには、ある纏つた感銘を受けしめることが最も重要であると信ずるからであります。

一、優秀な藝術品であること、人生の暗示に富み學生の道德觀念を内面より刺戟するやうな題材を扱つたものであること等は、初版以來變らぬ編纂上の標準であります。

一、本書は、主として中等諸學校の下級學年用として編纂いたしました。材料の性質上、教授者の手加減によつては上級學年にも適用し得るものと信じます。

一、作家各位の作品を採録するに方つて、一部を改竄若しくは割愛いたしましたのは、

恐らく各位の意に反くことであらうと思ひますが、これは教科書として止むを得ないことで、末段ながら御諒恕を冀ふ次第であります。

一、本書は、大方の歓迎と垂教とによつて、茲に改訂を加へて第三版(上中下三卷)を發行するに至りました。今後とも御示教を吝まれぬやう、教授者各位に御願ひ申し上げます。

昭和二年十月

人生は短く藝術は長しといふ。藝術の力によつて人生を深くしたい。——これが本書の期待である。

現代文學讀本(第三版) 下

目次

一	父と子	島崎藤村	四
二	石	室生犀星	三九
三	短歌大觀 その一	正宗白鳥	四四
四	光秀と紹巴	久米正雄	九
五	棧道	芥川龍之介	二六
六	鼻	佐藤春夫	一四三
七	苦行者と蛙	菊池寛	一五六
八	短歌大觀 その二		一五四
九	恩讐の彼方に		

一〇	熊谷蓮生坊	山本有三	二〇四
----	-------	------	-----

一 父と子

島崎 藤村

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集つて、そこにある柱の側へ各自の背丈^{せぢ}を比べに行つた。次郎の背の高くなつたのにも驚く。家中で一番高いあの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで届きさうに見える。毎年の暮に、郷里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒になる太郎よりも、次郎の方が背はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狭い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは、一人づつその柱を背にして立たせられた。そんなに背延びしては狡^こいと言出すものがあり、もつと頭を平にしてなどと言ふものがあつて、家中のものがみんなで大騒ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で

洋島大學
圖書印

柱の上に記しつけて置いた。誰の戲から始まつたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ／＼には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

「誰だい、この線は」

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお徳のがある。いつぞや遠く満洲の果から家をあげて歸國した親戚の女の兒の背丈までも、そこに残つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の背は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。

四人ある私の子供の中で、身長^{身長}の發育にかけては三郎が一番おくれた。一頃の三郎は妹の末子よりも低かつた。日頃、次郎最眞の下女は、何かにつけて「次郎ちゃん、次郎ちゃん」で、そんな背の低いことでも三郎をからかふと、その度に三郎は口惜しがつて、

「悲觀しちまふなあ。——背はもうあきらめた」

とよく嘆息した。その三郎がめき／＼と延びて来た時は、いつの間にか妹を超越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしさのあまり、手を振つて茶の間の柱の側を歩き廻つた。くらゐだ。さういふ私が同じ場所に行つて立つて見ると、殆ど太郎と同じほどの高さだ。私は春先の筍のやうな勢でずん／＼成長して来た次郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさへもある。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとしてゐる時であつた。こんなにも大きな大きくなつて、めい／＼一部屋づつを要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狭苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ、この兄弟は二人ともある洋畫研究所の研究生であつたから、末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關

側の四疊半に籠つてそこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして来た。今一部屋もあつたらと、私達は言暮して来た。それに、二階は明るいやうでも西日が強く照りつけて、夏などは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では、濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも来る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

「こゝの家には飽きちやつた」と言出すのは三郎だ。

「父さん、僕と三ちゃん二人で行つて探して来るよ。好い家があつたら、父さんは見においで。」

次郎は次郎で、こんな風に引受け顔に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

今更のやうに、私は住慣れた家の周囲を見廻した。こゝは一番近

いポストへちよつと葉書を入れに行くにも二町はある。煙草屋へ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋へも五六町はあつて、どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならぬ。慣れて見ればよくそれで不便とも思はずに暮して来たやうなものだ。離れて行かうとするに惜しいほどの周囲でもなかつた。

實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにおられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、兎角心も落ちつかなかつた。

ある日も、私は次郎と連立つて、麻布笄町マフツバシから高樹町あたりをさんぐ探し廻つた揚句、住心地の好ささうな借家も見當らずじまひに、空しく植木坂の方へ歸つて行つた。いつでもあの坂の上に近

いところへ出るとそこに自分等の家路が見えて来る。誰かしら見知つた顔にも逢ふ。暮から道路工事の始まつてゐた電車通も石やアスファルトにすつかり敷きかへられて、橡もみぢの並木のすがたも何となく見直す時だ。私は次郎と二人でその新しい歩道を踏んで、鰯屋の店の前あたりから、ある病院のトタン塀に添うて歩いて行つた。植木坂は勾配の急な、狭い坂だ。その坂の降口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦塀、そこにある蔦の蔓、すべて身にしみるやうに思はれて来た。

下女のお徳は家の方に私達を待つてゐた。私達が坂の下の石段を降りるのを登のぼ音で聽知るほど、最早三年近くも、お徳は私の家に奉公してゐた。主婦といふものがない私の家では、子供等の着物の世話まで下女に任せてある。このお徳は臺所の方から肥つた笑顏を見せて、半分子供等の友達のやうな慣れ／＼しい口をきいた。

「次郎ちゃん、好い家があつて？」

「駄目」

次郎はがっかりしたやうに答へて、玄關の壁の上へ鳥打帽をかけた。私も冬の外套を脱いで置いて、借家探しに草臥れた眼を自分の部屋の障子の外に移した。僅ばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も淺かつた。

私が早く自分の配偶者を失ひ、六歳を頭に四人の幼いものをひかへるやうになつた時から、既にこんな生活は始まつたのである。私はいろ／＼な人の手に子供等を託して見いろ／＼な場所にも置いて見たが、結局父としての自分が進んで面倒を見るより外に、母親のない子供等をどうすることも出来ないのを見出した。不自由な男の手一つでも、どうにか吾が兒の養へないことはあるまい、その決心に到つたのは、私が遠い外國の旅から自分の子供の側に

歸つて來た時であつた。その頃の太郎は漸く小學の課程を終りかける程で、次郎はまだ腕白盛りの少年であつた。私は愛宕下のある宿屋にゐた。二部屋あるその宿屋の離れ座敷を借切つて、太郎と次郎の二人だけをそこから學校へ通はせた。食事の度には宿の女中が餉臺などを提げながら、母屋の臺所の方から長い廊下づたひに、私達の部屋まで支度をしに來てくれた。そこは地方から上京する馴染の客をおもに相手としてゐるやうな家で、入替り立替り滞在する客も多い中に、子供を連れながら宿屋住居する私のやうなものも珍しいと言はれた。

外國の旅の經驗から、私も簡單な下宿生活に慣れて來た。それを私は愛宕下の宿屋に應用したのだ。自分の身のまはりのことは成るべく人手を借りずに、そればかりでなく、子供にあてがふ菓子も自分で町へ買ひに出だし、子供の着物も自分で疊んだ。

この私達にはいつの間にか、いろ／＼な隠し言葉も出來た。

「あゝ、また太郎さんが泣いちやつた」

私はよくそれを言つた。少年の時分には有りがちなことながら、兎角兄の方は「泣き易かつたから、夜中に一度づつは自分で眼をさまして、そこに眠つてゐる太郎を呼起した。子供の「泣いたもの」の始末にも人知れず心を苦しめた。そんなことで顔を紅らめさせるでもあるまいと思つたから。

次第に、私は子供の世界に親しむやうになつた。よく見ればそこにも流行といふものがあつて、石蹴り、めんこ、劍玉、べい獨樂といふ風に、あるものは流行り、あるものは廢れ、子供の喜ぶ玩具の類までが時につれて移り變りつゝある。私は又二人の子供の性質の相違をも考へるやうになつた。正直で、根氣よくて、眼をパチクリさせるやうな癖のあるところまで、何となく太郎は義理ある祖父さんに

似て來た。それに比べると、次郎は私の甥を思ひ出させるやうな人懐こいところと氣象の鋭さがあつた。この弟の方の子供は、宿屋の亭主でも誰でも遣りこめるほどの理窟屋だつた。

盆が來て、みそ萩や酸漿で精靈棚を飾る頃には、私は子供の母親の位牌を旅の鞆の中から取出した。宿屋住居する私達も門口に出て、宿の人達と一緒に麻幹を焚いた。私達は順に迎へ火の消えた跡をまたいだすると、次郎はみんなの見てゐる前で、

「どれ、三ちゃんや末ちゃんの分をもまたいで。」

と言つて、二度も三度も焼残つた麻幹の上を飛んだ。

「あゝ、いふところは、どうしても次郎ちゃんだ」

と宿屋の亭主は快活に笑つた。

やゝもすれば兄を凌がうとするこの弟の子供を抑へて、何を言はれても黙つて従つてゐるやうな太郎の性質を延して行くとい

ふことに、絶えず私は心を勞しつゞけた。その心づかひは、子供から眼を離させなかつた。町の空で、子供の泣聲や喧嘩する聲でも聞きつけると、私はすぐに座を起つた。離れ座敷の廊下に出て見た。それが自分の子供の聲でないことを知る迄は安心しなかつた。

私のところへは來客も多かつた。ある酒好きな友達が、この私を見に來た後で、久しぶりで何處かへ誘はうと思つたが、あゝして子供をひかへてゐるところを見ると、どうしてもそれが言出せなかつた。と人に語つたといふ。その話を私は他の友達の口から聞いた。でも、私も、引込んでばかりはゐられなかつた。世間に出て友達仲間には交はりたいやうな夕方でも來ると、私は太郎と次郎の二人を引連れて、いつでも腰巾着づきで出掛けた。

そのうちに、私は末子をもその宿屋に迎へるやうになつた。私は額に汗する思で末子を迎へた。

「二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ」

と私も考へ直した。長いこと親戚の方に預けてあつた娘が學齡に達するほど成人して、また親の懷に歸つて來たといふことは、私に取つての新しい歡びでもあつた。その頃の末子はまだ人に髪を結つて貰つて、お手玉や千代紙に餘念もないほどの小娘であつた。宿屋の庭のまゝ、ごとに、松葉を魚の形につなぐことなどは、殊にその幼い心を樂しませた。兄達の學校も近かつたから、海老茶色の小娘らしい袴に學校用の鞆で、末子をもその宿屋から通はせた。にはかに夕立でも來さうな空の日には、私は娘の雨傘を小脇にかゝへて、それを學校まで届けに行くことを忘れなかつた。

私達親子のものは、足掛二年ばかりの宿屋住居の後で、そこを引揚げることにした。愛宕下から今の住居のあるところまでは、歩いてもさう遠くない。電車の線路に添うて長い榎坂を越せば、やがて

植木坂の上に出られる。私達は宿屋の離れ座敷にあつた古い本箱や机や箆笥などを荷車に載せ、相前後して今の住居に引移つて来たのである。

今の住所へは私も多くの望をかけて移つて来た。婆やを一人雇ひ入れることにしたのもその時だ。太郎は既に中學の制服を着る年頃であつたから、すこし遠くても電車で私の母校の方へ通はせ、次郎と末子の二人を愛宕下の學校まで毎日歩いて通はせた。その頃の私は二階の部屋に陣取つて、階下を子供等と婆やにあてがつた。

しばらくするうちに、私は二階の障子の側で自分の机の前に坐りながらも、階下に起るいろ／＼な物音や、話聲や、客のおとづれや、子供等の笑ふ聲までを手に取るやうに知るやうになつた。それ

もその筈だ。餌を拾ふ雄鶏の役目と、翼をひろげて雛を隠す母鶏の役目とを兼ねなければならなかつたやうな私であつたから。

どうかすると、末子の啜り泣く聲が階下から傳はつて来る。それを聞きつける度に、私はしかけた仕事を捨てて、梯子段を驅降りるやうに二階から降りて行つた。

私は直ぐ茶の間の光景を讀んだ。いきなり箆笥の前へ行つて、次郎と末子の間に入つた。太郎はと見ると、そこに争つてゐる弟や妹をなだめようでもなく、たゞ途方に暮れてゐる。婆やまでそこいらをまご／＼してゐる。

私は何も知らなかつた。末子が何をしたのか、どうして次郎がそんなにまで平素の機嫌をそこねてゐるのか、さつぱり解らなかつた。たゞ／＼私は、まだ兄達二人との馴染も薄く、こゝろぼそく、兎角里心を起しやすくしてゐる新参者の末子がそこに泣いてゐるのを

見た。

次郎は妹の方を鋭く見た。そして言つた。

「女のくせに、威張つてゐやがらあ」

この次郎の怒氣を帯びた調子が、はげしく私の胸を打つた。

兄とは言つても、その頃の次郎は漸く十三歳ぐらゐの子供だつた。日頃感じ易く、涙もろく、それだけ激し易い次郎は、私の蔭に隠れて泣いてゐる妹を見ると、さもいま／＼しさうに

「父さんが來たと思つて、好い氣になつて泣くない」

「喧嘩は止せ。末ちやんを打つなら、さあ父さんを打て」

と私は箆笥の前に立つて、やゝもすれば妹をめぐめて打ちかゝらうとする次郎をさへぎつた。私は身をもつて末子を庇護ふやうにした。

「父さんが見てゐないと直ぐこれだ」と、また私は次郎に言つた。ど

うしてさう解らないんだらうなあ、末ちやんはお前達とは違ふぢやないか。よそから父さんの家へ歸つて來た人ぢやないか」

「末ちやんのお蔭で、僕が父さんに叱られる」

その時、次郎は子供らしい大聲を揚げて泣出してしまつた。

私は家の内を見廻した。丁度町では米騒動以來の不思議な沈黙がしばらくあたりを支配した後であつた。市内電車従業員の罷業の噂も傳はつて來る頃だ。植木坂の上を通る電車も稀だつた。たまたに通る電車は町の空に悲壯な音を立てて、窪い谷の下にあるやうな私の家の四疊半の窓まで物凄く響けて來てゐた。

「家の内も、外も嵐だ」

と私は自分に言つた。

私が二階の部屋を太郎や次郎にあてがひ、自分は階下へ降りて來て、立關側の四疊半に坐るやうになつたのも、その時からであつ

た。そのうちに、私は三郎をも今の住居の方に迎へるやうになつた。私は獨で手を揉みながら、三郎をも迎へた。

「三人育てるも、四人育てるも、世話する身には同じことだ」

と末子を迎へた時と同じやうなことを言つた。それからの私は、茶の間にある末子のよく見えるやうなところで、二階の梯子段を昇つたり降りたりする太郎や次郎や三郎の登音あがこゑもよく聞えるやうなところで、ずつと坐り續けてしまつた。

こんな世話も子供だから出來た。私は足掛五年近くも奉公してゐた婆やにも、それから今のお徳にも、串談半分によくさう言つて聞かせた。もしこれが年寄の世話であつたら、いつまでも一つことを氣に掛けるやうな年老いた人達を、どうしてこんなに養へるものではないと。

私達がしきりに探した借家も容易に見當らなかつた。好ましい住居も少いものだつた。三月の節句も近づいた頃に、また私は次郎を連れて一軒別の借家を見に行つて來た。そこは次郎と三郎とで精しい見取圖まで取つて來た家で、二人ともひどく氣に入つたと言つてゐた。青山五丁目まで電車で、それから數町ばかり歩いて行つたところを左へ折れ曲つたやうな位置にあつた。部屋の數が九つもあつて、七十五圓なら貸す。それでも家賃が高過ぎると思ふなら、今少しは引いてもいゝと言はれるほど長く空屋になつてゐた古い家で、造作もよく、古風な中二階ちゆうじなど殊におもしろく出來てゐたが、部屋が多過ぎて未だに借手がないとのこと。よつほど私も心が動いて歸つて來たが、一晚寢て考へた上に、自分の住居には過ぎたものとあきらめた。

適當な借家の見當り次第に移つて行かうとしてゐた私の家で

は、障子も破れたまゝ、かまはずに置いてあつた。それが氣になるほど眼について來た。せめて私は毎日眺め暮す身のまはりだけでも繕ひたいと思つて、障子の切張りなどをしてゐると、そこへ次郎が來て立つた。

「父さん、障子なんか張るのかい」

次郎はしばらくそこに立つて、私のすることを見てゐた。

「引越して行く家の障子なんか、どうでもいいのに」

「だつて、七年も雨露を凌いで來た屋根の下ぢやないか」と私は言つて見せた。

煤けた障子の膏藥張りを續けながら、私は更に言葉をつゞけて、「ホラ、この前に見て來た家さ、あそこはまるで主人公本位に出來た家だね。主人公さへよければ、ほかのものなどはどうでもよいといふ家だ。唯主人公の部屋だけが立派だ。あゝいふ家を借りて住む

人もあるかなあ。そこへ行くと、二度目に見て來た借家の方がどのくらいゐいゝか、知れないよ。いかに言つても父さんの家には大き過ぎるね」

「僕も最初見つけた時に、大き過ぎるとは思つたが――」

この次郎は私の話を聞いてゐるのかと思つたら、何かもぢくしてゐた後で、私の前に手をひろげて見せた。

「父さん、月給は」

この「月給」が私を笑はせた。毎月私は三人の子供に「月給」を拂ふことにしてゐた。月の初と半ばとの二度に分けて、半月に一圓づゝの小遣を渡すのを、私の家ではさう呼んでゐた。

「今月はまだ出さなかつたかねえ」

「父さん、けふは二日だよ。三月の二日だよ」

それを聞いて、私は黒いメリンスを卷きつけた兵兒帶の間から

墓口を取出した。その中にあつた金を次郎に分け、丁度そこへ外からテニスの運動具をさげて歸つて來た三郎にも分けた。

「へえ、末ちゃんにも月給」

と私は言つて茶の間の廊下の外で古い風琴を靜に鳴してゐる娘のところへも分けに行つた。その時、銀貨二つを風琴の上に載せた戻りがけに、私は次郎や三郎の方を見て、半分串談の調子で、

「天麩羅の立食なんか、ごめんだぜ」

「父さん、そんな立食なんかするものか。そこは心得てゐるから安心してお出よ」と次郎は言つた。

楽しい桃の節句の季節は來る。月給にはありつく、やがて新しい住居での新しい生活も始められる。その一日は子供等の心を浮立たせた。末子も大きくなつて、もう雛いぢりでもあるまいといふところから、茶の間の床には古い小さな雛と五人囃子などをしるし

ばかりに飾つてあつた。それも子供等の母親がまだ達者な時代からの形見として残つたものばかりだつた。私が自分の部屋に戻つて障子の切張を濟す頃には、茶の間の方で子供等の盛な笑ひ聲が起つた。お徳の賑かな笑ひ聲もその中に混つて聞えた。

見ると、次郎は雛壇の前あたりで、大騒ぎを始めた。暮の築地小劇場で「子供の日のあつた折に、たしか、そら豆の煮えるまで」に出て來る役者から見て來たらしい身振り、手眞似が始まつた。次郎はしきりに調子に乗つて、手を左右に振りながら茶の間を踊つて歩いた。

「おい、父さんが見てるよ」

と言つて、三郎はそこへ笑ひころげた。

私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた。

私は茶の間に集る子供等から離れて、獨で自分の部屋を歩いて見た。僅ばかりの庭を前にした南向きの障子からは、家中で一番靜な光線が射して來てゐる。東は窓だ。二枚の硝子戸越しに、隣の大家さんの高い塀と檜の樹とがこちらを見おろすやうに立つてゐる。その窓の下には、地下室にでもゐるやうな靜さがある。

丁度三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ。思ひがけない病が五十の坂を越した頃の身に起つて來た。私はどつと床についた。その時の私は再び起つことも出來まいかと人に心配された程で、茶の間に集る子供等まで一時靜まり返つてしまつた。

どうかすると子供等のすることは、病んでゐる私をいら／＼させた。

「父さんを忿らせることが、父さんの體には一番悪いんだぜ。それ

くらゐのことがお前達に解らないのか」

それを私が寢ながら言つて見せると、次郎や三郎は頭をかいてすご／＼と障子のかげの方へ隠れて行つたこともある。

それからの私はこの部屋に寢たり起きたりして暮した。珍しく氣分の好い日が來た後には、また疲れやすく、眩暈心地のするやうな日がつゞいた。毎朝の氣分がその日の健康を豫報する晴雨計だつた。私の健康も確實に恢復する方に向つて行つたが、いかに言つてもそれが遅緩でもどかしい思をさせた。何程の用心深さで私は折々の暗礁を乗越えようと努めて來たか知れない。この病弱な私が、兎も角も住居を移さうと思ひ立つまでに漕ぎつけた。私は何か斯う眼に見えないものが群り起つて來るやうな心持で、本棚がはりに自分の藏書のしまつてある四疊半の押入をもあけて見た。いよ／＼この家を去らうと心をきめてからは、押入の中など

も、まるで物置のやうになつてゐた。世界を家とする巡禮者のやうな心で、あちこちと提げ廻つた古い鞆——その外國の旅の形見が、まだそこに残つてゐた。

「子供でも大きくなつたら」

私はそればかりを願つて來たやうなものだ。あの愛宕下の宿屋の方で、太郎と次郎の二人だけを側に置いた頃は、まだそれでも自由がきいた。腰巾着つきでも何でも、自分の行きたいところへ出掛けられた。末子を引取り、三郎を引取りするうちに、眼には見えなくても、降積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。

しかし私は獨で子供を養つて見てゐるうちに、だん／＼小さなものの方へ心をひかれるやうになつて行つた。年若い時分には、私

も子供などはどうでもいゝと考へた。却つて足手纏ひだぐらゐに考へたこともあつた。知る人も少い遠い異郷の旅などをして見歸國後は子供の側に暮して見、次第に子供の世界に親しむやうになつて見ると、以前に足手纏ひのやうに思つたその自分の考へ方を改めるやうになつた。世はさびしく、時は難い。明日は、明日はと待ち暮して見ても、いつまで待つてもそんな明日がやつて來さうもない。眼前に見る事柄から起つて來る多くの失望と幻滅の感じとは、いつでも私の心を子供に向けさせた。

さうは言つても、私が自分の直ぐ側にゐるものの友達になれた譯ではない。私は今の住居に移つてから、三年も子供の大きくなるのを待つた。その頃は太郎もまだ中學へ通ひ、婆やも家に奉公してゐた。釣だ遠足だと言つて、日曜毎に次郎もびつとしてゐなかつた時代だ。一體次郎はおもしろい子供で、一人で家の内を賑かしてゐ

た。夕飯後の茶の間に家のものが集つて、電燈の下で話しこむ時が
来ると、弟や妹の聞きたがる怪談などを始めて、夜の更けるのも知
らずに、皆を恐^{おそ}がらせたり、楽しませたりするのも次郎だ。そのかは
り、いたづらも烈しい。私がよく次郎を叱つたのは、この兒をたしな
めようと思つたばかりでなく、一つには婆やと子供等の間を調節
したいと思つたからで、太郎最眞の婆やは、何かにつけて「太郎さん、
太郎さん」で、それが次郎をいら／＼させた。
この次郎がいつになく顔色を變へて、私のところへやつて來た
ことがある。

「我儘だ、我儘だつて、どこが我儘だ」
見ると、次郎は顔色も青ざめ、少年らしい怒に震へてゐる。何がそ
んなにこの兒を憤^{いら}らせたのか、よく思ひ出せない。しかし、私も黙つ
てはゐられなかつたから、

「お前の暴れ者は研究所でも評判だといふぢやないか」
「誰が言つた。」

「彌生町の奥さんがいらしつた時に、なんでもそんな話だつたぜ」
「知りもしないくせに。」

次郎が私に向つて、こんな風に強く出たことは、後にも先にもな
い。急に私は自分を反省する氣にもなつたし、言葉の上の争になつ
てもつまらないと思つて、それぎり口をつぐんでしまつた。

次郎がふいと表へ出て行つた後で、太郎は二階の梯子段を降り
て來た。その時、私は太郎をつかまへて、

「お前はあんまり濫^{おな}順^な過ぎるんだ。お前が一番の兄さんぢやない
か。次郎ちゃんに言つて聞かせるのも、お前の役ぢやないか」

太郎はこの側杖を喰ふと、持前のやうに口を尖らしたがり、物も
言はないで引下つてしまつた。さういふ場合に、私のところへ來て

太郎を辯護するのは、いつでも婆やだつた。

しかし、私は子供を叱つて置いては、いつでも後で悔いた。自分ながら、自分の聲とも思へないやうな聲の出るのに呆れた。私は獨で唇を噛んで、仕事もろく／＼手につかない。片親の悲しさには、私は子供を叱る父であるばかりでなく、そこへ提げに出る母をも兼ねなければならなかつた。丁度三時の菓子でも出す時が來ると、一人で二役を兼ねる俳優のやうに、私は母の方に早替りして、茶の間の火鉢の側へ盆を並べた。次郎の好きな水菓子などを載せて出した。

「さあ、次郎ちゃんもおあがり。」
すると、次郎はしぶ／＼それを食つて、やがて機嫌を直すのであつた。

私の四人の子供の中で、三郎は太郎と三つちがひ、次郎とは一つちがひの兄弟にあたる。三郎は次郎の暴れ屋ともちがひ、また別の

意味でよく私の方へ突きかゝつて來た。何をこしらへて食はせ、何を買つて來てあてがつても、この兒はまだ物足りないやうな顔ばかりを見せた。私の姉の家の方から歸つて來たこの兒は、容易に胸を開かうとしなかつたのである。上に二人も兄があつて、絶えず頭を抑へられることも、三郎を不平にしたらしい。それに、次郎最眞のお徳が、婆やに替つて私の家に奉公に來るやうになつてからは、今度三郎が納らない。丁度婆やの太郎最眞で、兎角次郎が納らなかつたやうに。

「三ちゃん、人を打つちやいやですよ。ひどいことをするのねえ、この人は。」

「なんだ、なんにもしやしないぢやないか。ちよつと觸つたばかりぢやないか。」

お徳と三郎の間には、こんな小ぜり合ひが絶えなかつた。

「父さんはお前達を悪くするつもりでゐるんぢやないよ。お前達を好くするつもりで育ててゐるんだよ。母さんでも生きて御覽、どうして言ふことをきかないやうな子供は、よつほどひどい目に遇ふんだぜ。——あの母さんは氣が短かつたからね」

それを私は子供等に言聞かせた。あまり三郎が他人行儀なのを見ると、時には私は思ひ切り打懲さうと考へたこともあつた。ところが、幼少な時分から自分の側に置いた太郎や次郎を打懲すことは出来ても、十年他まに預けて置いた三郎に手を下すことは、どうしても出来なかつた。ある日、私は自分の忿を抑へきれないことがあつて、今の住居の玄關のところ、思はずそこへやつて来た三郎を打つた。不思議にも、その日からの三郎は却つて私に馴染むやうになつて来た。その時も、私は自分の手荒な仕打を後で悔いはしたが、「十年他へ行つてゐたものは、父さんの家へ歸つて来るまでに、ど

うしたつてまた十年はかゝる」

三郎の言葉

私はそれを家のものに言つて見せて、よく嘆息した。

私達が住慣れた家の二階は、東北が廊下になつてゐる。窓が二つある。その一つからは、小高い石垣と板塀とを境に、北隣の家の茶の間のの白い小障子まで見える。三郎はよくその窓へ行つた。遠い郷里の方の木曾川の音や少年時代の友達のことなどを思ひ出し顔に、その窓のところでしきりに鶯の啼聲の眞似を試みた。

「うまいもんだなあ。とても鶯の名人だ」

三郎は階下の臺所に來て、そこに働いてゐるお徳にまで自慢して聞かせた。

ある日、この三郎が私のところへ來て云つた。

「父さん、僕の鶯を聞いた？僕がホウ、ホケキヨとやると、隣の家の方でもホウ、ホケキヨとやる。僕は隣の家に鶯が飼つてゐるの

かと思つた。それほど僕もうまくなつたかなあと思つた。ところがねえ、本物の鶯が僕に調子を合せてゐると思つたのは、大間違ひさ。それが隣の家に泊つてゐる大學生さ。

何かしら常に不満で、常に獨ぼつちで、自分のことしか考へないやうな顔付をしてゐる三郎が、そんな鶯の眞似などを思ひついて、寂しい少年の日を僅に慰めてゐるのか。さう思ふと、私はこの子供を笑へなかつた。

「母さんさへ達者であたら、こんな思を子供にさせなくとも濟んだのだ。もつと子供も自然に育つたのだ」と私も考へずにはゐられなかつた。

私が地下室に譬へて見た自分の部屋の障子へは、町の響が遠く傳はつて來た。私はそれを植木坂の上の方にも、淺い谷一つ隔てた狸穴まなの坂の方にも聞きつけた。私達の住む家は、西側の塀を境に、あ

る邸つゞきの拔道に接してゐて、小高い石垣の上を通る人の蹠音やいろ／＼な物賣の聲がそこにも起つた。何處の石垣の隅で鳴くとも知れないやうな、ほそ／＼とした地蟲の聲も耳に入る。私は庭に向いた四疊半の縁先へ、鉢を持出して、よく延び易い自分の爪を切つた。

どうかすると、私は子供と一緒になつて遊ぶやうな心も失つてしまひ、自分の狭い四疊半に隠れ、庭の草木を友として、僅に獨を慰めようとした。子供は到底母親だけのものか。父としての自分は、偶然に子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか。——そんな嘆息が、時には自分を憂鬱にした。その度に氣を取直して、また私は子供を護らうとする心に歸つて行つた。

——嵐——

註——□築地小劇場。東京市京橋區築地にある。

□世界を家とする巡禮者のやうな心。(二八頁)箇所にか家を定めず、聖地か

ら聖地へと一生涯遍歴の旅をつゞけてゐる巡禮のやうに、一箇所にこたはらない自在な心持。

□世はさびしく、時は難い。(二九頁)人生は結局孤獨な寂しいものであり、自分の希望や心持に快適な場合は誠に少ないものであるといふこと。

□そこへ提げに出る母。(三二頁)父に叱られてゐる子供を、引渡ふやうに他へ連れて行つて宥めてやる母といふこと。

鑑賞—□讀後の感想をまとめてみることに。

□父である「私」の心の動き方を味ひながら再讀してみるがよい。

□次に擧げた言葉については、特に思索してみることがある。

一「だつて七年も雨露を凌いで来た屋根の下ぢやないか」(二二頁)

一、何程の用心深さで、私は折々の暗礁を乗越えようと努めて来たか知れない。(二七頁)

一、眼には見えなくても、降積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。(二八頁)

一、眼前に見る事柄から起つて来る多くの失望と幻滅の感じとは、いつでも私の心を子供に向けさせた。(二九頁)

一、十年他へ行つてゐたものは、父さんの家へ歸つて来るまでに、どうしたつてまた十年はかゝる」(三四頁)

一、子供は到底母親だけのものか。父としての自分は偶然に子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか。(三七頁)

二 石

室 生 犀 星

私は世に石ほど憂鬱なものはないと思つてゐる。あゝいふ寂しいものを何故人間は愛でるのであるか。

1 蕭條と石に日の入る枯野かな 燕 村

2 こがらしや畠の小石目に見ゆる 同

3 木枯や小石のこける板びさし 同

石が寂しい姿と色とを持つてゐるから人間は好きになれるのだが、反對のものであつたら、誰も好きにならないであらう。その底を搔きさぐつて見たら、石といふものは飽かないものであるからである。寂びは深く心は静である。人間はその成長の途中で石を最初におもちやにするやうであるが、また最後におもちやにするのも石のやうである。俳句が文韻の道の初歩のものであるとしたら、

老いてまた最後の文事の友でなければならぬ。私は幼時川原に遊んで、遠くに石を投げて見て、何秒かの後に初めて憂然たる石と石との相打つ音を聞き、世の幽寂の最初に觸手した感じを抱いたものであつた。自分の手から離れたあとの何秒かの後に、石は何を考へてゐたかも知れなければ、空を行く小鳥が途にそむいて走つたかも知れないが、唯さびしい遠方の音だけは耳に入れたものであつた。その時私は何を思ふたか、音を聞いたとき幽かな喜を感じたことである。その喜は幼くして幽寂の境を敲き得た喜であらうと、今でもさう思つてゐる。

芽の吹く頃になると、踏石や棄石が冬枯の中から身を起して呼吸をしてくるやうに思へた。少くとも何かの鋭さを現したが、それは木の芽草の芽が浮出させてくるのかも知れない。浅い芽の色が蒼古たる石を上と下とから形を描き合せるのかも知れないが、私

は庭へ出て、棄石の麓から簇生する擬寶珠の三角な芽生が石のへりを粗く又細かく縫取るたびに、石の中身も温まつてゐはせぬかと思つた。つくばひの水をかへる朝ごとの水のぬくみに氣づいてゐたのだつたが、石の面も柔いで蒼みが二三日前の雨に増して際立つて來たやうである。棄石ばかりではなく、飛石もしつとりと落着いた色に濡れてゐる。春の色は草木に鋭いが、石にも一層深く現れてゐるやうである。石の表の春はゆるぎなく莊重に出てゐる。私は石の面をなでて見、そのまはりを眺め、皺の間に青い芽のけはひを嗅ぎあてた。

石は絶えず濡れざるべからずといふのは、春早い頃がその鋭さを餘計に感じる時であるからであらう。水の溜る石、溜るほどでもない微かな中くぼみのある石、しかし打水で濡れた石は野卑でなまめかしく、朝の旭のとどかぬ間の石の面の落着きの深さは譬へや

うもなく奥ゆかしい。或は夜來の雨じめりで濡れたのが空明りを慕うてゐるさまは、ほのかなものである。それが飛石である時は、踏みかねる心地がする。朝の間は石の心も静まつてゐると見えるからである。私は或朝蒼黒い棄石の際に一本の露の臺を認め、驚いて眼を瞠つて眺めた。それは一本の簪を持つた何か巨大な生きものの微笑み跼まるのに眼がふれたからであつた。石は庭の主の悲しい時は悲しうな表情をして見せ、機嫌のよい時は、彼も闊達で快然としてゐた。一朝わが思成らざる時その眼を落すのも石床蒼古の上であるが、それよりも先に、彼は綿々の情に堪へざる風姿がある。私はさういふ思で彼と相抱くことを屢感じた。相阿彌が山紫水明の間に心を悲しませ、親兄弟よりも木石交契を慕うたと自ら言つたのもわかるやうな氣がする。少くとも石面一顰の表情に心づいた時には、その人の愛は行着いたのであらう。ある子供が庭へ出

て草の芽の頭をなでてゐたがその子供のしたことは、私の石面をなでると同じいいとしさのあまりである。

—庭をつくる人—

註—□室生犀星。名は照道といひ、明治二十二年石川縣に生れた。詩集小説集隨筆集などの著がある。

□棄石。風致を添へるために、庭園の處々に据ゑおく石。

□つくばひ。手洗ひの水を湛へて置く石。

□相阿彌。足利義政に仕へた畫家で、造庭、詩歌、書、香茶、生花等に通じ、かねて書畫や器物の鑑定に妙を得てゐた。

鑑賞—□無感覺の例に引かれる石も、細かく觀察すれば限りなき趣のあることがわかる。細かく深い物の見方を學ぶべきである。

三 短歌大觀 その一

ひさかたの天に雪ふり不盡の山けふ白妙となりて
けるかな
北原白秋

天つ日のはろばろとして照りみつるこの現し世の
遠富士の山
前田夕暮

山國の月見てありぬわがこゝろいつ哀れにもあら
たまりけむ
與謝野晶子

歸り來て何をなすとはあらねども暮れはてぬ日の
明り樂しも
植松壽樹

わが居間の腰高窓にかげさして椎の若葉はしげり
あひにけり
岩谷莫哀

播磨野は西にはろばろしやはらかき萌黄若葉は雲
のごと見ゆ
土田耕平

茶の株のまろきが並ぶ山の畑日のうすれ來てうぐ
ひす啼くも
松村英一

さゞ波の流れたゆたふ川の面やゝにふくれて汐み
ちむとす
尾上柴舟



朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし並み
よろふ山

齋藤茂吉

刈りしほの麥の穂明り暮れぬれどいよさやけく
蛙子は鳴く

釋 追空

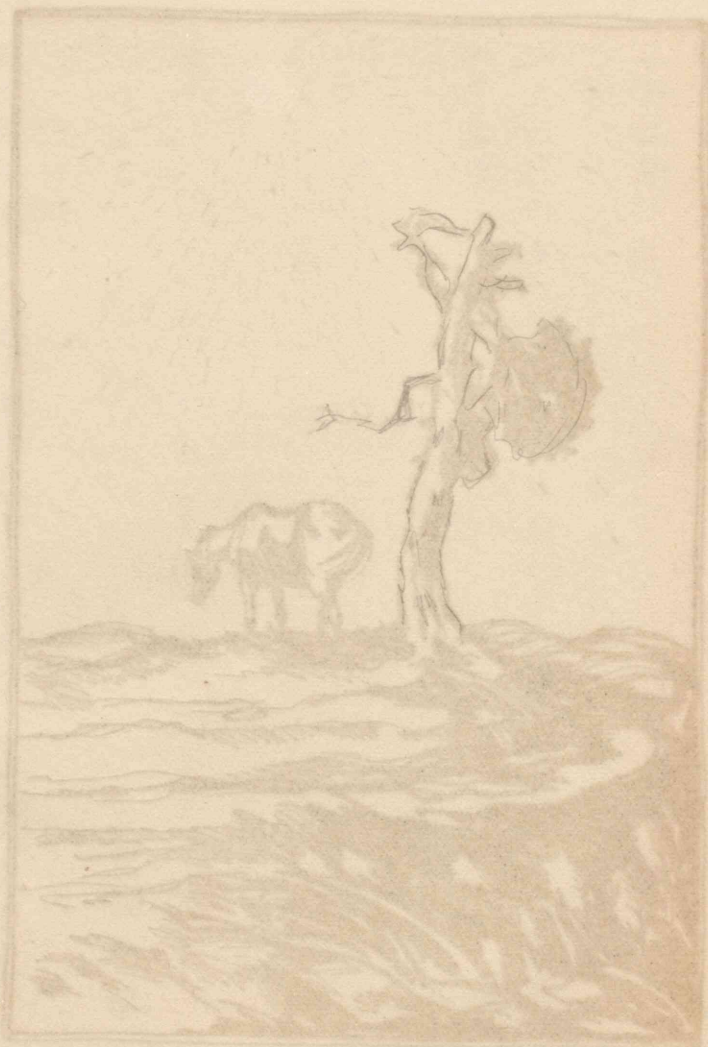
くもり空に明りうつれり町のかた桌まねて行く童
あり

土屋文明

畔みちの草をくゞりて田より田に落ち入る水の音
しづかなる

石井直三郎

筑波根にかゝる叢くも空ひくく霞が浦の水につゞ



けり

植松安

こゝにして岩鷲山のひむがしの岩手の國はかたぶ
(自序の所起)
 きて見ゆ

平福百穂

夏の夜の月のひかりに天なるやあそぶしら雲たの
 しくは見ゆ

窪田空穂

青空は雲かげもなく澄みとほり天づたふ日にさは
 るものなし

藤澤古實

もゆる火の燃えたつ上に天ぎらひみ雪ふりけむ神
 代をぞおもふ

佐々木信綱

(白鳥山の上にて清人の歌)

四 光秀と紹巴

正宗 白鳥

人物

明智 光秀

紹 巴

明智 左馬助

同次 右衛門尉

齋藤 内藏助

藤 田 傳 五

溝尾 勝 兵衛

野 武 士 三 人

侍者、飛脚など。

一ノ一

時は五月二十八日夜。(天正十年)

所は、愛宕山の西の坊。

晝間の連歌興行に用ひた文臺が書類筆硯などを載せたまま置かれてある。その側にほの暗い燈火が置かれてあつて、寢床を並べて寝てゐる二人の姿をかすかに照してゐる。一人は明智光秀(五十五歳)で、一人は連歌師里村紹巴(五十ぐらゐ)である。

光秀、ふと何者かに脅かされたやうに起上つて、室内を見廻し、やがて窓を開けて外を見る。紹巴も頭を上げて、迂散くさい目で光秀の方を見る。光秀何か考へながら寢床へ戻つたが、横になるのを忘れてゐるやうに、蒲團の上に坐る。

紹巴起上る。

紹巴。殿様は御氣分がお悪いので御座いますか。

光秀。いや、氣分は悪くはない(慌てて打消して)おれは面白い句を考へてゐたのだ。

紹巴。面白い句と仰しやるのは？(光秀の顔を見守つて)今日の百韻の連歌のうちでも、殿様のお作りなされた發句は、ことの外凜然としてゐるのに驚きました。それが、それに飽足りないでもつと奇抜な面白い句をお考へ遊ばしてゐるので御座いますか。

光秀。いや、年甲斐もなく、あんな血氣に早つたやうな句を作つたことを、おれは後悔してゐる。古格に通じた其方などの氣にも入らないに違ない。

紹巴。(感慨を籠めて)私どもの守つてゐる連歌の道は、もう末で御座います。誰も彼も、前人の模倣ばかりをして、千篇一律、無味乾燥になりましたから、近年ますます、連歌の衰へるのも無理は御座いますまい。山崎宗鑑や荒木田守武の開いた俳諧の道に志す者を、一概に下賤な好みとして嘲る譯にはまゐりません。

光秀。其方がそんなことを云ふのは不思議だよ。應安の新式目と

か、宗祇や兼良卿の新式追加とか、舊來の連歌道の講釋を後生大事に聽かせてくれてゐた紹巴先生が、今日の卑俗な流行を是認するのはをかしいぢやないか。

紹巴。さう仰せられると一言も御座いません。……私も今夜は眠つてゐながら、いろ／＼と物を考へて居りました。

光秀。其方はさつきまでよく駢を搔いてゐたよ。

紹巴。でも、あなた様がをり／＼溜息をお吐き遊ばすのを、夢のうちに入に入れて居りました。

光秀。おれが溜息を吐いたか知ら。それは其方の夢ぢやないか。……おれは今日、連歌を終へたあとで、直に丹波へ歸城すればよかつたのに、皆の風流な話に引込まれて愚圖々々してゐるうちに、歸りそこねてしまつた。こんな靜な所で考へ事をしてると、却つて頭の疲れるものだな。其方などは氣樂で羨しいよ。

紹巴。それは、あなた様は中國筋御出陣の日が迫つて居りますから、何かとお心遣ひをしていらつしやるので御座いませう。

光秀。おれも長い年月、戦場では艱難辛苦をして來たのだ。今度の門出に格別に心を悩ます譯はないのだが、この頃の蒸暑い鬱陶しい空模様がおれの頭を押しつけるやうで爲様がないよ。今も外の爽やかな夜風に吹かれて頭を冷すつもりだったが、今夜は外の風もじめ／＼してゐていけない。……かういふ時には、氣持のいゝ晴々とした句は思ひ浮ばないものだな。

紹巴。左様で御座いませうか。でも、時は今天が下知る五月かな……御元氣過ぎるほどのいき／＼とした名句では御座いませんか。

光秀。あんな句が何で名句なことがあるものか。徒に文字を並べただけのものだ。西の坊の脇も平凡であつたが、其方の附けた

第三の句だけは、何だか譯がありさうだ。意味深長に思はれるよ。おれは、さつきも、獨でその句の意味を考へてゐた。……「花落つる流れの末を堰きとめて」

紹巴。(慌てて打消すやうに) わたくしの句には何の意味も御座いません。

光秀。いや、さうであるまい。連歌興行の折から、其方の目がおれに何か言つてるやうに思はれてならなかつた。不斷は瓢輕な風流人の其方の顔がおれには眩しくつてならないのだ。

紹巴。どうか左様なことを仰せられないやうに。恐怖に打たれたやうに私には、今日はあなた様のお眼力が胸に響いて怖う御座います。

光秀。いや、其方の眼力が恐しいよ。耳を留めて聞いて見ろ、何處かで梟が鳴いてるだらう。

紹巴。(耳を澄して) なるほど鳴いて居ります。それに一時止んでゐた雨の音が、また微かに聞えだしました。

光秀。外は眞暗だ。おれが生れてから見たことのないほどに氣味の悪い眞暗な闇の夜だ。その闇の中に梟が鳴いてゐるが、其方の目が梟の目のやうにおれには見えるよ。

紹巴。どうか左様なことは仰せられないで、お心を鎮めてお休み遊ばしませ。夏の短夜は明けるに間も御座いますまいから。

光秀。おれはさつきは夜の明けるのを待焦れて、窓の外を覗いて見たのだが、今其方の顔を見てゐると、もつと夜が續けばいゝと思はれるのだ。

紹巴。あなた様の仰しやることが、わたくしにはどうも合點がありません。

光秀。おれも合點が行かない。(燈火の方を見て) その弱々しい燈火

を、おれの溜息で吹消したら、部屋の中も眞暗だ。外の暗さにまけない闇の夜になるのだ。おれと其方との二人きり、闇の世の中に差向ひであることになるのだ。

紹巴。どうか燈火はお消しなさないやうにお願い申します。

ふと、窓から洩れ来る風で燈火が消える。舞臺眞暗になる。

紹巴。(震へ聲で) 殿様どうなされました？

光秀。おれはどうもしない。燈火は自ら消えたのだ。……其方おれとは暗闇の中に向ひ合つてゐるのだが、梟のやうな其方の目では光秀の心の中が見えるのか。

紹巴。私はあなた様の御最眞に預つてゐる平凡な連歌師で御座います。どうしてあなた様のお心の中が解りませう。……わたくしは燈火を持つてまゐりませう。

光秀。まあ待て。……其方は晝間、連歌興行の最中に、おれが本能寺

の溝の深さ浅さを訊ねたら、勿體ないお訊ねだとおれを咎めたではないか。この頃降りつゞく五月雨に、何處の溝も水量が増したであらうのに、それを訊ねたのが何故いけないのだ？

紹巴答へず。

光秀。おい、紹巴、返事をしろ。……おれの心に疑を掛けてゐる者は、天下に其方一人だ。……おれが句作に心を取られて、粽イヌモミを包葉カハのまゝ、噛つたのを、其方はうろんな目付で見えてゐた。……おれの溜息の數までも數へてゐたのだらう。

紹巴答へず。直ぐ側で梟が鳴く。

光秀。貴様は聲までも梟の眞似をしておれを脅すつもりか。

そこへ、ふと、小姓吉之丞が手燭を持って入つて来る。光秀一人が端座してゐて、紹巴の姿は見えない。

光秀。紹巴は何處へ行つた？

小姓。私どもの臥所へまゐつて居ります。

光秀。紹巴を此處へ呼べ。それから、夜明前に出立するから、其方どもも今から仕度に取り掛れ。

小姓。はい。……まだ眞夜中で御座いますが。

小姓は燈火を點ける。

光秀。暗ければ松明の用意をさせろ。闇にも雨にもかまはないで、急いで丹波へ歸るとおれは決心した。

小姓。お供の衆に左様申し傳へます。

小姓次の間に入る。

光秀、文臺を引寄せて、連歌用の懷紙に向つて發句を書きつける。

紹巴は恐るゝ入つて来る。

光秀。これを讀め。

紹巴、懷紙を受取つて讀みながら、光秀の顔色を盗み見する。

光秀。「時は今天が下知る五月かな」(凛然と言放つて)……おれは闇を冒し雨を冒して歸城する決心をしたよ。それで、其方をも一しよに連れて行かうと思つてゐる。

紹巴。(當惑して)私に龜山までお伴しろと仰しやるので御座いますか。

光秀。いやとは云ふまいな。

紹巴。御仰せつけは有り難う御座いますが、旅の用意はいたして居りませんので、一度歸宅いたしました上で。

光秀。それはいかんよ。用意も何もいるものか……其方の目付顔つき、言葉つきの一つ一つがおれの心を動かしてゐるのだ。梟のやうな其方の口がおれの心を突ツついてゐる。おれは其方を離す譯には行かない。龜山へも連れて行く。戰場へも連れて行く。おれの發句の意味が實際にどう働くか、其方のその目で

よく見るやうにしろ。

紹巴。臆病者の私は、戰場は恐しう御座います。

光秀。今日のおれの心の動きをいろ／＼に監視してゐた其方だ。これから先も、おれの側に附添つてゐて、よく見てゐるといふ。(脇差を手を執つて)おれはお前と寢床を並べて、連歌の話をしてゐる間に、いく度この刀に手を掛けようとしたか知れなかつたのだが、今は其方に對して毛頭害意を持つてゐないから安心してゐろ。

紹巴。(おど／＼しながら)お殿様は何故今日に限つて私をお憎み遊ばすので御座いませうか。

光秀。安心しろ。只今は決して其方を憎んではゐないよ。躊躇逡巡してゐたおれを其方は刺戟して、行くところまで行くやうに決心させてくれたやうなものだ。今書いた發句と、晝間書いて

神前に收めた連歌の發句と、同じ文字でも、おれの心の現れが違ふのが、其方に解らないことはあるまい。……晝間はまだ文字に遊があつた。

紹巴。何の御決心で御座いますか。

光秀。空呆けるな。……其方の首を出陣の血祭に備へるかはりに、其方を召連れて、闇の夜を驅廻るのだ。おれの發句がおれの出陣の旗じるしだ。……さつき其方の云つたやうに、人眞似ばかりして古くさい文字の並べつこをしてゐる連歌師も、命懸けの戦場を往來したなら、少しは活氣のある句が作れるやうになるだらう。

紹巴。いえ私どもは、師匠譲りの連歌の眞似事さへいたして居ればよろしいので御座います。大それた望を持つては居りません。

光秀。自分で望まなくつても、其方はおれと一しよに行くところまで行かなければなるまい。其方をおれの目の届くところから放す譯には行かないよ。覺悟をしろ。

紹巴。(やうやく決心したやうに) はい。……では何處まででもお伴いたしませう

光秀。おれは、馴染の深い其方を決して苦しめようとは思つてゐないよ。たゞおれの心に最初に疑を挟んだ其方を打ちやる譯に行かないのだ。だから其方も覺悟をして、行く先々で面白い句でも作つて、おれを慰めてくれ。

そこへ、小姓入つて来る。

小姓。御出立の用意が調ひました。

光秀。さうか。……紹巴先生も丹波へ御同行なさるのだ。(紹巴に向ひ) さあ、行かう。一しよに闇の中をつツ走らう。

光秀、紹巴の腕を取つて引立てる。

一ノ二

闇の中を松明で道を照して、四五騎が馳せてゐる。そのうちの一人は光秀で、一人は紹巴である。紹巴は半死人の如く喘ぎ喘ぎ随いて行く。

光秀 鬱陶しかつたおれの頭も次第に晴々しくなりかけたよ。束の空もいくらか白んで来たではないか。今日は久振りだ。五月晴のうらゝかな空が見られさうだな。

紹巴 御意に御座います。(苦しげに云ふ)

光秀 光秀はもう、昨夕のやうに溜息ばかり吐いてはゐないぜ。(ふと向を見つけて馬を留める)みんな馬を留めろ。向から怪しい奴がやつて来る……紹巴、其方の目ではあれが何だと思はれる？

紹巴 さあ、何で御座いませうか。

光秀 吉か凶か。先見の明のある其方にも解らないのか……燈火

を持つて夜道を急いで此方へまゐる奴は、おれの前途の運にかゝはりがありさうだ。

紹巴 お殿様の御運にかゝはりのあるかないかは解りませんが、今時こんな淋しい野道を通つてゐる人間は、たゞ者では御座いますまい……さう云へば、私も、何のために殿様にお隨き申してこんな夜道を通つてゐるか、われとわが身が解らなくなりました。(泣言のやうに云ふ)

光秀 歌詠みといふ者は、よく〜意氣地がないものだ。(笑ふ)

そこへ飛脚某が急ぎ足で入つて来て、ふと、光秀の一行を見て驚く。會釋して道を避けようとする。

光秀 おい、待て。其方は何者だ？

飛脚 龜山のお城へまゐる者で御座います。

光秀 龜山の城へ？……おれはさつきからさうだらうと思つて

見てゐた。……其方はいゝところでおれに會つたのだ。龜山ま
で行くに及ばん。用事を云へ。聞いてやらう。

飛脚。相手の顔を注視してあなた様は龜山のお殿様でいらつしやい
ますか。

光秀。おれが光秀だ。おれの顔も知らないやうな雑兵を使者に寄
越したのか。……そんなことは兎に角、早く用事を言へ。

飛脚。森お亂所様からの書状を持参いたしました。

光秀。何、蘭丸からの手紙？（興奮して云つて）見せろ。

飛脚。脊負つた包の中から文箱を取出す。従者の一人、それを光秀に捧ぐ。光秀それ
を開けて、従者の差出した松明の光にて讀む。

光秀。承知した。

讀終るとさう云つて、ふと、手紙を松明の火にて燃す。

飛脚。それに驚きながらお亂所様への御返事は承らせて戴く譯には

まゐりますまいか。お殿様へ確にお届け申し上げた證據を戴
きたう存じます。

光秀。おれの返事が欲しいと云ふのか。欲しければ返事をしてや
らう。

光秀。咄嗟に飛脚を斬殺す。紹巴、その他の従者驚く。

光秀。信長公の御上意に、中國出陣の用意が出来たなら、人數のた
づき、家中の馬などの様子を見たいから、早速引連れて京へ上
れと仰せられたと、蘭丸からおれに知らせて來たのだ。主君の
御寵愛を笠に着て、權柄づくでおれに物を云ふ森の小伴の手
紙を焼いて、使者を斬つた。泰然として云つて、紹巴にはおれの心
が分つてゐるだらうな。

紹巴。虚弱な私は、疲勞して夢のやうでございます。
光秀。もう一走りだ。みんな急げ。

光秀馬を走らす。

一ノ三

龜山城外の廣場。六月朔日の夕暮。

明智光秀、小姓吉之丞を連れて出て来る。

光秀 紹巴は城内の何處にもゐないと云ふのだな。

小姓 午の刻までは、あの方は死人のやうな顔して寝てばかり居りましたが、暫く立つて部屋を覗くと、何處へか行つて姿が見つかりません。

光秀 出陣の準備に取りまぎれて、あの男のことは忘れてゐたのだ。……あの臆病者逃げたつてどうもしないだらうが、念のため、一度捜して見る。

小姓 出て行く。光秀床几に腰を掛けて、五月晴の夕空を仰ぐ。そこへ、明智左馬助、同次右衛門尉、齋藤内藏助、藤田傳五、溝尾勝兵衛が入つて来る。

左馬助 皆を召連れてまゐりました。

光秀 (ふと元氣づいて) かうして五人の揃つたのを見ると、おれも非常に心丈夫だよ。

左馬助 殿には人拂ひをなされて、我々五人の者に、火急な御談合があるよと云ふのだ。他の仲間に向つて云ふ

光秀 おれ一人でよく、物を思つてゐるよりも、早く其方たちに相談すればよかつた。長い間おれと艱難を共にしてくれた其方たちにおれの心中を打明けるのを躊躇したのは、愚なことであつた。

内藏助 殿には、先日来ひどく物を案じていらせられたやうに思はれました。愛宕山御參籠を終へて御歸城なされた時には、殿の御顔色はひどくお寢れなされたやうに拜察いたしました。

光秀 愛宕山中の一夜は、おれも氣が狂つたかと思はれるほどの

苦勞をしたよ。一夜のうちに頭の髪も白くなつたかと思はれる。苦笑を洩して、ふと調子を變へて、さつきこの廣場で人數調をした時に、内藏助は、大丈夫一萬三千人は揃つてゐると斷言したが、間違はあるまいな。

内藏助。それに相違は御座いません。皆よく食つて充分に休息してゐる元氣者ばかりで御座いますから、中國へ押出して、戰場の稼ぎは、羽柴殿の軍勢に勝るとも劣る氣遣ひは御座いますまい。

光秀。それは頼もしいな。喜色を浮べて向を見る。

次右衛門尉。(もどかしさうに)我々五人の者への内密の御談合は何事
で御座いませうか。出陣の手配りは既に出來上つてゐるので御座いますか。

光秀。……まあ、おれの申すことを心を落着けてよく聞いてくれ。

……おれも上様のお取立で、三千石の小身から、俄に二十五萬石も拜領いたすやうになつたのだが、岐阜表で三月三日の節句には、大名高家列座の前で、面の皮を剥がれるやうな目に會はされたし、その後、信州上諏訪の御本陣では、欄干に頭を押付けられて、毟り飛ばされて、衆人稠座の中で耻を搔かされた。今度は今度で、徳川殿御饗應のことから、無殘なお叱りを受けて、俄な西國出陣を仰せつけられた。こんな有様では、この次には、どんな我が身の大事に及ぶかも知れないと、おれは案ぜられるよ。

次右衛門尉。殿の御胸中は御推察申し上げて居ります。

傳五。私ども、人知れず無念の涙を呑んだことも御座いました。

光秀。この年になつて、子供か何ぞのやうに、打擲されてゐるのを見た者は、さぞ臍甲斐ない奴だとおれを嘲るだらうな。

勝兵衛。上様はかやうな御氣象だとお思ひになつて、御忍耐遊ばし
たらよろしからうと存ぜられます。上様は特別に殿に對して
お憎しみを持つていらせられるのでは御座いますまい。

光秀。勝兵衛はおれを忍耐力の薄弱な男とでも思つてゐるのか。
勝兵衛。決して左様のことは……

光秀。いや、今はくどくどと愚痴をこぼすために、其方どもを寄せ
集めたのではないよ。おれは非常な決心をしてゐる。

五人は目を凝して光秀を見上げる。光秀は床几を下りて敷皮の上に居直り、五人
の者に近く接す。五人は光秀の言葉を待設けてゐる。

光秀。……老後の思ひ出に、一夜なりとも天下をおれの者にした
いと決心をしてゐる。獨言のやうに云ふ

五人の者驚いて言葉を發せず。

光秀。有爲轉變、榮枯盛衰の世の習だ。一日たりとも望を遂げれば

それでいゝと覺悟を極めた。……其方たちが同意してくれな
ければ、おれ一人で本能寺へ斬込んで、腹を搔切るまでのこと
だ。……其方たちは何と思ふ。

少時沈黙の後。

左馬助。殿御一人の御胸中で左様思召された上は、天知る地知る我
知ると申すたとへの通り、そのまゝでは濟みますまい。まして、
五人の者にお打明けなされたのだから、御實行遊ばす外はあ
るまいと思はれます

内藏助。これほどの大事をよくも御決心遊ばしました。

次右衛門尉。お目出たう存じます、私ども多年の胸のつかへが下つ
たやうに存ぜられます。

傳五。私も双手を擧げて御同意申し上げます。

光秀。(勝兵衛を見て)其方は何と思ふ。おれにもつと忍耐しろと申すか。

勝兵衛。 どういたしまして……明日から、わが殿を上様として仰ぎ奉れるやうに相成りました。こんな喜ばしいことは御座いません。……この上の御談合は御無用かと存ぜられます。

光秀。 五人が五人とも同意してくれて、おれも満足だ。こんな時は、一人や二人は、唐人の古い言葉など持出して諫言だてをしたがるものだが、皆が符節を合せたやうに、意見が一致したのは愉快だ。

左馬助。 この頃は夜が短かう御座いますから、これから直ぐに發足ハツソクいたしませう。ほのぼのと夜の明ける頃に本能寺をひたくと取巻いて、成るべくなら、五つより前に本能寺を片付けて、それから妙覺寺の若大將を討果すやうに手順をつけることにいたしたう御座います。

光秀。 おれもさう思つてゐた。……人數の少い本能寺を片付けるに手間暇は入らないが、何よりも味方の士卒に二心を起させぬやうに注意するのが肝心だよ。

左馬助。 その御心配は御無用で御座います。右へ向はうと、左へ向はうと、士卒どもの出陣の氣持には御座いません。毛利の軍勢へ斬込むのも、本能寺へ矢を向けるのも、彼等の氣持に差別は御座いません。……京近くなつてから、殿が天下様にお成り遊ばすと觸廻らせませう。下々の者、草履取以下にいたるまで、手柄次第で知行を與へると觸れましたら、皆揃つて喜び勇むに相違御座いません。

内藏助。 かう極つたら、一刻も時を遅らせてはならない。速刻出陣のお觸を廻さなければならん。

皆々立上る。

光秀。 氣おくれをするな。(あとから立上る)

六月十日の日暮れ頃。下鳥羽の陣屋。

光秀、入浴後の輕装にて、例の陰鬱な顔して獨酌でチビくやつてゐる。

そこへ侍者が入つて来る。

侍者、紹巴どのがお目通りを願つて居りますが、いかがいたしま
せうか。

光秀、紹巴が来ようとは思ひも掛けぬことだ。

侍者、上様は御多用でお疲れ遊ばしてゐるからと、一應は斷りま
したが、たつてお目通りいたしたいと申しますので。

光秀、會つてやるから直に此方へ通せ。

侍者、はい。

出て行くと、光秀また物を考へながら盃を甜めるをりく團扇をも使ふ。

紹巴、恐るく入つて来て、恭しく平伏する。

光秀、其方にまた會へるとは思はなかつたが、あの後何處で何を
してゐた？

紹巴、戰場を見せてやらうとの仰に背きまして、お許しをも乞は
ないで、龜山のお城を退去しまして、申譯のいたしやうも御座
いません

光秀、それはもう濟んだことだよ……併し、今度の事には其方も
關係があるのだから、時々は其方のことを思ひ出してゐたよ。
紹巴、恐れ入ります。やゝ安心して上様が私を憎んでいらつしやる
やうに思はれましたので、お城を抜けだして、丹波の山中に二
三日潜んで居りました。路用の金は持つてゐませんので、喰ふ
や喰はずのひどい思をいたしました。

光秀、馬鹿な奴だ。其方には骨折賃を與へようと思つてゐたのに。
紹巴、上様の御大業に何一つお役に立たなかつた私にまで、御勝

利の御裾分けをして下さるので御座いますか。天下様におなり遊ばしたお噂を、山中で承りまして、それではお祝に上らなければならぬと思ひまして、急いで京へ戻つてまゐりますと、洛中の地子御免除の有り難い高札を拜見いたしまして、御仁政に感涙を催しました。

光秀 梟のやうな目をした其方も、おれの側に随いてゐなかつたから、真相はなんにも解らないのだな。……まあ一杯やれ。……愛宕山の西の坊の一夜のことが、おれには遠い昔の夢のやうに思はれるよ。

光秀の差す盃を紹巴は受ける。

紹巴 上様お手づからのお酌は勿體なう御座います、それに、あまり御酒をお嗜みにならない上様が、今夜はお一人で召上るのは不思議に思はれますが、

光秀 成程さう思ふだらう。おれもこの頃は連歌をつくる氣持にはなれず、外に鬱憤晴しの手段がないから、酒でも飲むことにしたのだよ。

紹巴 さすがは風雅の道を辨へていらせられるので、尊い御身分で、お手酌を楽しんでいらせられるのは恐れ入ります。

光秀 ところが、かうしてゐても、なか／＼風流な氣持にはなれないのさ。酒といふものは人の心を浮立たせるものと極つてゐるので、その名前に惚れて無理に飲んでゐるもの、ちつともうまくはないよ。心が浮立ちもしない。……酒と云へば、おれは七杯入の大杯を内府殿に押付けられたことがあつたのだ。御辭退すると、酒を呑まんのなら、これを呑めと、鼻先へ白刃を指しつけられたので、おれは夢心地で大杯を呑干したが、内府殿は、さては命は惜しいものなんだと冷笑なされたよ。

紹巴。内府様は殘忍な方で御座いました。

光秀。最早おれに飲めない大杯を押付けるものは、天下に一人もなくなつた譯なんだがそれがおれにとつていゝことだか悪いことだか、おれにはさつぱり解らなくなつた。

紹巴。それはお身分が尊くお成り遊ばすほど、お心遣ひも多う御座いませう。私もは、上様御仁政の下に安穩に日が過されますれば、それで満足いたすので御座います。

光秀。其方はおれの力で天下がおさまると思つて訪ねて來たのか。愛宕の山を闇の中で突抜けて來たおれの名が天下に輝きだしたのを慕つてやつて來たのか。

紹巴。もはや私に對するお疑は解けたことと存じまして。

光秀。其方があの時おれのことを本能寺へ注進するか知れないと氣遣つてゐたのだが、それはもう濟んだことだ……これか

らおれの側にゐてくれ。決して無慈悲な取扱はしないよ……

たとへ、まだ連歌の遊をする氣にはなれなくつても、其方のやうな男が側にゐてくれるとおれは好きでもない酒をチビチビ飲むよりは、氣晴しになつていゝのだ。

紹巴。上様のお側に置いて戴ければ、これほど仕合せなことは御座いせんが、戰場のお役に立たない私が、お側でまごゝしてゐましては、却つてお目障りになりさうに思はれます。

光秀。いや、其方も知つてる通り、おれは、内府殿や以前の朋輩とは好みが違つて、女子供を側に置いて酒宴を催すことには、あんまり興味をもつてゐないのだよ。其方のやうな男と、とぼけた話でもしてゐる方が、おれの柄に合つてゐるのだらうな……ところ、紹巴、おれはひどく人氣の悪い男だよ。大望を遂げた今日、しみじみ、それに氣がついたよ。松永彈正でもおれほどに

は世間から毛嫌ひされてはゐなかつたらうな。

紹巴。私には左様に存ぜられませんが……

光秀。其方は愛宕の山でおれの心を見破つた最初の男だが、今日

以後のおれの運勢をどう思つてゐる？（相手を注視する）

紹巴。私はたゞの連歌師で御座います。上様の御運勢のよろしいやうにと願つて居りますばかりで、世上の事は何事も解りません。

光秀。今まで神隠しに隠されてゐたやうな其方が、今日だしぬけにやつて来たのは、何か深い譯がありさうにおれには思はれるのだが……兎に角、今夜から、おれの陣所へ留めて置くから、その覺悟をしてゐてくれ。荒武者ばかりに取りまかれてゐるので、おれの息が詰りさうなのだ。

紹巴當惑してゐる。そこへ内藏助が入つて来る。

内藏助。紹巴殿か。優長らしく酒のお相手などして……早くお立ち

なさい。

光秀。さうむづかしく言ふな。この男は陣屋に留めて置いてくれ。この男はおれの運を左右する魔力を持つてゐさうに思はれてならないのだから……今日だしぬけに訪ねて来たのが、おれの仕事に關係がありさうに思はれてならないのだよ。この男を歸さないで留めて置いてくれ……紹巴、其方は暫く次の間に控へてゐろ。

紹巴、おどくして入つて行く。

内藏助。あんな坊主をなぜお相手になさいます。（不機嫌に云つて）……

たゞ今、郡山から使の者が歸りましたが、筒井順慶はお味方に加はる望は全くなりませんでした。郡山の城内に兵糧を貯へて、我々に敵たふ準備をしてゐるさうで御座います。こちらから

持出した有利な条件さへ受入れる見込はなささうで御座います。

光秀 あの手算的の男がさう思つたのは、いよゝゝわが軍勢に勝目がないと見込んだのだな。

内藏助 どうせ他人は頼みになりません。われゝゝだけでやれる所までやるより外、爲様が御座いますまい。

光秀 婿の忠興にさへ憎まれたおれだが、かうまで四方八方から愛想をつかさねようとは思はなかつた。……併し、内藏助、其方たちはまだおれに背かうとはしないか。

内藏助 何を仰せられます。衣服に火のついたやうな只今の場合に、無用な口を利いてはゐられません。

光秀 それもさうだ。速刻皆を集めて置け。今後の方針を極めよう。……どうせ、龜山出立の際のやうに衆議一決といふ譯には行

くまいな。

内藏助 しかし、仲間内は主君と生死を一つにする覺悟がついて居りますから、それだけは御安心遊ばしませ。

光秀 ウ、ン。(氣乗りのしない返事をする)

内藏助 出て行く。光秀はなほ盃を甜めてゐる。顔には憂鬱の色が加はる。ふと側の團扇を取つて煽ぐ。やがて隣室から唸り聲が聞える。光秀不思議さうに耳を傾けて、座を立ちかける。

光秀 誰れだ？唸つてゐるのは。

紹巴 私で御座います。紹巴で御座います。

光秀 どうしたのだ。腹痛でも起したのか。

紹巴 只今内藏助様に手足を縛られました。

光秀 (微笑して) 内藏助に縛られたのか。なぜそんな目に會はされた？

紹巴。生死の騒の場合に邪魔ツけど、不吉な奴だとお怒りになつて、あの榮螺のやうな拳で私の頬骨をお殴りになりました。それで私を柱に縛りつけて、此處を動くなと仰しやつて行かれました。

光秀。内藏助は素早い奴だ……龜山ではおれが其方の體を自由にさせて置いたから逃げられたが、さうして置けば大丈夫なんだな。

紹巴。どうかお擲揃ひ遊ばさないで、お小姓でもお呼びになつて、私の縛をお解きなすつて下さいまし。

光秀。連歌興行の折おれの旗上げの心を読んだ其方だ。おれがどん詰りまで行つて腹でも切る時には、辭世の發句を読むから、其方が脇をつけてくれ……連歌師は花見月見の句は讀めても、死生の境にはそれどころではないと云ふのか……しかし、

無意味に苦しめては可哀さうだ。おれが縛を解いてやらう。

光秀座を立たうとしてゐるところへ侍者某あたふたと入つて来て、跪くや否や、

侍者。羽柴筑前殿の數萬の人数が、攝州境に近づいたとの御注進が御座いました。

光秀。なに、秀吉が……秀吉がもう此方へ向つたのか。

光秀慌しく立上る。

他の侍者某入つて来る。平伏して、

侍者。上様には速刻御評定の席にいらせられるやうにと、内藏助様がお願ひ申して居ります。

光秀。只今出掛けるところだ。

光秀出て行く。

「どうぞ、わたくしの縛をお解きなすつて下さいまし」と紹巴の聲。

「それどころではないのだ」と光秀の聲。

陣屋の一室。あたりは薄暗い

紹巴紐で縛られてゐる。

齋藤内藏助、溝尾勝兵衛と一しよに評定の室から出て来る。

内藏助。(興奮して) 此方が堅まつてゐないところへ、かう早く秀吉に
乗込んで来られちゃ、味方に勝目はないよ。一先づ坂本へ退却
して籠城して工夫を凝すのが、差當つての良策だが、おれの説
を用ひないと、大將もあとになつて思ひ當るだらう。

勝兵衛。しかし、秀吉に恐れて退却したやうで、味方の意氣が沮喪す
るかも知れないよ。どうせ此方には世間の人望がないのだから、
破れかぶれでやツつけるより外爲方があるまい。上様も腹
の中はさうなんだらう。お前も我慢して多數の意見に従つて、
やれるまでやつて見てくれ。

内藏助。どうせ、おれ一人で退却する譯には行かないからな。

二人はさう話しながら、ふと紹巴の方を見る。

紹巴。内藏助様。お慈悲で御座います。この縛をお解きなすつて下
さいまし。

内藏助。坊主、まだそこにゐたのか。

勝兵衛。紹巴どのぢやないか。何をして縛られたのだ。

内藏助。こいつ、大將のところへ胡麻を摺りに来やがつた。それで忌
忌しいからおれが縛つたのだ。

勝兵衛。可哀さうに。

内藏助。連歌師だの、繪師だの、禪坊主だの、今日の時世やんさいに煩い奴だ。大
將もこんな奴に取合つてゐるから、勇氣が滅つて氣が迷つて

いけないのだ。
勝兵衛。しかし可哀さうだな。風流といふ名前は立派だが、最眞の且

那がなければ生きてゐられないのだから。

内藏助。此處の大將が天下を取つたから御機嫌伺に來たのだらう

が、今に秀吉の軍が勝ちでもしたら、今度は猿奴のお髯の塵を

拂ひに出掛けることだらう。

さう云ひながら行過ぎる。勝兵衛も一しよに出て行く。紹巴怨めしさうに見送つ

て、自分で縛を解かうとして藻掻く。

そこへ光秀が考へ事をしながら入つて來て、紹巴に氣づかないで行過ぎようと

する。

紹巴。上様、お慈悲で御座います。

光秀。ふと、その方に氣がつく。

光秀。其方はまだそこにゐたのか。

紹巴。どなたにお願しても紐をほどいてはくれません。

光秀。其方がもう少し辛抱してゐれば、戰場へ連れて行つてやら

う。

紹巴。さつき、上様は縛をほどいてやらうと仰しやつてお忘れに

なつたのです。……さつきお手づから酌をして下すつたやう

に、恐れながら、お手づから縛をほどいて下さいまし。

光秀。さつきと今との間に、光秀の胸には槍の穂先が突きつけら

れたのだ。其方の縛られた體はおれの體見たいだ。

紹巴。わたくしの目の前にも白刃が突きつけられてゐるやうに

見えます。どうぞお許しなされて下さいまし。

光秀。なに、おれは其方を斬りも突きもしないよ。お前が秀吉の間

者になつて、おれの軍の準備を探りに來たのぢやあるまいし。

紹巴。私は上様の御勝利をお祝ひに上つたので御座います。

光秀。上様だの、御勝利だのといふ其方の言葉は、冷かしのやうに

おれには聞えるよ。……其處に坐つてゐて、おれのために辭世

の句の用意でもしてゐろ。

光秀行過ぎる。紹巴怨めしさうに見送つてゐる。

鎧武者幾人も通り過ぎる。怪訝、輕蔑様々な表情をして紹巴を見ながら行く。

紹巴。私も戦場へお伴いたします。縛を解いて下さい。

皆黙つて行く。あたりは暗くなる。暫くして、覆面した野武士忍んで来る。

甲。大丈夫、この陣屋は空つほだ。(次の室へ入つて行く)

乙。おい、誰か縛られてゐるぜ。(紹巴の方を見る)

紹巴。助けてくれ。

乙。お前は罪人か。

紹巴。お前たちは野伏か。それなら、この紐をほどいてくれ。おれが

案内して一儲させてやらう。

丙。そんなことを云つて、この男を信用出来るだらうか。

乙。及物を持つてゐないから大丈夫だらう。古ぼけた弱さうな奴

だ。

紹巴。おれは歌詠みだ。安心して縛を解いてくれ。

甲。待て待て。今の時世に人間の言ふことが信用出来るか。此處の

大將は大恩のある信長公を暗打に會はせたのだ。さういふ世

の中、迂濶に他人の言ふことが信用出来るか

紹巴。なに、羽柴筑前どのが其處まで攻寄せてゐるのだから、此處

の大將の壽命はもう知れたものだよ。

甲。どちらが勝たうとおれ達の知つたことぢやないよ。負け軍の

落武者どもの物の具を剝取るのが目つけどころだ。

丙。全體お前は何をして縛られたのだ？

紹巴。(氣取つた口調で)此處の大將を打取るつもりで、頭を剃つて連

歌師になつて入込んだのだ。

乙。それがばれて縛られたのか。誰に頼まれてそんな危いことを

やる氣になつたのだ？

紹巴。信長公のお身内の方のお言ひつくだよ。

甲。お前は見掛けによらない太い奴だな。信長公の仇討を一人でやらうとしたのか。

紹巴。おれを助けてくれ。あとで御主君に御褒美を貰つてやらう。

乙。そんな方なら、兎に角お助け申さう。
乙は手早く紹巴の縛を解く。

甲。さあ、おれたちを案内しろ。

紹巴。おれに隨いて來い。

紹巴あわたとしく駈出す。

二ノ三

十三日の夜、深更、小栗栖の田舎道。

野武士三人、紹巴、疲勞した様子で一しよに歩いて來る。

甲。おれたちの目を忍んで逃げようたつて駄目だ。信長公のお身

内の家來だと云つたのが嘘でもまことでも、光秀公の御陣所へ突出すことにしよう。大罪人を引捕へたのだから、いくらかの御褒美が貰へるだらうよ。

乙。いくらの御褒美になるもんぢやあるまいが、二三日騙されてゐた腹癒せに突出してやらう。此處でぶち殺したところで一文にもなるもんぢやなしさ。

丙。何か由緒のありさうな男だが、おれたちの仲間に入らせる譯には行かないし。

紹巴。お仲間にも何にでも入りますから、どうぞ命はお助けなすつて下さいまし。

甲。天下様を暗打に會はさうとした奴が弱い音を吐きやがる。

紹巴。本當は私は、つまらない連歌師で御座います。

甲。さう云つて、おれたちを誤魔化さうとするのか。お陣所へ連れて行つて調べて貰つたら解ることだ。……おれたちもこの頃は、目に會はなかつた。

乙。何處かへ御奉公しようとしたつて、今日の時世ぢや、何處の大名が勝つか負けるか解らんのだから。

丙。いや、強い方をよつて行つたつて、戰場へ出されて殺されちや三文にもならないからな。どうせ命がけなら、追ひつかはれないで、隙間を見て野稼ぎをした方が氣が利いてゐる。……それにしても、この頃のやうに不漁が續いちや爲様がない。……まあ、こんな坊主でも飯の種にして見るか。

甲。しかし、此奴は本當に、磔刑になるほどの大罪人だらうか。空巢ねらひのコン／＼泥棒だつたら、陣所へ連れて行つたつて、三文にもなりやしない。

丙。

乙。この面魂はどうしてもたゞの者ぢやないよ。……さあ、行かう。

紹巴を引立てて行かうとしてゐるところへ、馬の音聞ゆ。

甲。おい、こんな夜更に馬の音のするのは變ぢやないか。

乙。落武者だな。……占めた、隠れる。紹巴を引連れて、皆が藪陰に隠れる。

光秀、二三の従者と、疲れた馬に乗つて、トボ／＼とやつて来る。藪の中から槍の穂先が現れて、グサと光秀の脇腹を突く。紹巴、月光にて藪の隙間から苦悶してゐる。光秀の顔を見て驚く。光秀もそちらを見て驚きながら、トボ／＼と行過ぎる。

その行過ぎたあとで、野武士と紹巴現れる。

甲。たしかに一人だけはヤツつけた筈だが、とあたりを見まはす。

乙。血が垂れてゐるぢやないか。おれが見て來よう。(入つて行く)

紹巴。今のはたしかに日向守どのだ。

丙。お前が暗討に會はさうとした光秀公か。いゝ加減なことを言ふな。

紹巴。たしかにさうだ。おれはあの方の謀反のはじめからしまひまで見せつけられた。おれだけが見たやうなものだ。おれも恐しい世を見せつけられたものだ。あの方もおれの方を見てゐられた。(震へてゐる)

甲。あれが大將なら、占めた……さあ行つて見よう。

丙。用心しろ。あれが天下様なら、お供の者も相當の腕利きだらうぜ。

甲。なに、落武者に大將も草履取も差別があるものか。へト〜になつて、半死人も同様だ。おれが行つて見る。お前、この男の番をしてゐろ。

丙。あれが天下様なら、天下様を暗討にしかけたこの男など何處へ連れて行つたつて、もう賣物にならないぢやないか。召取つても御褒美の種になりやしない。

甲。成程さうだ。……この坊主、三文の値打もなくなつた。どこへでも行きやがれ。

紹巴 悲しいやうな悦ばしいやうな顔して、トポ〜と出て行く。——幕——

——歓迎されぬ男——

註——□紹巴。姓は里村、和歌連歌に長じ、光秀敗死の後、豊臣秀吉の殊遇を蒙つた。

□明智左馬助。光秀の従兄弟で、名を光春(或は光俊)といひ、敗軍の後、近江の坂本城に歸らうとして、馬で琵琶湖を横ぎつた話は、よく人に知られてゐる。

□同次右衛門尉。名を光忠といひ、光秀の従兄弟である。

□百韻。俳諧の法式の一で、百句を以て終る。

□山崎宗鑑、荒木田守武。連歌や俳諧の名家。

□應安の新式目。連歌の法式の書。

□宗祇。姓を飯尾といひ、連歌の名家である。

□兼良卿。一條兼良、和歌連歌に長じ、且つ博學で、應仁亂の前後關白であつた。

□地子御免除。田畑、宅地等の租税を免すること。

大正十五年

正白自白作

戯曲

紹巴

兼良、福寺、僧

光秀

豊臣、各、一、年、久

三井寺、一、寺、ウ、テ

ソコ、テ、死、シ、タ

□懷紙。和歌や連歌を認めるに用ひる紙。

□龜山の城。京都の西約五里、今の龜岡にあつた。

□五つ。今の八時頃。こゝでは午前である。

□下鳥羽。伏見町の西。

□松永彈正。名は久秀、永祿八年その主三好義繼と共に將軍足利義輝を弑し、後三好氏に背き、信長に反し、天正五年自盡した。

□筒井順慶。大和國郡山の城主。もと明智光秀と親しかつたので、光秀が信長を滅したと聞いて兵を遣はして援けさせたが、秀吉が東上すると聞くと、忽ち兵を引き、病と稱して出でず、終に秀吉に味方した。

□胡麻を摺る。おもねりへつらふこと。

□野伏。野武士や山賊をいふ。

□小栗栖。伏見町の東方、滋賀縣大津市に通ずる街道筋の村。

鑑賞—□光秀の心持をよく考へ味ふこと。今まで考へてゐた光秀とこれと違ふとすればどんな風に違ふか。

□紹巴はどんな人物と思はれるか。そのほか、何か感想はないか。

五 棧 道

久 米 正 雄

柳生十兵衛三嚴みつよしが大和國M坂より出府の途中、中仙道でも嶮を以て鳴るK棧道にかゝつたのは、山腹の黄葉も霜に焦げて疎に、溪湍岩角うらみに白みを増す十月も半ば過ぎのある晴れた午後だつた。

兼ねて自分の所へ集つて來た諸國修業の武藝者から、この山路の風光の奇峭と嶮岨とは聞いて知つて居たが、是ほどとは思はなかつた。一方は深い溪流になつてゐて、白斑を帯びた尖巖とげが日影にけむつてゐる中を、奔流が或所は白々と噛み、他の所では深碧しんぺいを湛へて、通行の人を誘ひ落さうとするやうな奇瑰な口を開いてゐた。そして一方は鬼斧で切立つた崖つゞきで、所々清水が縞をなして滴り落ち、又は緩みを帯びた巨巖が一瞬にずり落ちる機會を狙つてゐる間を、電光形をなした岨道が、氣長な機織り仕事のやうに、

所謂ツラオリ九十九折をしてゐた。その間には、勿論杉は深く木立を並べて、暗い幹と幹の平行線の間から冷たい太古の空気を吹きつけ、雑木は明るく枝を交錯して、前山を赫と輝かす日ざしに、小鳥を鳴き移らせてゐた。

「どうだ、又助、疲れはせぬか、少し休んで行かうか」

一寸道の小廣い崖をくり抜いたやうな角へ來ると、十兵衛は後を向いて、小さい荷物を振分けにして擔いだ伴トモの弟子を顧みた。

「いゝえ、まだ大丈夫でございます」

弟子はさう言つて、足をやゝ踏みしめるやうにしながら、少しして隠しのやうに日ざしを仰いだ。

「さうか、それならば一氣に押して行くか」

十兵衛はさすがに鍛へた腰や足に、まだ疲と稱すべきものも覺えなかつたが、同じやうな調子の山道の風景と、行けども盡きぬ右

折又左折に、やゝ氣疲れがして來た。

「はい、行つてしまひませう。せめて上りきつてしまふまで參つた方が、却つて宜しいかと存じます」

「さうだな。長旅に急いではいかんが、なにもう少しの道のりぢやらう。其方さへ差支なくば休まずに行くとしよう」

二人はまた小半時、四圍の風景などは見るともなく、黙つてとつとつと歩いて行つた。主従二人の足音が、底鳴りをしてゐる溪流のせゝらぎを縫うて、天地に響くやうな静けさだつた。

「久しう馬士ウマシにも出會はぬな」

突然十兵衛は又助を顧みて言つた。さすが劍ケンの名人も、旅人はおろか木樵の人影も見えなくなつた旅路を、何か淋しく人懐しく感じて來たのだつた。

「左様でございますな。大方、朝發アサタチちの關係でございませう」

その位の推測なら十兵衛にもついてゐた。彼は首肯うなづきもせず、又黙つて、とつくと併し腰を据ゑて調子を亂さず歩いた。

暫く行つた時だつた。向の山角の道の折目から、一人の旅人の姿がほつりと現れた。

「武士のやうぢやな」

十兵衛は顧みもせず、向を見つめて言つた。かういふ棧道で武士に出會ふといふのは、人懐しくもあると同時に、その黒い紋付姿から、何か事が起りさうな感じがしたのだつた。事が起つたつて、自分の腕に自信のある十兵衛は、決して恐怖の念を兎の毛ほども覺えた譯ではないが、何か、ぶるツとするやうな緊張を感じたのだつた。

「何だか武者修業らしい感じがします」

又助も肩の荷を揺直して言つた。それはもう、刻々近づいて、一目で武藝者らしい恰好がわかつて來た。

向も緊張した足どりで、急がず慌てぬ一步々々をしつかり踏んで此方へ近寄つて來る。向と此方の距離は半町ほどに差迫つて來た。右手は山の風雨に、削り取られたやうな懸崖で、左手は一步誤れば千仞の溪谷だ。棧道の幅は一間に足りない……

十兵衛は、自分が相手より身分が上であり、且つ天下に怖れる者は無い筈なので、行會うたら自分の方が右手の山寄りに避けて行違ふのが當り前だと思ふともなく思つてゐた。それで眞直ぐに、平氣で歩いて行つた。

向の武士も油斷なく、併し人懐しげな様子で、此方をぢつと見ながら近づいて來た。

見ると、黒木綿の紋付は古びてはゐるが、清よげで、袴の穿きやう、草鞋のつけ方、何處となくびつたり格にはまり、肩つき、腰の据ゑやうも、すつかり法に適つてゐた。

「は、ア、一と廉の武藝者だな」

十兵衛は十間ほどになつた時、直ぐさう思つた。

二人は愈進み寄つて來た、眞直ぐに各道を譲りさうもなく——
そして双方一問ばかり來ると、足どりを緩めるともなく、ぢり、と
据ゑて、一瞬間互の顔を見合つて立つた。相手の眼光は爛々たる光
を帯びて此方を見つめてゐた。怖しい武藝者と言ふよりも、寧ろ高
僧か何かのやうに揃つた顔容には、卑しからざる色が見えた。

會釋するともなく立止つて、相手を探り合ふ一瞬は直ぐ終つた。
十兵衛は躊躇することなく、右手寄りに體を開いて、さりげなく鐵
扇を握つたまゝ、ヂリ、ヂリ、と寄つた。

向も出會うて眼を會せるまでは、山寄りに廻らうとしてゐるら
しかつたが、顔を見合せた一瞬間、須臾に何かを見て取つて、心を決
したらしかつた。同じやうな緩い動作で谷寄りに寄りながら、ヂリ

リヂリ、と廻り込んだ。

敵意といふほどでなく、一種相手に對する興味で、二人は互に、そ
の擦違ひの間に、一刀をさつと抜いて斬拂つたら、敵がどうなる
といふことを想像し合つてゐるやうだつた。一方は山、一方は谷、幅一
間の棧道で、行違ひざまに斬結ぶとしたら、——十兵衛もさう思つて、
ぢつと相手の廻り込むのを見やると、その呼吸の合つた動作や態
度には、驚くべし、一分の隙もない。

向の眼にも一種の驚異に似た輝が見えた。

「失禮ながら伺ひ申す」

「突然ながら伺ひ申す」

二人が行違つて、斜に逆に廻り込み終つた時、二人の口からは同
時にさういふ言葉が出た。二人は眞劍な中に微笑に似た或ものを
感じた

「柳生十兵衛先生ではござりませぬか！」

「宮本無三四殿ではないか！」

それも殆ど口を衝いて出たのが、甲乙なかつた。

「思ひもかけぬ所にて、拜顔の榮を得申した。」

「予も會ひたいと思つてゐた。」

二人は息をほつと吐いた。

「江戸表へでも御出府の途中でござりまするか？」

「さうぢや、其處許は？」

「諸國修業の途次、是より名古屋へ出て、伊勢路へ参る所でござりまするか？」

「F宿は何時頃發たれたのぢやな？」

「宿の亭主が武藝好きにて、色々と引きとめられ、やうやく午の刻に、止めるのも聞かず、振切つて發つて参りました。」

「ほう、夜を籠めて山越えをさるゝ氣かして、F宿まではもう何里ほどござるかな？」

「三里もござりませうか、山道とて見當がつきませぬが、今日はF泊りでござりまするか？」

「そのつもりでござる。」

「それならば、無三四は日を仰いで一寸思案してゐたやうだつたが、咄嗟に思ひついたと見えて、

「某も、一度引返してFまでお伴仕りたう存じますが、如何でござりませう。折角此處にて拜顔の榮を得ながら、そのまゝ左右にお別れ致すは、何やら心残りでござれば。」

「其處許の旅路に狂ひなくば、予も亦望むところでござる。」

「では案内がてら引返し申すと致しませう。」

「さやうなれば、同道お願い申す。」

二人は、今度は肩を揃へて歩き出した。

名を聞いたのみで相見たことはなかつたが、日頃會ひたいと思つてゐた劍道の名人同志は、暫く言葉が無かつた。話の種は數多あるやうだが、何を話題としたらいゝかわからぬやうな一種のぎこちなさを覺えた。殊に尊敬と適度の競争意識を持つてゐる無三四の方は、何だか興奮と緊張に、其處に聳えてゐるK嶽の如くしやちこばつてゐるやうだつた。

「……どうぢやつたな、信州路は？何か面白いことはなかつたかな？」

やゝあつて十兵衛の方が話しかけた。

「いえ、別に面白いといふほどのこともなく、この二三箇月を過して参りました」

「でも、大分御勉強ぢやつたらう」

「いえ、相變らず惰けてばかり居りますので、面目次第もござりませぬ。木刀よりは繪筆を取つた方が、或は多かつたかも知れませぬ。はゝゝゝ」

無三四は言過ぎと自嘲の笑を淋しく洩したが、十兵衛は笑を酬いてはくれなかつた。

「成程、無三四殿には風流の嗜もあつたのぢやつたな。そこへ行くと、身どもの如きは全くの藝無し猿。泊り泊りの食物の味不味さへ心にかゝらぬ位ぢや、羨しうござる」

「いえ、全く以て左様なことはござりませぬ。先生の如く只管一筋道に精進なさるゝこそ、小器用の身に引較べ、羨むよりは仰ぎ見る心地がせられてなりませぬ」

「何の、そんなことがあらう。不器用な身どもは鍛練に日を送るより外に道はないのぢや。凡そ武藝だけは極意を極め盡したつもり

でも、行けば行くほど奥の極まる所を知らぬらしいでな。

「さやうでござりまするな。」
無三四は叱られてゐるやうな皮肉を言はれてゐるやうな同感を求められてゐるやうな感じを同時に覺えた。それにつけても、この機會に一つ、十兵衛と立合つて自分の力を試したい氣がむらむらと起るのを制しかねた。

「つきましては、先生に拙者工夫いたしました二刀流の劍法、一度御批判をお願い致したうござりまするが。」

「うむ、話に承つて御工夫の程感服致して居る。いづれ機會もあらば御手並拜見致すであらう。」

十兵衛の面上にも清々しい争氣が現れて消えた。

「有り難き仕合せに存じまする。」

二人はそれつきり黙つて、又歩みを續けた。

道は崖續きの岩石を抜けて、木の茂みの多い山道となつた。三人の踏みしめる足音が、硯のやうに木の梢を揺がした。

ふと、十兵衛は歩みを緩めて立止りさうにした。無三四もそれに連れて何事かと思つたやうに、油斷のない足どりを止めた。

「……何の實でござらう？」

十兵衛は、道を外れた谷べりに立つてゐる一本の木の途中程を、ちつと子供のやうに見つめてゐた。そこには蔓をなした枯葉の間に、赤紫色に熟れて笑割れて腸を出した長い實がぶら下つてゐた。

無三四は微笑した。

「あゝ、あれでござりまするか。あれは通草の實でござる。是からの道のべには殊の外多うござる。」

「はゝア、左様でござるか。名は聞いたが見るのは初めて。――食へるものでござらうな。」

「山の子らが好んで食するもの。鄙びた美味棄て難うござる。何なら一つ採つてお目にかけてませうか」

「左様でござるな。」

十兵衛は笑顔で答へた。

「然らばお待ち下されい」

無三四は一寸袖づくりひをして、崖に沿うた道端から、手を伸ばせば、やつと届く位の其處の木立へ體をさしのべようとした。其處は指一本でも加へて押せば、無三四の體が防ぎやうもなく、そのまま谷底へ落ちてしまふべき場所だつた。

十兵衛は此方の道から、息をぐつと籠めて無三四の様子を見てゐた。

無三四は崖縁まで行くと、何氣なく一瞬に足場を見定めたらしかつた。そして左右の足を然るべき廣さに開き、體をぢつと虎の如

く忍ばせて、通草までの高さを窺つた。

十兵衛は此方から見えてゐて、無三四の後向きの體に少しの打込む隙もないのに感心してゐた。が、崖の縁ではあり、通草まではやゝ高いから、その中には構の破れが出来るであらう。そしたら一と氣合、エイッと掛けてやらうと思つて、ぢつと睨んでゐた。どうやら無三四の方でもその氣勢を見えぬ後に感じて用意してゐる様子が、隙のないうしろ正眼まへまなこにあり、現れてゐた。あれでは一太刀斬込んでも、素早く身をかはし了るであらう。殊に右足に含まれた力は、何時でも例の「天狗飛切」で、崖の縁から道の中央へ跳ね返り得るのを示してゐる。……

併し、手を伸ばして通草を取る瞬間は、どうするだらう。其の時こそ體は崩れ、隙は生ぜずには居まい。……と見てゐた瞬間、ヤツといふ、低いが地に響く一と聲がして、パツと彼の體は飛んだ。そして一

瞬に通草の實を片手に握つたまゝ、少し離れた足場の確な岩角へ此方むきに跳び移つてゐた。神色變らず、彼は微笑しながら、その妙な形をした果實を十兵衛の所へ持つて來た。

「や、これは見事な通草の實。わざ／＼忝うござつた」

十兵衛も微笑を含んで受取る外はなかつた。そして珍しげに、と見かう見してゐたが、まさか食ひもならず、後を顧みて言つた。

「又助、通草の實ぢやとよ。其方も初めてぢやらう。食べて見い」

「はッ。有り難う存じまする」

又助はそれを受取つて、暫く躊躇してゐたが、やがて思ひきつてガブリと口をつけた。そして妙な顔をした。

「どうぢや、又助、味は？」

「何だか甘過ぎうて不思議な味でござりまする」

「さうか。我慢して食はんでもい」

十兵衛と無三四は、笑つてまた歩き出した。

小半里ほど行つた。相變らず左手は溪谷で千仞の谷をなしてゐた。道はやゝ、岩石の破片が少なくなつて、秋草が生えてゐた。日が向つ峰を半ば掠めて、道草へ離々たる影を投げてゐた。ざわ／＼と風が出て來た。

ふと又十兵衛は立止つた。見ると、その眺めてゐる方角には一むらの草の廣葉が風を受けて戦いでゐる中に、薄紫の小さな花が點點と可憐な姿を現してゐた。そこは又絶壁の端だつた。

「……あれは何の花ぢやらう」

又も十兵衛は無三四を顧みて言つた。

無三四も淋しい微笑を以て又答へた。大方葛の花かと存じまする。佗しい姿でござるな」

「成程、あれが葛の花か。どれ、一つ拙者手づから手折つて來て見よ」

う、葛の花位なら拙者に似合はぬ風流でもあるまい程に。」

さう言ふと共に、十兵衛はもはやつか／＼と崖のふちの方へ進み寄つて、早速その蔓草の花のあたりに手をさし伸べてゐた。

今度は無三四が微笑を顔から消して、ちつとその後姿を見守つたが、そこには隙だらけの何の用意もない後姿が、たゞ崖を前にして、何時でも突落してくれと言はぬばかりに立つてゐるきりだつた。……

が、斬付けるとしたら、何處からどう斬付けらるべきだらう。隙につけこむと言つても、取立てて何處を選ぶべきか。——無三四は心の中の氣合を忘れて、ぼんやり見てゐるきりだつた。

その中に、十兵衛は一束の花を携へて戻つて來た。

「……葛の花といふのも、よく見ると豆の花のやうぢやな」

さう言つて、彼は又助にそれを手渡しつゝ、まだぼんやりしてゐ

る無三四を促すやうにして歩みを續けた。……

彼等が下宿の旅人宿檜の木屋へ着いたのは、もう夕景だつた。

「……おい主人、又戻つたぞ。今度は珍しい客人のお伴をして參つた。M坂の先生ぢや」

無三四が門口でさう呼んだ。

「へえ？あの柳生先生で？左様でござりましたか。それは／＼何といふ……これ、誰か早くお洗水を持つて來な……は、ア、あの途中でお會ひなされて、そのまゝ……左様でござりましたか……誠に有り難い仕合せで……」

劔術が好きで、宿の裏手には道場まで設へてある宿の主人は、二人を下にも置かぬ歡待をした。風呂も清く焚直した。山魚料理も念に念を入れた。

その夜は疲れてゐるのか、別にさう話をし合ふこともなく、二人は別々な部屋に引取つて寝た。そして翌朝になつた。無三四は早く起きた。十兵衛主従も、もう眼覺めてゐるらしかつた。

「おい主人、朝餉の仕度はまだか、今日は早う發つぞ」

無三四は朝の挨拶に來た主人にさう言ひかけた。

「へえ？ではもうお發ちで？」

主人は意外さうに眼を見開いた。

「さうぢやなぜ？」

「いえ、なに、あの柳生様とお手合せでもなすつて、それからお別れになるため此處までお戻りになつたのかと、奴は存じて居りましたので。」

主人はその期待が外れたので、口を開いたまゝさう言つた。

「はゝア、さうか。だが、その立合ひなら、もう昨日濟んだ」

無三四は靜に、微笑を含んで言つた。

「へえ？何處でおやりになりました？」

「棧道でやつた」

「して、何方のお勝ちでございました？」

主人は思はず膝を乗出して、さう露骨に訊ねた。

「うむ、残念ながら拙者の負けやつた。柳生殿の劍法はさすが古今獨歩といふだけあつて、拙者などの小器用な工夫の逆も及ぶところではない。天衣無縫ぢや」

「はゝア、左様でござりまするか」

「もう十年、十年も修業したら、あそこまで行けるかな」

無三四は獨言のやうに言つてゐた。

無三四の部屋を辭した主人は、今度は柳生十兵衛の部屋へ罷り出た。

「……お早うござります。何事も行届きませんで。」

「おう、亭主か。いろ／＼な心盡し、有り難かつたぞ。今日はまた早發ちぢや。朝餉を早うしてくれぬか」

十兵衛は莧をふかしながら、落着いてさう言つた。

「畏まりました。――ですが先生、誠に恥しうござりますが、私奴は是でも大變劔術が好きで、この宿でも氣狂と言はれ、むさくるしい道場ではございますが、裏手に一つ小さなのまで建ててゐるものでございます。就きまして、一生に一度の思ひ出には、先生と無三四先生とのお手合せを拜見出来ませんでございませうか」

主人は無禮を叱られるのは覺悟の上の、脇の下に汗をかきかきさう申し述べて見た。

すると、その答は又前のやうに靜だつた。微かに十兵衛は笑つたやうだつた。

「なに、無三四殿との手合せ？ さうか、それは惜しいことに、昨日濟んだよ」

「棧道でございますか。あの狭い……？」

「うむ、さうぢや。絶壁の前でぢや」

十兵衛は更に靜な顔をした。

「して、それは先生のお勝ちでございましたらうな」

「いや、靜に十兵衛は首を振つた。さうでない。その時は予が勝つたつもりでゐたが、今考へると、負ぢや。後手だけに負ぢや」

「一體、どういふ御勝負だつたのでござります。後學のため、私奴のやうな奴にも、好きな道しるべ、御示教願はれますまいでござりませうか」

「うむ。いや、なに、立合ひと言つても、木刀や鐵扇を取つてではない。初め、無三四殿が絶壁の先にある通草の實を、後から見ても、見事、一

寸の隙も見せず採られた。予は心の中で、ヤツと氣合を掛けると共に、無三四殿が手を伸ばして取らうとする瞬間を目がけ、打込んだと思つて見た。が、その刹那、無三四殿は、もとより此方の氣合を察せられて、一と息パツと身をかはずと共に、もう通草の實を攔んで、安全な岩角に此方を向いて立つて居られた。用意の程、十兵衛感服致した」

「へえ、では目に見えぬ立合ひをその時なされたのでござりまするな。―ですが、それならどうして無三四先生の方で、此方の先生に立合つて負けたと仰しやつて居られるのでございませう。實は先刻彼方へ御挨拶に伺ひましたところ、やはり棧道に於て先生と立合ひの上、自分が負を取つたと申して居られましたか。」

「ふうむ、さうか。さう申し居つたか。それは併し、先刻も言つた通り、やつぱり予の負かも知れんのぢや。―といふのはな、それから暫く

山道を行つた處で、葛の花が咲いてゐた。同じやうな絶壁の端にぢや。それを今度は、予が採りに立つたのぢやが、その時予はもうどんなに隙を見せぬ構をしたとて、無三四殿と同じで、劣るとも優らぬと思つた。その上、無三四殿の工夫が餘りと言へば、餘りに隙がないのに、反對の心持を持つたのぢや。それで思ひきつて、何の構もせず、一命を天に任せた氣で、無想無念に、子供の心で、葛の花を手折つて見た。それを見て、無三四殿は、氣を吞まれたやうにぼんやりして居られた。それで恐らく自分が負けたのぢやと思つたのであらう」

「は、ア、左様でござりましたか。さう言へば、無三四先生は、先生の劍法を天衣無縫とやら申して居られました」

「ほんとに天衣無縫な武術なり何なりがあるならば、誠に天下の至寶に違ないのぢやがな。大抵の天衣無縫などは、要するに粗暴な見せかけに過ぎんやうぢや。予のもたゞ後手を引いて、外に術がな

いから無を以て有へ通じさせるやう見せかけたまでぢや。その證據に、あの時眞に若し打込んで來られたなら、予は一たまりもなく打据ゑられるか、千仞の谷へ落ちたであらうからな。そこぢや、今となつて、人智心巧の限を盡した無三四殿の劔法の方が、やはり勝ではないかと思はれたのは。——いづれ十年もたつたら、臍氣に此の間の消息がわからうかな」

十兵衛三嚴も、最後に呟くやうに附加へた。

かうして、そのまゝ、炊煙の白いK街道を柳生十兵衛三嚴と宮本無三四政名とは朗かな挨拶を交して東と西とに別れ去つた。霜を含んだ大氣が旭に搖いで流れる朝だつた。……

——木靴——

註——□久米正雄。明治二十四年長野縣に生れ、東京帝國大學英文科を卒業した。

小説集や戯曲集の著が多い。

□M坂。大和國正木坂のことで、祿高一萬石であつたといふ。

□うしろ正眼。正眼の構を前後して、背面の上下左右に氣を配ること。

□離々。長く筋になつて見える様子。

□天衣無縫。天女の衣には縫目が無いやうに、技巧の跡がなく、圓滿完全で立派なこと。

鑑賞——□どちらが勝つたと見てもよからう。たゞ何事によらず奥義は所謂天衣無縫の境地にあることを知るべきである。而してその境地は又、無邪氣な子供との心と一致するものであるといふことを考へて見るがよい。

巨匠の達人、
五里心とくへるもつしあし、
未熟な人、
人ト街ト土氣カア。

六 鼻

芥川龍之介

禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて、上唇の上から頤の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はば細長い腸詰のやうな物が、ぶらりと顔の眞中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を超えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは專念に當來の淨土を渴仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが悪いと思つたからばかりではない。それより寧ろ自分で鼻を氣にしてゐるといふ事を、人に知られるのが厭だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻といふ語が出て來るのを何よりも悞れてゐ

た。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。一つは實際的に鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨では食へない。獨で食へば鼻の先が碗の中の飯へ届いてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向へ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貫ふことにした。併しかうして飯を食ふといふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が嚏をした拍子に手が慄へて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。

けれども、これは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重なる理由にはならない。内供は實にこの鼻によつて傷つけられる自尊心のために苦しんだのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、こ

の自尊心の毀損を恢復しようとして試みた。

第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。内供は人の居ない時に鏡へ向つて、いろ／＼な角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝して見た。どうかすると、顔の位置を換へるだけでは安心が出来なくなつて、頬杖をついたり、頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。併し自分でも満足する程鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却つて長く見えるやうな氣さへした。内供は、かういふ時には、鏡を管へしまひながら、今更のやうに溜息をついて、不承々々に又元の經机へ觀音經を讀みに歸るのであつた。

それから又、内供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は僧供講説などの屢行はれる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建

ち續いて、湯屋では、寺僧が日毎に湯を沸してゐる。随つて此處へ出入する僧俗の類も甚だ多い。内供はかういふ人々の顔を根氣よく物色した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて安心したかつたのである。だから、内供の眼には、紺の水干も白の帷子も入らない。まして柑子色の帽子や椎鈍の法衣などは見慣れてゐるだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずにたゞ鼻を見た。併し鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重ると、内供の心は一層不快になつた。内供が人と話をしながら、思はず、ぶらりと下つてゐる鼻の先を撮んで見て、年甲斐もなく顔を赤らめたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、内供は、内典、外典の中に自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしよつとさへ思つた事があ

る。けれども、目蓮や、舍利弗の鼻が長かつたとはどの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人並の鼻を備へた菩薩である。内供は震旦の話の序に、蜀漢の劉玄德の耳が長かつたといふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなくなるだらうと思つた。

内供が、かういふ消極的な苦心をしながらも一方では又、積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざ／＼こゝに云ふ迄もない。内供はこの方面でも殆ど出来るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある。鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として五六寸の長さをぶらりと唇の上にはぶら下げてゐるのである。

處が、或年の秋内供の用を兼ねて京へ上つた弟子の僧が、知邊の醫者から長い鼻を短くする法を教はつて來た。その醫者と云ふの

は、もと震旦から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧になつてゐたのである。

内供は、何時ものやうに鼻などは氣にかけないと云ふ風をして、わざとその法もすぐやつて見ようとは言はずにゐた。さうして一方では、氣輕な口調で、食事の度毎に、弟子の手數をかけるのが心苦しいといふやうな事を言つた。内心では、勿論、弟子の僧が自分を説伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない。しかしそれに對する反感よりは、内供のさういふ策略をとる心持の方が、より強くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の豫期通り、口を極めてこの法を試みる事を勧め出した。さうして、内供自身も亦、その豫期通り、結局この熱心な勸告に聽從する事になつた。その法といふのは、たゞ湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませる

といふ、極めて簡単なものであつた。

湯は、寺の湯屋で毎日沸してゐる。そこで、弟子の僧は指も入れられないやうな熱い湯を、すぐに提子ていしに入れて湯屋から汲んで來た。しかし、ぢかにこの提子へ鼻を入れるとなると、湯氣に吹かれて顔を火傷する懼おそがある。そこで折敷せしきへ穴をあけて、それを提子の蓋かたにして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると、弟子の僧が言つた。

「もう茹つた時分でござらう」

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは氣がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食ふやうにむづ痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻を抜くと、そのまだ湯氣の立

つてゐる鼻を、兩足に力を入れながら踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟子の僧は、時々氣の毒さうな顔をして、内供の禿頭を見下しながら、こんな事を言つた。

「痛うはござらぬかな。醫師は責めて踏めと申したで。ぢやが痛うはござらぬかな」

内供は首を振つて、痛くないといふ意を示さうとした。處が、鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に靴くつのきれてゐるのを眺めながら、腹を立てたやうな聲で、

「痛うはないて」

と答へた。實際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却つて氣もちのいゝ位だつたのである。

しばらく踏んでみると、やがて粟粒のやうなものが鼻へ出来はじめた。云はば毛をむしつた小鳥をそつくり丸灸にした形である。弟子の僧はこれを見ると、足を止めて獨言のやうにかう言つた。

「これを鑷子で抜けと申す事でござつた」

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからないではない。それはわかつて、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが不愉快に思はれたからである。内供は、信用しない醫者の手術を受ける患者のやうな顔をして、不承々に、弟子の僧が鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は鳥の羽の莖のやうな形をして、四分ばかりの長さに抜けるのである。

やがてこれが一通りすむと、弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顔をして

「もう一度これを茹でればようござる」と言つた。

内供はやはり額に八の字をよせたまゝ、不服らしい顔をして弟子の僧の言ふなりになつてゐた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鍵鼻と大した變りはない。内供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡をさまり悪るさうにおづ／＼覗いて見た。

鼻はあの顚の下まで下つてゐた鼻は、殆ど嘘のやうに萎縮して、今は僅に上唇の上に意氣地なく殘喘を保つてゐる。處々まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。かうなれば、もう誰も晒ふものはないに違ない。鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て満足さうに眼をしばたゝいた。

しかし、その日は未だ一日、鼻がまた長くなり、はしなやかといふ不安があつた。そこで内供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さへあれば手を出して、そつと鼻の先にさはつて見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まつてゐるだけで、格別それより下へぶら下つて來る氣色もない。それから一晩寝て、あくる日早く眼がさめると、内供はま先づ、第一に自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく、法華經書寫の功を積んだ時のやうな、びのびした氣分になつた。

處が、二三日たつ中に、内供は意外な事實を發見した。それは、折から用事があつて池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しうな顔をして、話も碌々せず、にぎろ／＼内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。そのみならず、嘗て内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行違つた時に、初は下を向い

て可笑しうに、怵へてゐたが、とう／＼怵へかねたと見えて、一度にふつと吹出してしまつた。用をいひ付かつた下法師たちが、面と向つてゐる間だけは、慎しんで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐにくす／＼と晒ひ出したのは、一度や二度のことではない。

内供は初め、これを自分の顔がはりがしたせゐだと解釋した。併し、どうもこの解釋だけでは十分に説明がつかないやうである。勿論中童子や下法師が晒ふ原因はそこにあるのに、違ないけれども、同じ晒ふにしても、鼻の長かつた昔とは、晒ふのにどことなく様子が違ふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見える。と云へば、それ迄であるが、そこにはまだ何かあるらしい。

前にはあのやうにつけ／＼とは晒はなんだて

内供は誦しかけた經文をやめて、禿頭を傾けながら、時々かう呟く事があつた。愛すべき内供は、さういふ時になると、必ずぼんやり

傍にかけた普賢の畫像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を思ひ出して、今はむげに卑しくなりさがれる人の榮えたる昔を偲ぶがごとく、ふさぎこんでしまふのである。内供には遺憾ながらこの間に答を與へる明が缺けてゐた。

人間の心には、互に矛盾した二つの感情がある。勿論、他人の不幸に同情しない者はない。處が、その人がその不幸をどうにかして切抜ける事が出來ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して言へば、もう一度その人を同じ不幸に陥れて見たいやうな氣にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に對して抱くやうな事になる。内供が理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感付いたからである。

そこで内供は、日毎に機嫌が悪くなつた。二言目には誰でも意地悪く叱りつける。しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と蔭口をきく程になつた。殊に内供を忿らせたのは、例の悪戯な中童子である。或日、けたましく犬の吠える聲がするので、内供が何氣なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片を振廻して、毛の長い、瘦せた尪犬を逐廻してゐる。それも、唯逐廻してゐるのではない、鼻を打たれまい。それを打たれまいと、唯ながら逐廻してゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつたくつて、したゝかその顔を打つた。木の片は以前の鼻持上の木だつたのである。

内供はなまじひに鼻の短くなつたのが、却つて恨めしくなつた。すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音がうるさい程枕に通つて來た。その上寒さもめつ

きり加はつたので、老年の内供は寝つかうとしても寝つかれない。そこで床の中でまぢくしてゐると、ふと鼻が何時になくむづ痒いのに氣がついた。手をあてて見ると、少し水氣が來たやうにむくんでゐる。どうやら、そこだけ熱さへもあるらしい。

「無理に短うしたで、病が起つたかも知れぬ」

内供は佛前に香花を供へるやうな恭しい手つきで、鼻を抑へながら、かう呟いた。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明るい。塔の屋根には霜が下りてゐる。せめてあらう、まだ薄い朝日に九輪がまばゆく光つてゐる。禪智内供は葷を上げた縁に立つて、深く息を吸込んだ。

殆ど忘れようとしてゐた或感覺が、再び内供に歸つて來たのは

この時である。

内供は慌てて鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から頤の下まで、五六寸の長さにぶら下つてゐる昔の鼻である。内供は鼻が一夜の中に元通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな晴々した心もちが、どこからともなく歸つて來るのを感じた。

「かうなれば、もう誰も晒ふものはないに違ない」

内供は心の中でかう自分に囁いた。長い鼻を明方の秋風にぶらつかせながら。

—羅生門—

註——□沙彌。初心の僧。

□内道場。宮中の佛道修業場。

□當來の淨土。來世にある極樂淨土。

□鉢。金屬で作つた椀。

□中童子。儀式の時旗を持つたり、身分ある僧の外出の時お供したりする童。

- 僧供講説。經文の講釋や法話などの會。
- 湯屋。湯沸し場のこと。
- 帽子。儀式などの時僧の冠るもので、頭から肩に垂れ、ぼゞ三稜形に見える。
- 椎鈍。薄黒い色。
- 内典外典。佛教を内典といひ、その外の儒教道教等を外典といふ。
- 目蓮、舍利弗、龍樹、馬鳴。ともに徳の高い僧。
- 震旦。印度で支那をさして言ふ名。
- 劉玄德。蜀の王、劉備のこと。
- 供僧。本尊に供奉する僧の意。長樂寺は京都東山の麓にあつた。
- 提子。酒を入れて盃に注ぐに用ひる器。
- 折敷。薄板で作つた盆の類。
- 法華經書寫。昔は功德を積むために經文を書寫す風習があつた。
- 普賢。菩薩の名。その像は普通白い象に載つて描かれる。
- 法慳貪の罪。佛道の戒を破つて邪見貪慾な行をした罪。
- 風鐸。風鈴のこと。
- 九輪。塔の屋上に取付けてある九層の露盤。
- 蔀。一種の格子戸で、普通その一端を軒へ釣上げるやうに作つてあつた。
- 靈賞—□ 缺點は誰にでもある。自分の心の中にある「内供」を掴み出して、解剖して見るがよい。
- 眞の同情の困難な所以を考察すべきである。

七 苦行者と蛙

佐藤 春 夫

或處に一人の人間がゐた。彼は洞穴の口にある石の上に坐つてゐた。何時から彼が其處にゐて、どれだけ長い間そのやうにぢつとしてゐたかを私は知らない。——とにかく、そんな一人の人間がゐた。或時、その人間の眼の下へ一疋の蛙が出て來た。蛙の方では、初め彼の目の前に坐つてゐる人間には氣がつかかなかつた。それ程その人間はぢつとしてゐたからである。併し彼の前に坐つてゐるのが生きた人間であることを知つた時、蛙は驚いた。

「そこに、石のやうに坐つてゐるのはどなたですか、蛙はその人間を見上げて、さう言つた。

「私か、私は苦行者だ。」

さう人間が答へた。併し蛙は苦行者といふ言葉をよく知らな

つた。そこで蛙は重ねて訊いた。

「苦行者？さうしてあなたはそんなにちつと坐つて、一體何をなさるのです。」

そこで苦行者は再び答へた。

「私はちつと坐つてゐる。私は私の眼を、私自身の世界を幸福にする星の上に置いて、また私は私の心を、私自身の地球の核心に据ゑて、私はかうして私の宇宙の天體と地球との運行を一心に調節してゐる……」

「謎のやうな事を仰しやらずに」と、蛙は苦行者の言葉を遮つた。

「どうぞ無學な蛙にもわかるやうに仰しやつて下さい。要するにあなたは、何の爲にそんなことをなさるのです。」

「一口に言へば」と苦行者が答へた。私は不死を求めてゐるのだ。瞬間と永遠とを一つにしようとしてゐるのだ。」

さう聞いて蛙は躍り上つた。

「おゝ！このお方こそ私の探してゐた先生だ。噂に聞いたあのお方だ。先生、どうぞ私を先生のお弟子にして下さい。」

それから蛙は、持前の雄辯で、彼の身の上と、彼が苦行者の弟子になりたいたいといふ理由とを説明した。それによると、この蛙はもとイソップ物語の中の古沼の蛙の一人であつた。その時彼の故郷である古沼では大變な騒動が起つてゐた。その古沼の蛙たちは、彼等自身を統治するに足りるやうな強い立派な王様を彼等自身以外に欲しいと神様にお願ひしたのが因で、神様は最初に、王様として木の丸太を下さつただけけれども、もつと強い立派な働のある王様をと蛙達が重ねて願つた時には、神様は恐しい鰐をその古沼の王様として授けて下さつた。鰐は位につくと同時に、手當り次第に蛙を喰殺し始めた。そこで蛙達の或者は神様を呪ひ、或者は新しい王

に對して一揆を企てた。多くの蛙達は、彼の父や母や子を鰐に喰はれた。

「かうして」と苦行者の前の蛙は言つた。私は多くの死を見ました。又我勝ちに鰐の口から逃れようと争つてゐる同類の淺ましさをも見ました。さうして私は世の中を悲しいものだと見て取りましたから、或夜その沼から遁れ出して、水を遡つて遠い旅を續けました。私はその途中で先生のお噂を承つて、その時からどうかして先生のお弟子になりたいと思つてゐたのです。先生、どうぞ私を先生のお弟子にして下さい」

「とにもかくにも、此處に私と一緒にゐろ」

苦行者は蛙にさう答へた。さうして蛙は苦行者の弟子になつた。蛙は先生の前に兩手をついて坐つた。彼等は互に向合つて坐つた。彼等は只黙つてゐた。日の光と月の光とが、上から交、彼等を照した。

又時には闇がすつほりと彼等を裏んだ。さうしてそんな時には、近くの樹の梢に梟が來て啼いた。その度ごとに蛙は怖しさに身慄ひをした。けれども我慢をして蛙は黙つてゐた。蛙の身の周圍には苔の美しい花が咲き、それが散り、また咲いて、また散つた。その青い苔は蛙の體の周圍に擴つた。蛙の坐つてゐる足許から盛上つて來た。到頭苔は蛙の體の上にも生えて來た。蛙は苔のために雨蛙のやうに青くなつた。けれども我慢をして蛙はぢつとしてゐた。併し或朝の事であつた。

「先生！」と蛙が叫んだ。先生、私はもう先生のお弟子はいやになりました」

そこで苦行者のいふのには

「それはまたどういふわけだ」

そこで蛙が答へた。

「私は私の故郷へ歸りたくなつたのです。あの古沼が懐しいのです。私は私共の仲間が今どうしてゐるかが知りたいのです。友達が戀しく、氣にかゝるのです。それに、仲間のあの怖しい騷を打棄てて、自分一人がこんな處に逃げて來てゐるのが、自分自身で耻しいのです。私は、今の私が、私のその仲間に對して何の仕事をも盡してゐなかつた事に、今氣がついたからです」

そこで苦行者が言ふには

「お前はお前の仲間ではない。たゞお前自身だ」

「それなら、先生」と蛙が重ねて反問した。

「私は私自身のために、何の仕事をも今してゐるでせう」

そこで苦行者が重ねて言ふには、

「我々は目に見えては何もしない。併し、我々は目に見えない仕事をする。丁度、我々の幸福も我々の報酬も、他の人のそのやうに目

には見えてゐないと同じ事だ。お前は、お前自身の中にあるお前の仲間を見よ。お前の仲間にあるお前を暫く見るな。又お前自身の中にある世界を見つめよ。世界の中にあるお前を暫く忘れよ。悞れるな。只暫くである。さうして結局は同じ事である」

「先生のお言葉は解らうとすれば高遠だ。丁度、無いものを捜し出さうとするのにも似てゐる」

さう言ひ放つた次の一瞬間に、蛙はもう苦行者の前にはゐなかつた。なぜかと云ふに、その時蛙は昂然として後の脚で躍り上つたからである。

蛙は石の上から下りると、やがて水の流に、以前遡つた事のある道を歸つて行つた。さうして長い旅の後に、彼は再び彼の故郷である古沼に歸りついた。けれども、彼が再び古沼に來た頃には、彼の考はまた變つてゐた。彼はもう一度、やはり苦行者の處へ、もとの先生

の處へ行かうと思ひ返した。彼が流をだん／＼下つて来て、古沼を一目見た時に、古沼はその善い悪いにかゝはらず、彼の本来の氣質には決して向かない事に氣付かずには居られなかつたのであらう。さうして、苦行者の教へたやうな物の考へ方が、その時彼にとつて解り易いものになつて來たのであらう。——それとも、もつとはつきりとした理由があつたか、私はそれについてはよく知らない。何にせよ、せつかく遠い處を故郷の古沼まで歸つて行つた蛙が、その同じ遠い道を直ぐさま取つて返して、再び苦行者の石の上に來た事は事實である。

苦行者はまだ生きてゐた。生きてもとの通りに石の上に坐つてゐた。その苦行者の目の下に再び來て坐つた時、蛙は言つた。

「先生、私をどうぞもう一度、先生のお弟子にして下さい。」
併し、苦行者はもう何も言はなかつた。只無表情な顔で頷いた。か

うして蛙は再び苦行者の前に兩手をついて坐つた。彼等は互に向合つて坐つた。彼等は只黙つてゐた。蛙はぢつと蛙の先生の瞳を凝視した。蛙はそれを彼自身の世界を幸福にする星と信じたからである。日の光と月の光とが、上から交、彼等を照した。又時には、闇が彼等をすつほりと裏んだ。さうしてそんな時には、近くの樹の下枝に梟が來て啼いた。けれども蛙はもう身慄ひはしなかつた。蛙の身の周圍には苔の美しい花が咲き、それが散りまた咲いて、また散つた。苔はもう花が咲かなくなつて、その古い苔はもう枯れて、新しい苔が生えかはつた。蛙の體の上に新しく生えた苔にも花が咲いた。それほど長い間、それほどぢつとして蛙は坐つてゐたからである。蛙はもう苔の花の事などは忘れてゐた。と云ふのは、蛙は先生の瞳をばかり見つめてゐたからである。さうして彼等は、もとより何時もたゞ黙つてゐた。併し、或夕方であつた。

「先生！」と蛙は叫んだ。先生は今どこに行かれるのです。今まで、私が私の星として見つめてゐた先生の瞳は、もう見えなくなりまして。先生のお姿は今消えて行きます。」感は差と別Fなると、蛙を開けた。
併し、苦行者はたゞ黙つてゐた。

「先生、何とか仰しやつて下さい。私を安心させて下さい！」
その時、或聲があつて言つた。その聲は空を渡るそよ風よりも微か、長い間己の聲をも他の聲をも聞かなかつた蛙の耳にだけ、とぎれ／＼に併し最もはつきりと聞く事が出来た。聲は言つた。

「蛙よ、私の弟子よ、安心せよ。今お前は悟る、お前の目から私が消える時に、私の目にはお前はもう夙まくに消えてゐる。それ故に、お前自身もまた、私が消去する事を恐れるな。本来影であるところの我々は、影の世界に入る時には消去する。併し、その時我々は何處にでも、何時までも在る。丁度、月の照す光が、何處にでも、何時までも在り、而も

それは見えるけれども手に掬ふ事は出来ず、手に掬ふすべはないけれども確に在るやうに。」

響のない聲がさう語つた。丁度その時、深くなつて行く夕闇の中に、そのために光を増した月影が、鬱蒼とした樹々の葉の間から洩れて、その石の上に光を射した。その月は、その石の上には、たゞ蛙ばかりが在るのを見た。潺湲シシシたる溪流の響が静寂を語つた。

——藝術家の喜び——

註——□佐藤春夫。明治二十五年和歌山縣に生れ、慶應義塾大學文科に學んだ。詩集や小説集の著が多い。

鑑賞——□篇中に漲る清高な氣韻を感じるであらう。

□かなりむづかしい意味を含めた寓話である。わざと註を施さなかつたら、十分味讀して考へてみるがよい。

八 短歌大観 その二

飛鳥路はゆふ立すらく葛城や二上やまに虹たちわ
たる
尾山篤二郎

香具山を晴れゆく雨の返しかぜ夕桑畑の葉揺れ涼
しも
川田 順

心あてにそれかと思ればそれと見えて月にかすか
なり故郷の山
石 樽 千 亦

高原の山の萱原夏たけて秋にちかづく日のひかり
かも
太田 水 穂

竹やぶの中にこまれる日の光こまやかにして土に
及べり
浅野 梨 郷

端居して夜を惜しみをれば天のがは木梢うつりて
いやさやかなり
宇都野 研

鶏のこゑ鳴きしづまりて霧ふかき向つ底に月かた
ぶきぬ
河野 慎 吾

桐の花實となる頃となりにけりこの硝子戸に秋の
風ふき
吉 井 勇

秋風のふく日となりて鳴く蟬のひとつの聲はつゞ



かざりけり

岡

麓

大銀杏ひと葉うごかず秋空の晴れたる下に黄なる
静けさ

金子薫園

朝霧にすがたは見えね山鴉こゝだも里へ啼きくだ
るらし

半田良平

朝ゆふの息こそ見ゆれもの言ひて人に親しき冬近
づくも

中村憲吉

ふか溪（ミナ）の河原石床ふゆ日さしあかるきからに行き
の寂しる

新井

洸



大寒のさむさいたりて土に凝るあしたの霜のいろ
寂びにけり

吉植庄亮

ひそまりて久しく見れば遠山のひなたの冬木風さ
わぐらし

若山牧水

青山の雪かゞやけりこの國に父はいのちをたもち
ています

島木赤彦

雪はれて午^{ひる}たけにけりこの浦に眞向きに船の入り
來る見ゆ

古泉千樞

青う同門

大の事、下も都
二百年止明

九 恩讐の彼方に

菊池寛

浅草田原町の旗本中川三郎兵衛の家來市九郎は、ある事から主人三郎兵衛の激怒を買つた揚句、終に之を殺し、主家のあり金を獲つて江戸を逐電した。

市九郎は根が悪人ではなかつたが、東山道を上方へ上る途中、信州木曾路にさしかゝつた頃、路用が全く盡きてしまふと、終に、彼は強盜を働くやうになつた。さうして鳥居峠の麓に茶店を開き、夜になると道行く人を殺害しては、その金品を強奪してゐた。

處がある年の春、年若い夫婦連の旅人を殺害したのが不思議な機縁となつて、市九郎の心には久しく隠れてゐた良心が猛然として蘇り、終に力強い後悔の念に責められて、年來のその兇惡な生活から逃れ出るに至つたのである。

一

市九郎は、山野の別ちなく、只ひた走りに走つた。二十里に餘る道を只一息に馳せて、翌日の夕暮には美濃國大垣在に辿り著いてゐた。彼は此處へ來る迄何處へ止らうといふ當もなかつた。何人を頼らうといふ當もなかつた。只妄に逃走りたかつた。一途に今迄の自分の生活から逃れたかつたのである。

彼は不圖大垣在の淨願寺といふ大寺の門前へ出た。殷々と鳴り響いてゐる暮六つの鐘を聞いた時に、彼の頼りない心は、端なくも繼るべき最後のものを見つけたのである。

淨願寺は、美濃一國眞言宗の總録であつた。市九郎は、現住明遍上人に必死の教化を求めて、心からの懺悔をした。上人は、遠にこの極重惡人をも捨てなかつた。市九郎が懺悔をした後に、有司の許へ自首しようといふのを止めて、

「重ねて、悪業を重ねた汝ぢやから、有司の手に依つて身を梟木
にかけられ、現世の報を自ら受くるのも罪亡しの一法ぢやが、それ
では未來永劫焦熱地獄の苦難は免れぬぞよ。それよりも佛道に歸
依し、衆生濟度の爲に身命を捨て、諸人を救ふと共に汝自身を救ふ
のが肝心ぢや」と教化した。

市九郎は、上人の言葉を聽いて又更に懺悔の火に心を爛らせて、
當座に出家の志を堅めた。彼は、上人の手に依つて得道して、了海と
法名を呼ばれ、只管佛道修業に肝膽を砕いた。道心勇猛の爲だらう
か、僅か半年に足らぬ修業に行業は氷霜よりも皎くなつた。朝には
三密の要法を凝し、夕には祕密念佛の安座を離れず、智度の心早く
も萌して、天晴の知識となり濟した。彼は、自分の道心が定つてもう
動かないのを自覺すると、師の坊の許を得て、諸人救濟の大願を起
し、諸國雲水の旅に出たのであつた。

美濃の國を後にして、先づ京洛の地を志した。彼は、幾人もの人を
殺しながら、縦令僧形の姿になつたとは言へ、自分が生き永らへて
ある事を心苦しく思はずにはゐられなかつた。彼はさうした心持
からも、諸人のため身を粉々に碎いて、自分の罪障の萬分の一をで
も償ひたいと思つてゐた。殊に自分が木曾山中にあつて行人を惱
ませたことを思ふと、道中に巡り合ふ人々に對して、償ひきれぬ負
擔を持つてゐるやうに思はれた。

行住坐臥にも人の爲を思はぬことはなかつた。道路に難澁の人
を見ると、彼は手を引き腰を押して、その道中を助けた。病に苦しむ
老幼を負うて數里に餘る道を遠しとしなかつたこともあつた。本
街道を離れた村道の橋でも破壊されてゐる時は、彼は自ら山に入
つて樹を伐り、石を運んで修繕した。路の崩れてゐるのを見れば、土
砂を運び來つて繕うた。かうして、畿内の國々から中國一帶の雲水

の旅にひたすら善根を積むことに腐心したが、身に重れる罪は山よりも高く、積む善根は土堆よりも低きを思ふと、彼は今更に半生の悪業の深きを悲しんだ。自分の行つてゐるやうな些細な善根によつて、自分の極悪が償ひきれぬことを知つて、彼は心を暗うした。逆旅の宿の寢覺には、かゝる頼もしからぬ報償をしながら、なほ生を貪つてゐる事が甚だ不甲斐ないやうにさへ思はれて、自ら命を縮めたいと思つたことさへあつた。が、その度毎に不退轉の勇を振ひ起し、諸人救済の大業を爲すべき機縁の臻らんことを祈念した。享保九年の秋であつた。彼は、赤間ヶ關から小倉に渡り、豊前の國宇佐八幡宮を拜した後、山國川を溯つて耆闍屈山羅漢寺に詣でんものと、四日市から南に赤土の茫々たる野原を過ぎ、道を山國川の溪谷に添うて辿つた。

筑紫の秋は驛路の宿り毎に更けて、雑木の林には櫨赤く爛れ、野

には稻黄色く實り、農家の軒には、この邊の名物の柿が眞紅の珠を聯ねてゐた。

それは八月に入つて間のない或日であつた。彼は、秋の朝の光に輝く山國の清冽な流を右に見ながら、三口から佛坂の山道を越えて、午近き頃樋田の驛に著いた。

淋しい驛で晝食の齋にありついた後、再び山國谿に添うて南を指した樋田驛から出外れると、道はまた山國川に添うて火山岩の海岸を傳うて走つてゐた。

歩み難い石高道を、市九郎は杖を頼りに辿つてゐた時、ふと道の傍に、この邊の農夫であらう、四五人の人々が罵り騒いでゐるのを見た。

市九郎が近づくと、その中の一人は早くも彼の姿を見付けて「御出家様、これはよい處へ來られた。非業の死を遂げた哀な亡者

ぢや、通りかゝられた縁に一遍の回向をして下され」と頼んだ。

非業の死だと聞いた時、剽賊の爲にあやめられた旅人の屍骸ではあるまいかと思つた市九郎は、自分の過去の悪業を想ひ起して、刹那に湧く悔恨の心に、兩脚の竦むのを覺えたが、それは水死した男の屍骸であつた。

「見れば水死人のやうぢやが、所々皮肉の破れてゐるのは如何した仔細ぢや」と市九郎は恐る／＼訊いた。

「御出家は旅の人と見えて御存じあるまいがこの川を半町も上れば、鎖渡しといふ難所がある。山國谿第一の切所で、南北往來の人馬が悉く難儀する處ぢや。この男はこの川上の柿坂郷に住んでゐる馬士ぢやが、今朝鎖渡しの中途で馬が狂うたため、五丈に近い處を眞逆様に落ちて、見られる通りの無慚な最期ぢや」とその中の一人が言つた。

「鎖渡しと申せばかね／＼難所とは聞いてゐたが、かやうな憐れを見ることは度々ムるか」と市九郎は屍骸を見守りながら打ちしめつて訊いた。

「一年に三四人多ければ十人も思はぬ憂目を見ることがある。無双の難所故に、風雨に棧が朽ちても修繕も思ふに委せぬのぢや」と答へながら、百姓達は屍骸の始末にかゝつた。

市九郎はこの不幸な遭難者に一遍の經を讀み了へると、足を早めてその鎖渡しへと急いだ。

其處まではもう一町と隔つてゐなかつた。見ると、川の左に聳えてゐる山が、山國川に臨む處で十丈に近い絶壁に斫裁たれて、そこに灰白色のギザ／＼した巖の多い肌を露出してゐるのであつた。山國川の水は、その絶壁に吸寄せられたやうに此處へ慕ひ寄つて、その裾を洗ひながら、濃緑の色を湛へて渦巻いてゐるのであつた。

里人等が鎖渡しと言つたのはこれだらうと、市九郎は思つた。平坦な道はその絶壁に絶たれてしまつて、その中腹を松杉などの丸太を鎖で聯ねた棧道が危げに傳はつてゐる。か弱い婦女子でなくとも、俯して五丈に餘る水面を見、仰いで頭を壓する十丈に近い絶壁を見る時は、魂消え心戦くも理であつた。

市九郎は岩壁に縋りながら、戦く足を踏みしめて、漸く渡り終つてその絶壁を振向いて見た。その刹那であつた、彼の心に咄嗟にある大誓願が勃然として萌したのである。

積むべき贖罪の餘りに小さかつた彼は、自分が精進勇猛の氣を試すべき難業に逢ふ事を祈つてゐた。今、目前に行人が艱難し、一年に十に近い人の命が奪はれる難所を見た時、自分の身命を捨ててこの難所を除かうといふ思ひ付が、旺然として起つたのも無理ではなかつた。二百餘間に亘る絶壁を剝貫いて道を通じようといふ

不敵な誓願が、彼の心に浮んで來たのも無理ではなかつた。

市九郎は、自分が求め歩いたものが漸く此處で見付かつたと思つた。一年に十人を救へば十年には百人、百年千年と經つ中には千萬の人の命を救ふことが出來ると思つたのである。

かう決心すると、彼は一途に實行に著手した。その日から羅漢寺の宿坊に宿りながら、山國川に添うた村々を勸化して、隧道開鑿の大業の寄進を求めたのである。

が、何人も、この邊には馴染のないこの風來僧の言葉に耳を傾けなかつた。

「三町をも超える大磐石を剝貫かうといふ瘋狂人ぢや、ハ、ハ」と、嗤ふものはまだよい方であつた。

「大騙ぢや、針の目から天をのぞくやうな事を言前にして金を集めようといふ大騙ぢや」と、市九郎の勸説に迫害を加へる者さへあ

つた。

市九郎は、一月にも近い間勸進に努めたが、何人も耳を傾けぬのを知ると、奮然として獨力この大業に當ることを決心した。彼は、石工の持つ鎚と鑿とを手に入れると、自分たつた一人でこの大絶壁の一端に立つた。それは一箇のカリカチユアであつた。削り落し易い火山岩であるとは云へ川を壓して聳え立つ巉々たる大絶壁を、市九郎は自分一人の力で刳貫かうとするのであつた。

「到頭氣が違つた！」と、行人は市九郎の姿を指しながら嗤つた。

併し、市九郎は屈しなかつた。山國川の清流に沐浴して觀世音菩薩に祈誓を籠めた後、渾身の力を籠めて第一の鎚を下したのであるが、それに應じて只二三片の碎片が飛散つたばかりであつた。再び力を籠めて第二の鎚を下した。更に二三片の小塊が、巨大なる無限大の大塊から分離したばかりであつた。が、市九郎は少しも失望

しなかつた。第三、第四、第五と、彼は懸命に鎚を下した。空腹を感じれば近郷を托鉢し、腹滿つれば絶壁に向つて鎚を下した。懈怠の心を生ずれば眞言を誦へて勇猛の心を振ひ起した。一日、二日、三日、市九郎の努力は間斷なく續いた。旅人は、その傍を通る度に嘲笑の聲を送つたが、市九郎の心はその爲に須臾も撓むことはなかつた。嗤笑の聲を聞けば、彼は更に鎚を持つ手に力を籠めた。

やがて市九郎は、雨露を凌ぐ爲に絶壁に近く木小屋を建てた。朝は山國川の流が星の光を寫す頃から起出で、夕は瀨鳴の音が寂靜の天地に澄みかへる頃迄も、鎚を振ふ手を止めなかつたが、行路の人々はなほ嗤笑の言葉を止めなかつた。

「身の程を知らぬたはけぢや」と、市九郎の努力を眼中に置かなかつた。

が、市九郎は一心不亂に鎚を振つた。鎚を振つて居りさへすれば、

彼の心には何の雑念も起らなかつた。人を殺した悔恨も其處にはなかつた。極樂に生れようといふ欣きん求ぐも無かつた。只そこに晴々した精進の心があるばかりであつた。彼は出家して以來夜毎の寢覺しんかくに身を苦しめた自分の悪業の記憶が、日に薄らいで行くのを感じた。彼は益えき勇猛ゆうめうの心を振ひ起して、一向專念に鎚づちを振つたのである。新しい年が來た。春が來て夏が來て、早くも一年が經つた。市九郎の努力は空しくはなかつた。大絶壁の一端に深さ一丈に近い洞窟が穿たれてゐた。それは、ほんの小さい洞窟ではあつたが市九郎の強い意志は最初の爪痕つめあとを明かに止めてゐた。

が、近郷の人々はまだ市九郎を嗤わらつた。

「あれ見られい！狂人坊主きやうにんぼうしゅがあれ丈掘りをつた。一年の間もがいてたつたあれ丈ぢや……」と嗤わらつたが、市九郎は自分の掘穿つた穴を見ると、涙の出る程嬉しかつた。それはどんなに淺くとも、自分の

精進の力の如實に現れてゐるものに相違なかつた。また一年が經つた。市九郎は年を重ねて更に振ひ立つた。夜は如法の闇に、晝は猶薄暗い洞窟の裡に端坐して、只右の腕のみを狂氣の如くに振つてゐた。市九郎にとつて、右の腕を振ふ事のみが彼の宗教的生活のすべてになつてしまつた。

洞窟の外には、日が輝き月が照り、雨が降り嵐が荒んだが、洞窟の中には間斷なき鎚づちの音のみがあつた。

二年の終にも里人は猶嗤わら笑を止めなかつたが、それはもう聲に迄は出て來なかつた。只市九郎の姿を見た後、顔を見合せて互に嗤わらふ丈であつた。更に一年經つた。市九郎の鎚づちの音は、山國川の水聲と同じく不斷に響いてゐた。村の人達はもう何とも言はなかつた。彼等が嗤わら笑の表情は、何時の間にか驚異のそれに變つてゐた。市九郎は、長い間梳くしらない爲に、頭髮は何時の間にか伸びて双肩に掩おほひか

かり、浴せざれば垢づきて人間の姿とも見えなかつた。彼は自分が掘穿つた洞窟の裡に獸の如く蠢きながら、狂氣の如くその鎚を振ひつゞけてゐたのである。

里人の驚異は何時の間にか同情に變り始めてゐた。市九郎が暫しの暇を盗んで托鉢の行脚に出かけようとする、洞窟の出口に思ひがけなく一椀の齋を見出すことが多くなつた。市九郎は、その爲に托鉢に費すべき時間を更に絶壁に向ふ事が出来た。

四年目の終が來た。市九郎の掘穿つた洞窟は最早五丈の深さに達してゐたが、その三町に超える絶壁に比ぶれば、それは物の數でもなかつた。里人は市九郎の熱心に驚いたものの、まだかくばかり見え透いた徒勞に合力する者は一人もなかつた。市九郎は只一人その努力を續けねばならなかつたが、もう掘穿つ仕事に於て三昧に入つてゐた市九郎は、只鎚を振ふ外は何の存念もなかつた。土鼠

のやうに命のある限り掘穿つて行く外には何の他念もなかつた。彼は只一人拮々として掘り進んだ。洞窟の外には春が去りて秋が來て、四時の風物が移り變つたが、洞窟の中には不斷の鎚の音のみが響いた。

「可哀さうな坊様ぢや、物に狂つたと見え、あの大磐石を穿つて行くわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終らうものを」と、行路の人々は、市九郎の空しい努力を悲しみ始めたが、一年經ち二年經ち、丁度九年目の終に、市九郎の穿つた穴は入口より奥まで二十二間を計るまでに掘り進んでゐた。

樋田郷の里人は、始めて市九郎の事業が可能であるのに氣が付いた。一人の瘠せはてた乞食僧が九年の力でこれ迄掘穿ち得るものならば、人を増し、歳月を重ねたならば、この大絶壁を穿ち貫く事も、必ずしも不思議な事ではないといふ考が里人等の胸の中に銘

せられて來た。九年前市九郎の勸進を擧つて斥けた山國川に添ふ七郷の里人は、今度は自發的に開鑿の寄進に付きはじめた。數人の石工が市九郎の事業を援ける爲に雇はれた。もう市九郎は孤獨ではなかつた。岩壁に下す多數の鎚の音は、勇しく賑かに洞窟の中から洩れはじめたのである。

が、翌年になつて、里人達が工事の進み方を測つた時、それが未だ絶壁の四分の一にも達してゐないのを發見すると、彼等は再び落膽疑惑の聲を洩した。

「人を増しても逆も成就はせぬ事ぢや。あた、了海どのに騙されて要らぬ物入をした」と、彼等は抄らぬ工事に何時の間にか倦きはじめてゐた。市九郎は、又ひとり取殘されねばならなかつた。彼は自分の傍に鎚を振る者が、一人減り二人減り、遂には一人もゐなくなつたのに氣がついたが、彼は決して去る者は追はなかつた。黙々と

して自分一人その鎚を振ひ續けて行くのであつた。

里人の注意は全く市九郎の身邊から離れてしまつた。殊に洞窟が深く穿たれ、ば穿たれるほど、その奥深く鎚を振ふ市九郎の姿は行人の眼から遠ざかつて行つた。人々は闇の裡に塞された洞窟の中を透し見ながら

「了海さんはまだやつてゐるのかなあ」と疑つたが、さうした注意もしまひには段々薄れてしまつて、市九郎の存在は里人の念頭から屢々消失せようとしたが、市九郎の存在が里人に對して没交渉である如く、里人の存在もまた市九郎に没交渉であつた。彼には只眼前の大岩壁のみが存在するばかりであつた。

市九郎は、洞窟の中に端坐し始めてから、最早十年にも餘る間、暗い冷たい石の上に坐り續けてゐた爲に、顔は色蒼ざめ、双の眼は窪んで、肉は落ち骨は露はれ、この世に生ける人の姿とも見えなかつ

たが市九郎の心には不退轉の勇猛心が頻に燃え旺つて、只一念に穿ち進む外には何物もなかつた。一分でも一寸でも岩壁の削り取られる毎に、彼は歡喜の聲を揚げた。

市九郎は只一人取殘されたまゝに、また三年を経た。すると、何時の間にか里人達の注意は再び市九郎の上に歸りかけてゐた。彼等がほんの好奇心から洞窟の深さを測つて見ると、全長六十五間、川に面する岩壁には採光の窓が一つ穿たれ、最早、この大岩石の三分の一は、主として市九郎の瘠腕に依つて貫かれてゐる事がわかつた。

彼等は再び驚異の眼を刮いた。過去の無智を耻ぢた市九郎に對する尊崇の心が再び彼等の心に復活した。やがて寄進された十人に近い石工の鎚の音が、再び市九郎のそれに和した。

また一年経つた。一年の月日が経つ中に、里人達は何時かしら目

先の遠い出費を悔いはじめてゐた。寄進の人夫は、何時の間にか一人減り二人減つて、おしまひには市九郎の鎚の音のみが、洞窟の闇を打顛はしてゐたが、傍に人がゐてもゐなくても、市九郎の鎚の力は變らなかつた。彼は只機械の如く、渾身の力を入れて鎚を擧げ、渾身の力を以てこれを振下した。彼は自分の一身をさへ忘れてゐた。主を殺した事も、剽賊を働いた事も、人を殺した事も、凡ては彼の記憶の外に薄れてしまつてゐた。

一年経ち二年経つた。一念の動くところ、彼の瘠せた腕は鐵の如く屈しなかつた。丁度十八年目の終であつた。彼は何時の間にか岩壁の二分の一を穿つてゐた。

里人はこの恐しき奇蹟を見ると、最早市九郎の仕事を少しも疑はなかつた。彼等は前二回の懈怠を心から耻ぢ、七郷の人々が合力の誠を盡して、擧つて市九郎を援けはじめた。その歳、中津藩の郡奉

行が巡視して、市九郎に對して、賞美の言葉を下した。近郷近在から三十人に近い石工が蒐められた。工事は枯葉を焼く火のやうに進んだ。

人々は衰殘の姿痛々しい市九郎に、最早そなたは石工共の統領をなさりませ。自ら鎚を振ふには及びませぬと勧めたが、市九郎は頑として應じなかつた。彼は瘡れゝば鎚を握つたまゝ、瘡れたいと思つてゐるらしかつた。彼は三十の石工が傍に働くのも知らぬやうに、寢食を忘れ懸命の力を盡すこと、少しも前と變らなかつた。

が人々が市九郎に休息を勧めたのも無理ではなかつた。二十年にも近い間、日の光も射さぬ岩壁の奥深く坐り續けた爲であらう。彼の兩脚は永い端坐に傷み、何時の間にか屈伸の自在を缺いてゐた。僅の歩行にも杖に縋らねばならなかつた。

その上、長い間闇に坐して日の光を見なかつた爲であらう、また不斷に彼の身邊に飛散る石の碎片がその眼を傷けた爲でもあらう、彼の兩眼は朦朧として光を失ひ、物のあいりも辨へかねるやうになつてゐた。

道に不退轉の市九郎にも、身に迫る老衰を傷む心はあつた。身命に對する執著はなかつたけれど、中道にして瘡れることを何よりも無念と思つたからであつた。

「もう二年の辛抱ぢや」と彼は心の裡に叫んで、身の老衰を忘れようと懸命に鎚を振ふのであつた。

冒し難き大自然の威嚴を示して市九郎の前に立塞つてゐた岩壁は、何時の間にか衰殘の乞食僧の鐵のやうな心に貫かれて、その中腹を穿つ洞窟は、命あるものの如く、一路その核心を貫かんとしてゐるのであつた。

劔貫の工事が成就に近づくに従つて、市九郎の健康は過度の勞働に依つていたましく傷けられたが、彼にとつてそれよりも恐しい敵が彼の生命を狙つてゐるのであつた。

市九郎の爲に非業の横死を遂げた中川三郎兵衛は、家臣の手にかゝつた事から、家事不取締とあつて、家は取潰されてしまつて、その時三歳であつた一子實之助は、縁者の爲に養ひ育てられる事になつたのである。

實之助は十三になつた時、初めて自分の父が非業の死を遂げた事を聞いた。殊に相手が對等の士人でなくして、自分の家に養はれた奴僕である事を知ると、少年の心は無念の憤に燃えた。彼は即座に復讐の一儀を肝深く銘じた。彼は柳生の道場に入つて、劍道の修業に肝膽を砕いた。十九の年に免許皆傳を許されると、彼は欣び勇んで報復の旅に上つたのである。若し首尾よく本懐を達して歸れ

ば一家再興の肝煎かんせんもしようといふ親類一同の激勵の言葉に送られながら。

實之助は馴れぬ旅路に多くの艱難を苦しみながら諸國を遍歴して、只管敵市九郎の所在を求めた。市九郎を只一度さへ見た事もない實之助にとつては、それは雲を掴むが如き覺束なき搜索であつた。五畿内、東海、東山、山陰、山陽、北陸、南海と、彼は漂泊の旅路に年を送り年を迎へ、二十七の年まで空虚な遍歴の旅を續けた。敵に對する怨も憤も、旅路の艱難に消磨せんとする事度々であつたが、非業に殞れた父の無念を思ひ、中川家再興の重任を考へると、奮然と志を振ひ起すのであつた。

江戸を立つてから丁度九年目の春を、彼は福岡の城下に迎へた。本土を空しく尋ね歩いた後に、邊陲へんすいの九州をも探つて見る氣になつたのである。

福岡の城下から中津の城下に移つた彼は、二月に入つた一日、宇佐八幡宮に賽して、本懐の一日も早く達せられんことを祈念した。實之助は参拜を終へてから境内の茶店に憩うた。その時に、ふと彼は、傍の百姓體の男が居合せた参詣客に次のやうに話すのを聞いたのである。

「その出家といふのは、元は江戸から來たお人ぢやげな。若い時に人を殺したのを懺悔して、諸人濟度の大願を起したさうぢやが、今言うた樋田の刳貫は、この御出家一人の力で出來たと言うてもよい位ぢや」と、百姓が言つた。

この話を聞いた實之助は、九年この方未だ感じなかつたやうな興奮を覺えた。彼はやゝ焦込みながら、

「卒爾ながら少々物を訊ぬる。その出家と申すは年の頃は何程位ぢや」と訊いた。その男は自分の談話が武士の注意を惹いた事を光

榮であると思つたらしく、

「左様でムいますな。私はその御出家を拜んだ事はムいませぬが人の噂では、もう六十に近いと申します」

「丈は高いか低いかと、實之助は疊みかけて訊いた。

「それもしかとはわかりませぬ。何様洞窟の奥深く居られる故、しかとはわかりませぬ」

「その者の俗名は何と申したか存ぜぬか」

「それもとんとわかりませぬが、お生れは越後の柏崎で、若い時に江戸へ出られたさうでムります」と、百姓は答へた。

こゝまで聞いた實之助は、躍り上つて欣んだ。彼が江戸を發つ時に、親類の一人は、敵は越後柏崎の生れ故、故郷へ立廻るかも計りたい、越後は一入念を入れて探索せよといふ注意を受けてゐたのであつた。

實之助は是ぞ正しく宇佐八幡宮の神託ではあるまいかと勇み立つた。彼はその老僧の名と山國谿に向ふ道を訊くと、最早八つ刻を過ぎてゐたにも拘らず、必死の力を双脚に籠めて敵の所在へと急いだ。そしてその日の初更近く樋田村に著いたのである。彼は直に洞窟へ立向はうかと思つたが、焦つてはならぬと思ひ返して、その夜は樋田驛の宿に焦慮の一夜を明すと、翌日は早く起出でて、輕装して樋田の刳貫へと向つた。

刳貫の入口に著いた時、彼はそこに石の碎片を運び出してゐる石工に訊ねた。

「この刳貫の中に、了海といはゝる御出家がおはすさうぢやが、それと相違ないか」

「おはさないで何とせう。了海様はこの洞穴の主も同様な方ぢや、ハ、ハ、ハ」と石工は心なげに笑つた。

實之助は本懐を達すること、はや目前に在りと欣び勇んだが、彼は周章ててはならぬと思つた。

「して、出入の口は此處一箇所か」と訊いた。敵に逃げられてはならぬと思つたからである。

「それは知れた事ぢや、向へ口を開ける爲に、了海様は塗炭トクリの苦しみをなさつてゐるのぢや」と石工が答へた。

實之助は、多年の怨敵が囊中の鼠の如く目前に置かれてゐるのを欣んだ。縦令その下に使はるゝ石工が幾人居ようとも、斬殺すに何の雜作もあるべきと勇み立つた。

「其方に少し頼みがある。了海どのに御意得たいため、遙々參つた者ぢやと傳へてくれ」と言つた。石工が洞窟の中へ入つた後で、實之助は一刀の目釘を濕した。彼は心の裡で、生來初めてめぐり逢ふ敵の容貌を想像した。洞門の開鑿を統領してゐると言へば、五十は過

ぎてゐるとは言へ、筋骨逞しき男であらう。殊に、若年の頃には兵法に疎からざりしといふのであるから、ゆめ油断はならぬと思つてゐた。

暫くして、實之助の面前へ洞門から出て来た一人の乞食僧があつた。それは出て來ると言ふよりも、暮の如く這出たと言ふべきであつた。肉悉く落ちて骨露はれ、脚の關節以下は悉く爛れて、永く正視するに堪へなかつた。破れた法衣によつて僧形とは知れるものの、頭髮は永く伸びて皺だらけの頭を掩うてゐた。老僧は灰色をした眼をしばたゝきながら實之助を見上げて、

「老眼衰へはてまして、孰れの方とも辨へかねます」と言つた。

實之助の極度にまで張りつめて來た心は、この老僧を一目見た刹那、たゞ／＼となつてしまつてゐた。彼は、心の底から憎惡を感じ得るやうな惡僧を欲してゐた。然るに、彼の前には人間とも死骸と

もつかぬ半死の老僧が蹲つてゐるのである。實之助は失望し始めた自分の心を勵まして

「そのもとが了海と言はるゝか」と意氣込んで訊いた。

「如何にも左様でムります。して其許は」と、老僧は訝しげに實之助を見上げた。

「了海とやら、如何に僧形に身を窶すとも、よも忘れはすまい。汝、市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川三郎兵衛を打つて立退いた覺があらう。某は三郎兵衛の一子實之助と申す者ぢや。最早逃れぬところと覺悟せよ」と、實之助の言葉はあくまで落著いて居たが、其處に一步も許すまじき嚴正さがあつた。

が市九郎は實之助の言葉を聽いて少しも駭かなかつた。

「いかさま、中川様の御子息の實之助様か、いや、お父上を打つて立退いた者、この了海に相違ムりませぬ」と、彼は自分を敵と狙ふ者に

逢つたといふよりも、舊主の遺兒に逢つた親しさを以て答へたが、實之助は市九郎の聲音に欺かれてはならぬと思つた。

「主を打つて立退いた汝を打つ爲に、十年に近い年月を艱難の裡に過した。此處で逢ふからは、最早逃れぬ處と尋常に勝負せよ」と言つた。

市九郎は少しも怯れなかつた。最早期年の裡に成就すべき大願の成るを見果てずして死ぬる事が稍悲しまれたが、それも己が悪業の報であると思ふと、彼は死すべき覺悟を定めたのである。

「實之助様、いざお斬りなされい。お聞及びもなされたらうが、之は了海奴が罪亡しに掘穿たうと存じた洞門で、十九年の歳月を費して九分迄は竣工致した。了海身を果つるとも、最早年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり、この洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思ひ残すこともムりませぬ」と言ひなが

ら、彼は見えぬ眼をしばたゝいたのである。

實之助はこの半死の老僧に接してゐると、親の敵に對して懐いてゐた憎しみが、何時の間にか消失してゐるのを覺えた。敵は、父を殺した罪の懺悔に、身心を粉に碎いて半生を苦しみぬいてゐる。しかも、自分が一度名告りかけると、唯々として命を捨てようとしてゐるのである。かゝる半死の老僧の命を取る事が、果して復讐であらうかと實之助は考へたのであるが、併しこの敵を打たない限りは、多年の放浪を切上げて江戸へ歸るよすがはなかつた。まして家名再興などは思ひも及ばぬ事であつたのである。實之助は、憎悪よりも、寧ろ打算の心からこの老僧の命を縮めようかと思つたが、烈しい燃ゆるが如き憎悪を感じずして、打算から人間を殺すことは、實之助にとつて忍びがたい事であつた。彼は消えかゝらうとする憎悪の心を勵ましなが、打ちがひなき敵を打たうとしたのであ

る。

その時であつた。洞窟の中から走り出て來た五六人の石工は、市九郎の危急を見ると、驚いて彼を庇ひながら、

「了海様を何とするのぢや」と、實之助を咎めた。彼等の面には、仕儀に依つては許すまじき景色が歴々と見えた。

「仔細あつてその老僧を敵と狙ひ、端なくも今日廻り合うて本懷を達するものぢや、妨げ致すと、餘人なりとも容赦は致さぬぞ」と、實之助は凜然と言つた。

が、その中に石工の數は殖え、行路の人々が幾人となく立止つて、彼等は實之助を取巻きながら、市九郎の身體に一指をも觸れさせまいと、銘々に敦圍きはじめた。

「敵を打つ打たぬなどは、それはまだ世に在る裡の事ぢや、見らるる通り、了海どののは染衣薙髮の身である上に、この山國谿七郷の者

にとつては、持地菩薩の再來とも仰がれる方ぢや」と、その中の或者は實之助の敵打を叶はぬ非望であるかのやうにいひ張つた。

が、かう周圍の者から妨げられると、實之助は、敵に對する怒が何時の間にか蘇つてゐた。彼は武士の意地として手を拱いて立去るべきではなかつた。

「縦令沙門の身であらうとも、主殺しの大罪は免れぬぞ。親の敵を打つ者に妨げ致す者は、一人も容赦はない」と、實之助は一刀の鞘を拂つた。實之助を圍ふ群衆も皆悉く身構へた。するとその時に、市九郎は嘎れた聲を張上げた。

「皆の衆、お控へなされい。了海打たるべき覺が十分ムる。この洞門を穿つことも只その罪滅しの爲ぢや。今かゝる孝子のお手にかゝり半死の身を終ること、了海が一期の願ぢや。皆の衆、妨げ無用ぢや、かう言ひながら、市九郎は身を挺して實之助の傍にゐざり寄らう。

とした。かねて市九郎の強い意志を知りぬいてゐる周囲の人々は彼の決心を翻すべき由もないのを知つた。市九郎の命は茲に終るかと思はれた。その時に石工の頭梁が實之助の前に進み出でながら、

「御武家様もお聞及びでもムらうがこの刳貫は了海様一生の大誓願にて二十年に近き御辛苦に身を碎かれたのぢや。いかに御自身の悪業とは言へ、大願成就を目前におきながらお果てなさること、如何ばかり無念であらう。我等の擧つてのお願いは、長くとは申さぬ。この刳貫の通じ申す間、了海様のお命を我等に預けては下さらぬか。刳貫さへ通じた節は、即座に了海様を存分になさりませ」と、彼は誠を表はして哀願した。群衆は口々に「ことわりぢや、ことわりぢや」と賛成した。

實之助もさう言はれて見ると、その哀願を聴かぬわけには行か

なかつた。今此處で仇を討たうとして、群衆の妨害を受けて不覺を取るよりも、刳貫の竣功を待つたならば、今でさへ自ら進んで討たれようと言ふ市九郎が、義理に感じて首を授けるのは必定であると思つた。又さうした打算から離れても、仇とは言ひながら、この老僧の大誓願を遂げさせてやるのも決して不快な事ではなかつた。實之助は市九郎と群衆とを等分に見ながら、

「了海の僧形に愛でて、その願許して取らさう。束へた言葉を忘れまいぞ」と叫んだ。

「念もない事でムる。一分の穴でも一寸の穴でも、この刳貫が向側へ通じた節は、その場を去らず了海様を討たせ申さう。それ迄はゆる／＼とこの邊に御滞在なされませ」と、石工の頭梁は穩かな口調で言つた。

市九郎は、この紛擾が無事に解決がつくと、それに依つて徒費し

た時間が如何にも惜しまれるやうに、にぢりながら洞窟の中へ入つて行つた。

實之助は大切な場合に思はぬ邪魔が入つて、目的を達し得なかつた事を憤つた。彼は如何ともし難い鬱憤を抑へながら、石工の一人に案内せられて木小屋の中へ入つた。

自分一人になつて考へると、仇を目前に置きながら討ち得なかつた自分の不甲斐なさを無念と思はずにはゐられなかつた。彼の心は何時の間にか苛立たしい憤で一はいになつてゐた。彼はもう刳貫の竣成を待つといふやうな、敵に對する緩やかな心を全く失つてしまつた。彼は今宵にも洞窟の中へ忍び入つて、市九郎を討つて立退かうといふ決心の臍を固めた。が、實之助が市九郎の張番をしてゐるやうに、石工達も實之助をそれとなく見張つてゐた。

最初の二三日を心にもなく無爲に過したが、丁度五日目の晩で

あつた。毎夜の事なので、石工達も警戒の眼を緩めたと見え、丑に近い頃には、何人も深い眠に入つてゐた。實之助は今宵こそと思ひ立つた。彼はガバと起上ると、枕元の一刀を引寄せて、靜に木小屋を出た。それは早春の夜の月が冴えた晩であつた。山國川の水は月光の下に蒼く渦巻きながら流れてゐた。が、かうした周圍の風物には眼もくれず、實之助は足を忍ばせて竊かに洞門に近づいた。削り取つた石塊が所々に散らばつて、歩を運ぶ度毎に足を痛めた。

洞窟の中は、入口から來る光と、所々に剝明けられた窓から射し入る月光とで、所々灰白く光つてゐるばかりであつた。彼は右方の岩壁を手探り手探り、奥へ奥へと進んだ。

入口から二町ばかりも進んだ頃、ふと彼は、洞窟の底からクワツクワツと間を置いて響いて來る音を耳にした。彼は最初それが何であるかわからなかつたが、一步々進むに従つて、その音は擴大

して行つて、終には洞窟の中の夜の寂靜の裡に飭する迄になつた。それは明かに岩壁に向つて鐵鎚を下すものに相違なかつた。實之助はその悲壯な、凄みを帯びた音に依つて、自分の胸が烈しく打たれるのを感じた。奥に近づくに従つて、玉を碎くやうな鋭い音は洞窟の周圍に飭して、實之助の聽覺を猛然と襲つて來るのであつた。彼はこの音をたよりに這ひながら近づいて行つた。この鎚の音の主こそ敵了海に相違あるまいと思つた。竊かに一刀の鯉口を寛げながら、息を潜めて寄添うた。その時、ふと彼は鎚の音の間々に、嘯くが如く呻くが如く、了海が經文を誦する聲を聞いたのである。

その嘎れた悲壯な聲が水を浴びせるやうに實之助の心に徹して來た。深夜人去り草木眠つてゐる中に、只一人暗中に端坐して鐵鎚を振つてゐる了海の姿が、墨の如き闇にあつて、猶實之助の眼に歴々として映つて來た。それは最早人間の心ではなかつた。喜怒哀

樂の情の上にあつて、只鐵鎚を振つてゐる勇猛精進の菩薩心であつた。實之助は握りしめてゐた太刀の柄が何時の間にか緩んでゐるのを覺えた。彼はふと自分を顧みた。既に佛心を得て衆生の爲に碎身の苦を嘗めてゐる高德の聖に對し、深夜の闇に乗じて、ひはぎの如く獸の如く、瞋恚の劍を抜きそばめて近寄らうとする自分を顧みると、彼は強い戰慄が身體を傳うて流れるのを感じた。

洞窟を搖がせる力強い鎚の音と、悲壯な念佛の聲とは、實之助の心を散々に打碎いてしまつた。彼は、屑く竣功の日を待ち、彼との約束の果さるゝのを待つより外はないと思つた。

實之助は、深い感激を懷きながら、洞外の月光を目指して洞窟の外に這出たのである。

その事があつてから、實之助は、洞窟の外の木小屋の内に朝夕を送りながら、心靜に刳貫の成就されるのを待つてゐた。彼はもう老

僧を討つて立退かうといふやうな嶮しい心は少しも持つてゐなかつた。了海が逃げも隠れもせぬ事を知ると、彼は、好意を以て了海がその一生の大願を成就する日を待つてやらうと思つてゐた。

彼一人が爲す事もなく暮してゐるにも拘らず、周囲の石工達は、寸陰をも惜しんで懸命に働いてゐた。了海の不斷の精神が、何時の間にか石工達の心にも浸渡つてゐるやうであつた。

彼等は、實之助に對して朝夕快い挨拶を贈つた。

「お武家様、今日は何處へおはせられた」などと問ひかけられる度に、實之助は自分の所在のない生活が氣になつてゐた。周囲の人々が凡て狂氣のやうに働いてゐる中に、自分一人漠然と暮してゐる事が、彼に心苦しく思はれはじめた。二月もかうして漠然と暮してゐる中に、彼はふと思ひついた。かうして爲す事もなく待つてゐるよりも、自分もこの大業に一臂の力を藉す事に依つて、幾何でも成

就の日が早められるのではないかと思つた。それと同時に、復讐の期日が縮められるのではないかと思つた。さう思ふと、彼はその日から石工の群に伍して鎚を振ひはじめたのである。

かうして、敵と敵とが相並んで鎚を下しはじめたのである。實之助は、本懐の日は一日も早かれと懸命に鎚を振ふのであつた。了海は、實之助が出現してからは一日も早く大願を成就して、惜しからぬ命を孝子の手に授けてやりたいと思つたのであらう。彼は今迄にも見られなかつたやうな烈しさで、狂人のやうに岩壁を打碎いて行くのであつた。

その中に月が去り、月が來た。最初は自分自身の爲に鎚を振つてゐた實之助も、この剗貫の大業を爲し甲斐のある仕事であると思ふやうになつてゐた。阿修羅の如く鎚を振つてゐる了海の姿を見てゐると、彼はその勇猛心に動かされて、ともすれば讐敵の恨

を忘れがちであつた。

石工共が晝の疲勞を休めてゐる眞夜中にも、この敵同志は黙々として鎚を振ふことなどもあつた。

それは、了海が樋田の岩壁に第一の鎚を下してから丁度二十一年目、實之助が了海にめぐり逢うてから一年六箇月を経た延享三年九月十日の夜であつた。この夜も石工共は悉く小屋に退いて、了海と實之助のみが、終日の疲勞にめげず、懸命に鎚を振つてゐた。その夜九つに近い頃であつた。了海が力を籠めて振下した鎚が、朽木を打つが如く何の手答もなかつたので、思はず力餘つて、鎚を持つた右の手が岩に當つた。その時であつた。彼は「あッ」と思はず聲を揚げた。了海の朦朧たる老眼にも紛れなく、その鎚に破られた小さい穴から、月の光に照された山國川の姿が歴々と映たつのである。了海は「おう！」と全身を顫はせるやうな、名狀しがたき叫び聲を揚げ

たかと思ふと、それに續いて、狂したかと思はれるやうな歡喜の泣笑ひが、洞窟を物凄く動搖めかしたのである。

「實之助どの、御覽なされい。二十一年の大誓願、今宵端なくも成就いたしました」かう言ひながら、了海は實之助の手を執つて小さい穴から山國川の流を見せた。その穴の眞下に黒ずんだ土の見えるのは、岸に添ふ街道に紛れもなかつた。敵と敵とはそこに手を取合うて大歡喜の涙に咽んだのであるが、暫くすると了海は身を退つて、

「いざ、實之助殿、約束の日ぢや、お斬りなされい。かゝる法悦の最中に往生致すならば、未來は淨土に生るゝこと必定疑なしぢや。いざお斬りなされい」と、彼の噺れた聲が洞窟の夜の空氣に響いた。が、實之助は了海の前に手を拱いて坐つたまゝ、涙に咽んでゐるばかりであつた。心の底から湧出づる歡喜に、戦く凋びた老僧の顔を見てゐると、

彼を敵として殺す事などは思ひ及ばぬ事であつた。敵を打つなどといふ心よりも、このか弱い人間の二つの腕に依つて成し遂げられた偉業に對する驚異と感激との心で、胸が一杯であつた。彼はわざわざ寄りながら再び老僧の手を取つた。二人は其處に凡てを忘れて、感激の涙に何時までも浸つてゐたのであつた。

—我 鬼—

註—□總錄。僧録司のこと、寺の司をいふ。

□行業。佛道を修業すること。

□三密の要法。身密、口密、意密といふ肝要な修業法。

□祕密念佛。眞言祕密の奥深い教に心を傾け、ひたすら佛を念じ經を誦すること。

□智度の心。悟道に達する堅固な佛心。

□善根を積む。善い果報を受ける爲に功德を積むこと。

□不退轉。挫け衰へないこと。

□齋。晝の食事のこと。佛家の言葉。

□カリカチュア。諷刺畫、戲畫などと譯す。ボンチ繪。

□欣求。心から喜んで淨土を願ひ求めること。

□如法の闇。言ふまでもない眞の闇といふこと。

□宗教的生活。人間の生活をいろ／＼な方面から見て、精神生活、物質生活などといふ。宗教的生活とは信仰上から見た生活で、こゝに言ふ所の意味は彼の生活には最早佛を禮拜することもなく、經文を読むこともなく、只鎚を振ふことが宗教信者としての生活の全部となつてしまつたといふこと。

□あいろ。あやめ、楳様や色彩。

□八つ刻。今の二時頃。こゝは午後である。

□持地菩薩。大地が萬物を載せ保つてゐるやうに、その徳が廣大な地藏様。

□丑。午前二時頃。

□延享三年。櫻町天皇の御代で、紀元一七四六年、徳川九代將軍家重の時代。

□九つ。十二時。こゝは夜の方である。

鑑賞—□感想をまとめ、今一度作の筋を思ひ浮べて見よ。而して更に熟讀せよ。

一〇 熊谷蓮生坊

山本有三

人物

熊谷次郎直實(後に僧蓮生)

同小次郎直家(直實の子息)

成木大夫守直(直實の伯父)

百 姓

その女房

僧 盛 蓮

同 靜 空

外に熊谷の家來數人

時代

鎌倉初期

第一幕

武藏國熊谷郷、直實の邸内。質素な建物。前は庭、下手に矢場の土手があるところ。
初秋。直實は庭に下立つて、弓の本弭モトヘを膝頭モトヘにあてたまゝ、ちつと向の的を睨んでゐる。その後、家來が二人控へてゐる。
直實はやがて矢を番へカ靜に引きしほつて、ひようと放つ。的は見えないけれど、命中した音が氣持よく響く。

直 實 矢を取つて參れ。

家來一 是あ。(立上る)

直 實 それからの的を取換へえ。

家來一 今度は四半的はんぱんてきにいたしませうか。

直 實 さうだな。——いや、九半的にいたせ。

家來一 畏りました。(的の方に走つて行く)

直 實 あゝ、久しぶりでやつたら、氣持だ

家來二。明日は騎射をおやりになつては如何でございます。

直實。うむ、それもいゝの。

家來三。(入つて来る)たゞ今戻りました。

直實。おゝ、待ちかねた。どうだ、杭は悉く打ちかへたか。

家來三。地境には久下方の者が少々をりましたが、すぐ追拂ひまして、元の境界の所に改めて熊谷領の標を打立てました。

直實。して、向で恣オシマに立てくさつた棒はどういたしました。

家來三。残らず引抜いて焼捨てましてございます。

直實。久下の方から別に押寄せては來なかつたか。

家來三。何事もございませんでした。

直實。標の杭を引抜かれながら手出しも出來ぬとは、意氣地のない者共だな。

家來三。併し相手が相手故、又如何なる奸策を施さうも測られませ

んから、地境の要所々々は悉く人數を以て固めてをります。

直實。うむ、さうなくてはならぬところだ。萬一久下の手の者が不法を働いたら、用捨なく叩つ斬つてしまへ。

家來三。承知いたしました。

直實。大儀であつた。一先づ休息するがいゝ。

家來三。有り難うございます。(二禮して去る)

家來一。(少し前に戻つて來てゐる)御用意が出來ました。

直實。うむ。

直實は又矢を番へて放つ。今度も見事に命中する。つゞいて矢を番へようとすると、そこへ家來四が入つて來る。

家來四。申上げます。成木大夫様がお越しでございます。

直實。なに、伯父上が見えた。

家來四。はい。

直實 あゝうるさいな。また参つたのか。——的はそのまゝにいたしておけ。

家来一。 畏りました。

直實は氣がすゝまなさうに座敷へ上つて表へ行く。やがて成木守直を導いて入つて来る。

直實 伯父上には度々のお運び、恐縮に存じます。

守直 うるさいやうではあるが、今一度談合したいと思つて出て参つた。

直實 やはりこの間のお話についてでございませうか。

守直 うむ、このまゝでは何れの側にも不爲だから、是非とも和解をすゝめたいのだ。

直實 その儀ならば、憚りながらお打捨ておき下さい。このやうなことに御老體を煩はしましては……

守直 いや、某の力で和談が成立つものならば、足を運ぶ位は些細なことだ。其方とても訴訟などは好むところではないであらう。

直實 もとより某は武人ですから、さういふ事は別して好みませんが、併し境界を犯され、剩へ訴訟を持ちかけられた上は、是非がございませぬ。

守直 何れが訴へ出でたにもせよ、兎に角久下は其方にとつては義理ある叔父だ。さういふ間柄でありながら、互に確執を續けるとは面白からぬことではないか。

直實 いや、あのやうなものは叔父などとは思ひませぬ。

守直 併し其方は早く親御に離れたため、幼少の頃は何かと世話になつたではないか。

直實 それなればこそ、某は長いこと忍んで居りました。併しもう

さうくは黙して居られません。殊に彼は某を庇護したなどと申して居りますが、まことは某の幼弱に乗じて所領を騙し取つた人非人でございます。

守直 其方はすぐ激した物言ひをするが、もう少し穩かに話してはどうだ。

直實 いや、某ならずとも憤るは當然と存ぜられます。伯父上は實情を御承知ないので、さやうに仰せられますが……

守直 話を聞いたら、それはいろくあらうが、さういふことは一切水に流して、どうだ。久下と清く和解をしては。

直實 某には毛頭さやうな心はございません。

守直 今の場合、其方としては和談はしにくいかも知れぬが、併し一族の間に事があるのは我等の好まぬところだ。何れが傷ついても困るから、こゝは何とか折合ふ道はないものであらう

か。

直實 ……………

守直 どうであらう。例へばいま争になつてゐる土地の中、佐谷田は熊谷領、葛岡は久下領といふやうなことにして譲り合つては……

直實 いや、あれは何れも當方の所領でございます。

守直 それは久下方でもさういつてゐる。併しそれでは何時になつても果しがないから、もうお互に我を折らぬか。久下方では、其方さへその心なら話し合つてもいゝとまで打解けてゐるのだ。

直實 いや、それは本心とは存ぜられません。縦令久下が如何やうなことを申しませうとも、彼の言葉などは微塵も信をおけませぬ。某はその手で何度裏切られたか知れませぬ。若しそれが

本當ならば、不法の所爲は當然手控へなくてはなりません、昨夜も闇に乗じて境界の杭を打ちかへさせたやうな腹黒い奴でございますから……

守直 併し久下の方の話では、其方の手の者こそ猥に地境の棒杭を引抜き、狼藉を働くやうに申しをつたが……

直實 いえ、そのやうな事はございませぬ。なるほど久下領と記した棒杭は今日も引抜かせましたが、それには引抜かすべきいはれがあるからでございませぬ。御承知の如く、久下領とは大部分荒川が境をなしてをるところから、向はそれをよいことにして、洪水の度毎に堤を切つては流を變へ、狡猾にも當方の領地を取込まうとたくらんでをるので、先日の洪水にもまた、流域を變じて境の杭を打ちかへしましたから、某がそれを引抜かせたに何の僻事がございませう。それよりも洪水

を利用して地境を犯して來る久下こそ理不盡ではございませぬか。

守直 事毎にさう唯み合つてばかりをつては果しがないではないか。

直實 いや、某は事を好むのではございませぬ。唯父祖の所領を守護するだけでございませぬ。某は先年賜つた、武藏國の舊領久下直光の押領を停止し、直實領掌すべしといふ安堵の下文に従つて、幼弱の折欺き取られた所領を取戻したまででございませぬ。然るに久下はそれを遺恨に思つて……

守直 事が入組んでをるだけに双方言分があるやうであるが、併しそこを穩かに話し合つてはどうだ。

直實 言分！久下に言分などあらう道理がありません。掠められ騙されてゐるのは某の方です。當方には更に落度はありません。

ぬから、譲り合ふべき理由などはございませぬ。殊に某が本領
歸附の許を得たのは、久下のやうに口先でごまかしたのでは
ありません。生を堵して漸く購つたものでございませぬ。佐竹の
冠者の追討と言ひ、一の谷の先陣と言ひ、無官の大夫を討取つ
たことと申し、烏滸がましくはございませぬが、何れもさうたや
すいことではございませぬ。若し強ひてこの土地が所望なら、
弓矢を執つて押寄せて來るのが、いつち近道と存ぜられます。
事實某は腕で取つたところ故、奪ふなら腕で來るのが本來で
す。もとより某も一戦は望むところですから……
守直 いや、そんな不穩なことを申しては相成らぬ。折角世の中が
静まつたばかりではないか。
直實 併し譯もなく、只掠め取られるのは忍べませぬ。某は負ける
ことは大嫌ひでございませぬ。

守直 其方に負けよと言つて居るのではない。穩かに折合つては
どうかと申して居るのだ。
直實 お言葉ではございませぬが、某は生來武人として育つたせゐ
か、勝つか負けるか、その外のことには知りませぬ。當節は和解と
か話合ひとか申すことが折々行はれるやうに聞及びますが、
それをする位なら、某は初から争などは致しませぬ。
守直 なるほど、それはさうであらうが、併し……
直實 某は片意地で申して居るのではございませぬ。己の所領を
己の所領だと言張るのは當然の事ではございませぬか。若し
某が非分ならば悉く奪ひ取らるゝとも更に苦しくはありま
せんが、當方の言分が正しい上は、一尺一寸の地たりとも、故な
く他に譲ることは出来ませぬ。
守直 では、其方はどこまでも争ふ心か。

直實 外に思案はございませぬ。(聞)

守直 いま一應思ひ直して見る氣はないか……次郎

直實 はあ。

守直 某の顔を立ててくれぬか。

直實 御懇情に背いて心苦しうございますが……

守直 ではどうあつても……

直實 (默然としてゐる)

守直 いや、妨をいたした。立上る

直實 何のおもてなしも致さず、申譯がございません。

守直去る。直實送つて行く。やがて直實ひとり戻つて来る。

直實 あゝ、氣がつまつた。

また弓を取出して弦を張る。そこへ直家が旅装のまゝ入つて来る。

直家 父上、相變らず弓でございますな。

直實 おゝ、小次郎か。

直家 鎌倉殿から御沙汰がございましたので、急いで歸國致しました。

直實 さうか。それは大儀であつた。弓を元の處へをさめ今朝立つたのか。

直家 はい。未明に出立致しました。

直實 それにしては早く着いたな。大分馬を急がせたと見ゆるな。
——鎌倉殿にはお變りはないか。

直家 近頃は別して御機嫌麗しいやうにございます。

直實 それは重疊だして、仰といふのは。

直家 來月十五日鶴ヶ岡八幡宮で、戦歿した將士の冥福を祈る爲に放生會を御奉仕になります。当日はその御法會のあとで、相撲競馬、流鏑馬等の餘興をお催しになります。就きまして、父

上にもその晴の演武に御出場あるやうにとの御沙汰でございます。

直實。それは忝い。直實、謹んでお受け致す。放生會といふと、鎌

倉では初めての御法會だが、定めて盛大なことであらうな。

直家。某はよくは存じませぬが、百萬喉の魚鳥を買集めまして、鳥は神社に於て、魚は放生川へ當日一齊に放つてやる式ださうにございますから、このやうに功德になる法養はございますまい。

直實。源家の爲に身命を抛つた人々も、これで瞑するといふものだ。さてその演武だが、某は無論流鏑馬の方であらうな。

直家。はい。

直實。射手は幾番だ。

直家。五番と聞及びました。

直實。十騎だな。して某の順は、

直家。はい？

直實。某は何番目の射手だと言ふのだ。

直家。はい。あの父上は射手方ではございませぬ。

直實。なに、射手方ではない。では何だ。

直家。あの、的立の役でございます。

直實。的立？

直家。はい。

直實。的立？

直家。はい。

直實。たはけ者、某にそんな役が出来ると思ふか。

直家。お言葉ではございますが……

直實。いや、そんな御沙汰なら聞く要はない。

直家 父上、それは鎌倉殿から直々の仰でございませぬぞ。

直實 たとひ誰の命であらうとも、そんな意氣地のない役が引受けられるか。何故其方はそんな御沙汰を受けて來たのだ。匆々立歸つて斷つて參れ。

直家 ……………

直實 又鎌倉殿も鎌倉殿だ。弓矢執つては東國に比なまひのない某を的立に廻すとは何事だ。直實怨に存ずると、さう言上せえ。

直家 父上、それはお考違ひでございませぬ。父上なればこそ此度の晴の流鏑馬にお召出しになつたのではございませぬか。弓矢執る者は何百何千あるか知りませぬが……………

直實 それならば、何故某を的立のやうな賤役ヒナに廻すのだ。

直家 仰ではございませぬが、的立の役は決して賤役ではございませぬ。あれは射手方と同格のものださうにございませぬ。

直實 何が同格の事がある。一方は馬に乗つて矢を射るのに、こちらには徒歩的を立てて歩くのではないか。優劣のあることは初から明白だ。

直家 某も初はさう思ひました。しかし承る處によりませぬと、新日吉祭あまらぎの御幸ごきよの日に、的を立てるのは瀧口本所たきぐちほんじよの衆だと申すこととでございませぬ。して見れば、的を立てる者は射手方よりも却つて貴い位でございませぬ。かういふ故實もあることとでございませぬから……………

直實 黙れ。故實などが武士に何のか、はりがある。そんな役體やくたいもないことは無用に致せ。

直家 父上！

直實 其方に屹度申しおく。武士が故實などをつべこべ列べるやうになつては最早終だぞ。東國の武士は東國の武士らしくた

だ武を練ればそれでよいのだ。

直家。では、父上はどうあつても……

直實。きまつた事だ。某は嘗て敵に後を見せたことは只の一度でもないではないか。然るに今度に限つて人に矢を射向けられながら、おめく^く的を立てて歩くやうな、そんな臍甲斐ない役が引受けられるか。

直家。父上の御氣性としては、これは御尤ではございますが、併しこゝは考へどころではございますまいか。

直實。何が考へどころだ。

直家。父上は地境について、今久下と訴訟中ではございませぬか
直實。それがどうしたのだ。

直家。此の際上意に背くやうなことがあつては、訴訟の上にも響くところが大きいかと考へられます。

直實。……

直家。父上の御不満は御無理ではございませんが、只今の場合、何事も御辛抱が肝要かと存ぜられます。殊に久下方は鎌倉殿に御信任の厚い梶原殿と相引いて、内々策を廻らして居る様子でございますから……

直實。たとひ梶原が黨引するとも、理を非に曲げる事は叶はぬ。當方の言分に一點の非もない以上、敗訴になる氣遣ひは毛頭ないわ。

直家。併し鎌倉殿の御氣色を損じましては……

直實。小次郎、其方は凡下^{ぼんげ}になり下つたのか。訴訟は訴訟、立的立は立ではないか。某は只損得づくで生きてをるのではないのだぞ。熊谷ほどの者が訴訟に勝つ爲に、立的立の役を引受けたとあつては、末代までの名折れではないか。たはけ奴。

直家 恐れ入りました。

直實 其方などの嘴を入れるところではない。とく／＼鎌倉に立返つて、きつぱりとお断りを申して参れ。

直家 はあ。

直實 急いで行け。

直家 畏まりました。(直家去らんとして) 父上。

直實 何だ。

直家 御前へは病氣の體に披露致しませうか。

直實 いや、拵へ事を申しては相成らぬ。直實不服だとあからさまにお答致せ。

直家 ……………

直實 構はぬ。ありのまゝに言上せえ。

直家 承知致しました。では御免。(直家去る)

直實 待て。

直家 (戻つて来て) 何か御用でございますか。

直實 馬は、——某の乗換に乗つて行くがいゝぞ。

直家 はあ、辱う存じます。

第二幕

精神の動搖

箱根の峠に近い海道のある百姓家。

その家の内部。土間には所狭いまでにいろ／＼なものが積んである。

女房は豆を碾いてゐる。第一幕より何年かの後。ある冬の日。主の百姓が薪を山のやうに背負つて歸つて来る。

百姓 (外から) おい、何をしてゐるのだ。雲が降つて来たぢやないか。鶏を入れないか。

女房 又雲が降つて来たのかい。うるさいお天氣だ。

女房は粉を碾くのを止めて、表に出してある軍鶏の籠を「とうとう」と呼びながら

家の中に持込む。軍鶏は二羽別々の籠に入れられてゐる。百姓は薪を下して爐の傍にかゝむ。

百姓。今日は馬鹿に寒いな。

女房。こんなに寒くつちや麥に障りやしないかね。

百姓。なあに凍てやしない。暖いと却つて伸びすぎていけないよ。

女房。それもさうだけれど。

百姓。今年は戦はなし、米もよくとれたし、これで麥がよく出來りや申分なしだな。

女房。今日はもう休みかい。

百姓。たまに山に入ると、くたびれていけない

女房。今の中に精々骨休めをしておいた方がいゝよ

百姓。もう間もなく正月だな。

栗毛の馬を牽いて、直實が突然門口に現れる。

直實。頼まう、頼まう。

百姓。(後向のまゝ) 誰だい。

直實。旅の者だが、宿を無心したい。

百姓。それなら、これから一里許行くと湯本の宿だから、そこへ行つてお頼みになつたがようございます。

直實。向へ行ける位なら頼みはせぬわ。馬が少し怪我をして居るのだ。宿は其方に申し付けるぞ。

百姓。(相手の劍幕に驚いて、慌てて門口に飛出し、直實を見て) へえ、これはおいでなさいまし。——お馬が怪我をなすつてはお困りでございませう。併し御覽の通りの茅屋でございませうから。

直實。いや、苦しい。今宵は厄介になるぞ。

百姓。へえ、むさ苦しいございますが、ではどうかこちらへ。

直實。これは厩へ牽いて行つて休ませてくれ。

百姓。厩でございませうか。

直實。うむ……何をためらつてゐるのだ。

百姓。わしんとこには厩はございませぬ。

直實。なに、厩はない。

百姓。へえ、俺等は山家の百姓でございませうから、逆もそんなものは持つてをりませぬ。

直實。厩はなくとも、馬を入れる位の處はあるだらう。

百姓。何しろこんな狭い家でございませうから……

直實。え、そんな事を申してゐる暇に、馬を入れるところを早く工夫せえ。

百姓。さうですな。土間はこの通りでございませうし……ぢや裏の松の木へでも一寸つないでおきませうか。

直實。呆け奴、雲が降つてをるのに、馬を外へ繋いでおけるか。

百姓。へえ、これは飛んだ粗忽を申上げました。——ではやはり湯本までお越しになつては如何でございませう。まだ陽はありま
すし、あすこ迄おいでになれば、厩をもつてゐるやうな大きな
家がいくらでもございませうから……

直實。分らぬ奴だな。そんな事が出来るか。馬が怪我をしてゐるの
だと先程から申してゐるではないか。

百姓。へえ、併し全く厩はないんでございませうから……

直實。え、面倒な奴だ。そこどけ。(馬を家の中に牽入れようとする)

百姓。お武家様、何をなさるのでございませう。

直實。いゝから、そこどけ。

百姓。併しお武家様。

直實。そこをのかねか。邪魔立てすると承知せぬぞ。(直實は馬を牽い
たまゝ家の中に入つて来る。馬は慣れない家なのでたじろいでゐる)

直實。え、何をして居るのだ。上らぬか。(手綱を引張つたまゝ馬を座敷に引張り上げようとする)

百姓。旦那様、それは御無體でございます

直實。え、うるさい。——それ、上るのだ。上るのだと言ふに。

百姓。旦那様。

直實。い、からだどけ、どけ! (到頭馬を座敷に引上げて手綱を柱に結びつける)

直實。(百姓に) 何をぼんやりしてゐるのだ。鞍を外してやらぬか。

百姓恐るゝ馬の背中から鞍をはづしてやる。

直實。それから、脚に怪我をしてゐるのだ。手當をしてやれ。

百姓は手當をしてやらうとするが、馬は知らない人なので、なかく近づけない。

直實。何をしてゐるのだ。早く手當をしてやらぬか。

百姓。へえ、只今。

百姓は水を入れた桶を運んで馬に飲ませたり、薬をやつたりなどして機嫌をと

りながら、やつと脚の治療を終へる。それから、恐しいので土間の隅に蹲つてゐる女房の所へ行つて、自分も亦蹲る。その間直實は放心したやうに、只ちつと坐つたまゝで居たが、やがて力なく鞍に倚りかゝつて體を休める。暫くして直實は、何か急に思ひ出したやうにむつくりと起上る。そして忙しげに懐から幾通かの書類を取出して、それを一つ一つ丁寧に披いて見る。讀む度に無念の形相が面に現れる。彼はいきなりそれをすたすたに引裂いて火にくべる。(間)

直實。おい、水を持って。

隅に蹲つてゐた百姓は、こはく、器に水を入れて持つて行く。

直實。(咽喉を露しながら) 馬にも水をやつたか。

百姓。へえ。

直實。飼糧もやつたか。(百姓黙つて飼糧を食べてゐる馬の方を指す) うむ、よし。(間)

直實。霏はもう止んだのか。

百姓。へえ、止んだやうでございます。外は日が照つて居ります。
直實。氣まぐれな天候だな。

百姓。へえ、降つたり止んだり、山家の天氣は埒がございません。

直實。こゝは何處だ。

百姓。こゝでございますか。湯本の手前でございます。

直實。湯本。――すると、もう箱根だな。

百姓。左様でございます。

直實。ふむ、そんな處まで來てしまつたのか。

百姓。今日はどちらからお越しでございました。

直實。何處から來ようと、其方などに何のか、はりがある。

百姓。へえ、これはとんだ事を申上げました。どうぞお宥しを願ひ
ます。

直實。これ、もつと薪をくべえ。

百姓。へえ。

百姓は薪をくべると、また隅の方に引込んでしまふ。そして心配さうに女房とこ
そく、話をしてゐたが、やがて軍鶏を一羽籠の中から引張り出して裏口の方へ
持つて行かうとする。軍鶏はけたましましい聲を上げる。

直實。騒々しい！何をするので。

百姓。どうも申譯がございません。

直實。そんなことをしてどうするのだ。鶏をくびるのか。

百姓。へえ。

直實。何故そんな殺生なことをするので。

百姓。何も差上げるものがございませんから……

直實。はゝゝ、其方は可愛い奴だな。飼つておく鶏を潰して某に
振舞はうといふのか。

百姓。……

直實。併し某は今そんなものは欲しくない。

百姓。左様でございますか。

直實。放してやれ。放してやれ。(百姓又軍鶏を籠の中に入れる)

直實。(鶏を見て) なか／＼立派な鶏だな。

百姓。へえ。

直實。どうしたのだ。眼を潰して居るではないか。

百姓。へえ、この間蹴合をさせたものですから。

直實。蹴合？ではこれは鬪鶏か

百姓。へえ。

直實。強いのか。

百姓。へえ、仲々強うございます。此の間片目にはされましたが、その代り相手の鶏をとう／＼蹴殺してしまひました。

直實。向にも一羽あるな。それも鬪鶏か。

百姓。へえ、この方はもつと強うございます。俺の自慢の鶏でございます。

直實。其方は鶏を仕込んで居るのか。

百姓。別に仕立てて居る譯ぢやありませんが、この邊は今蹴合がはやりだもんでございますから。——旦那様もお好きのやうでございますな。

直實。うむ。

百姓。何でしたら、お氣晴しにやらせましても宜しうございますが……

直實。いや、今日はそんなものは見たくない。

百姓。左様でございますか。(間) 旦那様、こんな山家で外に何も差上げるものがないんでございますが……

直實。いや、食事などの心配はいらぬ。——おい、その鶏を鬪はせて

見ろ。

百姓。へえ？蹴合を御覽になりますんですか

直實。うむ。

百姓。ぢや、一寸お待ちなすつて戴きます。すぐ近所の鶏を連れて参りますから。

直實。そんな事は面倒だ。いゝからその二つを蹴合せて見ろ。

百姓。併しどうも内に飼つておく奴は……

直實。つべこべ言はずと、やれと申したら早くやれ。

百姓。へえ。

百姓は女房に蓆を持たせて来て土間を圍ふ。そして圍の中に軍鶏を一羽入れ、續いてもう一羽入れる。軍鶏はすぐ蹴合をはじめ。併し見物には、僅に烈しい羽ばたきの音が聞えるだけである。直實は座敷に坐つたまゝ、ぢつとそれを見てゐる。

直實。どちらも強いな。

百姓。へえ、この邊でこれに敵ふ鶏は餘りございません。

(間)突然百姓は一羽の鶏を抱へ上げる。

直實。何故止めてしまふのだ。

百姓。もう勝負はつきました。

直實。なに勝負はついた。いや、そんなことがあるものか。

百姓。この「めつか」の方が逃出しましたから。

直實。いや、一寸後へすすつただけだ。本當に負けたのなら悲鳴を上げる筈ではないか。もつとやらせえ。

百姓。併しもう逃げるやうですと、逆も駄目でございます。

直實。其方は自分の鶏なので惜しいのだな。そんな鶏なら何十羽でも償つて遣はす。さあ、早くやらせえ。やらせる以上は何處までもやらせえ。

百姓。へえ。(抱へた鶏を圍の中へ入れる。二羽また烈しく闘ふ)

直實。それ見る、あんなに闘つてゐるではないか。

百姓。畜生でございますな。向合せさへすりや直ぐやるんですか

ら……

直實。片目の方もなか／＼強いではないか。

百姓。へえ、あの鶏冠を立てて向つてゆく處は、凄いでござい
ます。

直實。また途中で止めると承知せぬぞ。

百姓。いゝえ、かうなつては、もう止めようたつて止りません。

直實。それもつと上へ飛べ。頸の處を狙ふのだ。頸の處を。

百姓。あッ、眼をやられた。

直實。(闘鶏の方には却つて眼を背けながら) いや、それしきもつとやれ、も

つと戦へ。死ぬまで戦へ。逃げるのは卑怯だぞ。(眼にいつばい涙を

湛へてゐる)

百姓。旦那様、どうなすつたのでございます。

直實。いや、何でも無い、何でも無い。——いゝからもつとやらせえ、

もつと。

百姓。こんなにあつてゐるぢやございませんか

直實。もつと、もつと突きかゝれ。何處までも、何處までも戦ふのだ

ぞ。……何故やめてしまふのだ。

百姓。旦那様は見ておいでぢやないんでございますか

直實。倒れたのか。(感に堪へぬやうに) さうか。

百姓。(急いでもう一羽の方に籠をかぶせ、女房に) おい、唐辛の水を持つて來

い。

女房。唐辛水を持つて來る。百姓はそれを倒れてゐる鶏に飲ませる。

女房。どうしたい。

百姓。どうもいけないやうだ。

女房。まだ咽喉をびく／＼させてゐるぢやないか。

百姓。いや、もう駄目だ。

女房。でも、もう一度やつて見たら……

百姓。そら、いくらやつたつてもう受付けやしないのだ。

直實。何をぶつ／＼喋つてをるのだ。鶏の一羽位なんだ。

百姓。いゝえ、決して何も申した譯ぢやございません。

直實。それなら黙つて手當をしろ。

百姓。へえ、お耳障りで申譯がございません。(聞)

直實。(暫の間ちつと沈思してゐたが突然靜に) あるじ。

百姓。へえ。

直實。これへ進め。

百姓。へえ。

直實。恐れることはない。こちらへ參れ。(太刀を外して)これは其方に

遣はす。

百姓。へえ？

直實。あの馬も其方にやる。

百姓。へえ。

直實。それから、厩がないと言つたな。——それはこれで建てるが

いゝ。(別に金を包んでやる)

百姓。へえ。

直實。心配することはない。某は不審の者ではないぞ。

百姓。いゝえ、滅相な。

直實。はゝゝ、何にも知らぬ其方が不審に思ふのは尤だ。併し某は亂心してゐるのではない。一時前までは一尺一寸の土地も失ふまいと無下に争つてゐたのだが、今はもう何もかも欲しくなくなつてしまつたのだ。この太刀にしろ、その馬にしろ、手離

し難いものではあるが、昔が思ひ出されて苦しいから、其方に遣はすのだ。遠慮することはない。取つておけ。

百姓。併し、こんなに頂戴致しましては……

直實。いや、みんな不用になつたのだ。

百姓。左様でございますか。ではお言葉に従ひまして頂戴致しませう。

直實。先程は粗暴なことをして濟まなかつたな。むしやくしやしてゐたものだから、つひあのやうな事をしてしまつた。

百姓。いゝえ、とんでもない。そのやうに仰しやられますと……

直實。眞一文字に驅けて來ると、此の先の曲り道で手綱を捌き損ねたので、急に馬の前足を折つたのだ。訴訟はうまく行かず、糞は降つてゐる。何も彼も癩に障ることばかりなので、腹立紛れに、つひ理不盡な事を致してしまつたのだ。宥してくれ。

百姓。勿體ない、勿體ない。そんなに仰しやられましたは痛み入り

ます。(間) 旦那様。

直實。何だ。

百姓。無様でございますが、旦那様は……

直實。某か。某は通りがかりの氣紛れな一武人だ。只さう思つてくれ。

百姓。何かお氣に入らぬ事がお有りのやうでございますが。

直實。うむ。氣に入らぬことだらけだ。

百姓。これからどこへお越しでございます。

直實。いや、何處へ行くといふあてどはない。只鎌倉が氣にくはぬから飛出して來たまでだ。

百姓。あゝ、鎌倉からお越しでございましたか。

直實。某は今日鎌倉で對決をやつたのだ。數年來の争を御前で對

決したのだ。併し當方が正しいにも拘らず某はみすく……
いやこんな事を其方に申した處が何にもならぬ。——おい、そ
んな處においては目障りだ。馬を下せ。

百姓。いゝえ宜しうございますあのまゝでかまひません。

直實。いや、見苦しいから取下せ。

百姓。左様でございますか。では何とかそこを片付けまして。

夫婦は土間を片付け、そろくくと馬を下す。直實は馬手差を抜いて靜に髪を切る。

直實。あるじ。

百姓。へえ。

直實。これも不用の品だ。(馬手差を渡す)

百姓。何とも申しやうがございませぬ。御推察申上げます。

直實。いや、何も言ふな。何も言ふな。(間) おい、もつと薪をくべえ。

百姓。へえ。(百姓薪をくべる。外はもう日が落ちてゐる)

幕

第三幕

出家して、靜かき世界に大い、眞の身

京の吉水に於ける法然の禪房。その庫裡の内部。上手は板の間。下手は廣い土間に
なつてゐる。そこに据付けてある大きな竈には、粥の鍋が懸つてゐて、火が赤々と
燃えてゐる。板の間の方には天井から魚の形をした鮑が下つてゐる。第二幕から
一年位後の或秋の明け方。外はいくらか白みそめたが、庫裡の中はまだかなり暗
い。蓮生と盛蓮とが暗い中で黙々として薪を割つてゐる。暫の間は斧の響だけし
か聞えない。やがて盛蓮は草臥れたらしく斧の手を一寸休める。

蓮生。(割りながらそれを見て) 少し休まうか。

盛蓮。いや、休むことはない。(又直ぐに割初める)

蓮生。併し疲れたのではないか

盛蓮。いや、少しも御坊疲れたのなら俺に構はず休むがいゝ。

蓮生。いや、俺は少しも疲れてはゐない。

蓮生は勢よくぼん／＼割る。盛蓮はそれに負けぬ氣になつてやるが、蓮生には及

ばない。

盛蓮。御坊、力競べをするつもりか。

蓮生。いや、別にそんなことはない。

盛蓮。それなら、もつとゆつくりやつたらどうだ。

蓮生。はゝゝゝ。

盛蓮。そんなにやつたら、疲れるではないか。

蓮生。俺はこんなことでは、少しも疲れない。

盛蓮。依^い估^こ地^ちな人だな。

蓮生。休まうと言つてゐるのに、御坊こそ休まないのではないか。

盛蓮。俺は休まなくつてもいゝのだ。

蓮生。それなら、勝手にするが、いゝ(間) さあ片附いたぞ。——あゝ。

(伸をする)

盛蓮。人前で、大仰に伸をしなくつてもいゝではないか。

蓮生。これは悪かつた。併しわざとやつた譯ではないのだ。——少

し手傳はうか。

盛蓮。いや、御坊のと一緒にされるのは迷惑だ。

蓮生。どうして。

盛蓮。御坊のとは割方が違ふ。

蓮生。さうかな。

盛蓮。俺はいくらか遅いかも知れぬが、皆揃つてゐる。太いのや細

いのは交つてゐない。

蓮生。俺のだつて、そんな不揃なもの是一本だつてありはしない。

そうれ、どれにしたつてこの通りだ。

盛蓮。何も薪を見せてくれと言つてゐやしない。

蓮生。いや、別に見せびらかす譯ではないが、只御坊が難癖をつけ

たからだ。

盛 蓮。薪割なんか幾らうまくたつて、手柄にはなりはしない。

蓮 生。何をつまりらぬことを言つてゐるのだ。

蓮生は竈の前へ行つて火を見る。そこへ年老いた静空が外から歸つて来る。柿を澤山籠に入れて持つてゐる。

蓮 生。大變な柿ですな。

静 空。少し干柿を作らうと思つてな。

蓮 生。さうですか。串柿になさるのですか。

静 空。いや、串柿は面倒だから縄で吊しておかうと思ふのだ。

蓮 生。それなら縄はこゝに幾らもございます。

静 空。あ、有り難う、有り難う。(静空は柿を縄に通す。蓮生は割つた薪を束ね始める)

蓮 生。これが濟んだならお手傳ひませう。

静 空。いや、一人で十分だ。縄を通すだけだから

蓮 生。随分大きい柿ですな。裏山のですか。

静 空。あ。(静に耳を傾けてゐる)

蓮 生。何です。

静 空。いや、一寸静に。(間)あ、やはりさうだ。

蓮 生。どうしたのです。

静 空。なあに、鳩がまた子を孵したらしい。

蓮 生。あ、さうですか。

静 空。そら、可愛らしい聲でクウ〜言つてゐるだらう。……親鳥の間に交つて……

蓮 生。あ、聞えます。……聞えます。

静 空。は、は、鳩の聲つて閑寂なものだな。(間)時に御坊は昨日は大出来だつたな。

蓮 生。いゝえ、お恥しうございます。

靜空。流石は東國一の弓取だけあつて、あゝいふ場所へ出ても膽が据つたものだ。禪定殿下は却つてお褒めになつたといふではないか。

蓮生。お叱を被るかと思つてゐました處、却つて奥へお召出しになりましたので、我ながら驚きました。あの折別段喚く程のこともなかつたのですが、性來の短氣で、つひあのやうな非禮を致してしまひました。

靜空。いや、そこが外の人には出來ぬところだ。

盛蓮。(薪を割るのを止めて) 蓮生殿、御坊は昨日何をやつたのだ。

蓮生。いや、お話するほどのことではないのだ。

盛蓮。俺に話しては困ることなのか。

蓮生。そんなことは毛頭ないが、大した話ではないのだ。――

盛蓮。そんなに謙遜することはないではないか。

蓮生。いや、實は昨日は師の御坊が月輪殿ツキリンに上られる日だから、俺はその御法談を聞きたいと思つて、推參にお供の列に加はつて行つたのだ。處が、お邸へ着くと、師の御坊は奥へ請ぜられたが、供の者は沓脱から先へは一步も入ることを許されないのだ。奥からは床しい香の匂が漂つて來るのに、尊いお談義は一言も聞くことが出來ないので、俺は不平の餘り、思はず聲高に口走つてしまつたのだ。在家に差別のあることは知つてゐるが、出家が御法談を聞くのにも、やつぱり差別はあるものだな。あゝかう怒鳴つてしまつたのだ。

盛蓮。それだけの話か。

蓮生。さうだ。

靜空。併し、それだけと言ふが、堅固な信念がなかつたら、高貴のお方の處で、どうしてそれが言へるものではない。――さあ、これ

で出来た。

蓮生。もうお通しになつたのですか。

静空。うむ。——あ、爽かな朝だ。どれ、一つ干して来てやらう。

静空は吊し柿を下げて外へ出て行く。(間)

盛蓮。(なほ薪を割りながら)蓮生殿。(蓮生黙つて振向く)御坊は一代の面目を施したな。

蓮生。(頭を背ける)

盛蓮。いや、さうではないか。當代の關白殿と座を同じうして御法談を聞くなどといふ事は、我々には望めぬことだ。御坊は實に果報者だ。……だが、御坊はなぜ月輪殿で喚かれたのだ。

蓮生。それは先刻言つたではないか。

盛蓮。併し禪定殿下のお館に上つて殊更喚くといふのはをかしいではないか。

蓮生。何故そんな妙なことを言ふのだ。

盛蓮。いや、何故といふ事はない。只御坊の肚の底に何か求むる所があつたやうに思はれるからだ。

蓮生。御坊は俺を疑つてゐるのか。

盛蓮。經文には、名聞利養に執する者は悪魔の弟子だと書いてあるさうだ。

蓮生。黙れ。そのやうな事をもう一こと言つて見ろ。其の分には捨ておかないぞ。

盛蓮。何。俺はさう思つたからさう思つたと言つた迄だ。それがどうしたのだ。

蓮生。おのれ！まだ言ふか。(盛蓮を取抑へようとする)

盛蓮。何をするのだ。(持つて居た斧を振下す。蓮生す早く身をかはす)

蓮生。貴様のやうな奴は。

盛蓮 なに。

蓮生 二人長い間ちつと相對峙してゐる。突然蓮生は盛蓮の足下にがばと領伏す。俺が悪かつた。

盛蓮も急に斧を投捨てて蓮生の傍に倒れる。そして「わあ」と泣出す。聞靜空が入つて来る。

靜空 どうしたのだ。二人共そんな處に……おい、どうしたのだ。

盛蓮 申譯がありません。申譯がありません。

靜空 一體どうしたと言ふのだ。

盛蓮 俺が悪いのです。俺が悪いのです。俺は勝たう勝たうとして、つひこんなことをやつてしまつたのです。

靜空 勝たうとは。

盛蓮 一旦佛門に歸依した上は、源家もない、平家もない、平等一如の筈であるのに、俺は蓮生殿に怨を持つて居たのです。

靜空 なるほど、御坊は……さうか——

盛蓮 在家の折は蓮生殿は敵方でしたから、その頃の事を思ふと、どうしても打解けられないのです。それで事毎に反が合はなかつたのですが、先程月輪殿の一條を聞くと一際嫉ましくなつたのです。新參な蓮生殿が禪定殿下のお褒めに預つたとあつては、無念で堪らないものですから、どうにかして貶しめてやらうと謀つたのです。それで、つひこんな事になつてしまつたのです。俺は實に淺ましい人間です……私がこゝに入つたのは深い信仰があつての事ではありません。主家が亡びたので、どうしても姿を隠さなくてはゐられなかつたからです。併し師の御坊のお話を聞いてゐると、自分のやうな頑な者でも心がいつか和げられて、勝つたり負けたり殺したり殺されたりする世の中がつく／＼嫌になつて行きます。そしてさうい

ふ争のない静な世界に入りたいと心から思ふやうになりま
す。併し幾らさう思つても、根が根ですから、何か事に當ると、す
ぐ昔の鬭争の心が頭を擡げて來るのです。いや、それは今の場
合ばかりではありません。随分己を抑へよう抑へようと思つ
てゐながら、水を汲む時や、念佛を唱へる時にさへ、つひ人より
も勝たう勝たうと争つてしまふのです。一日千遍唱名する者
があるとなれば、自分は二千遍、二千遍やる者があれば、自分は
二千五百遍唱へなければ氣が濟まないのです。私のやうなのが
修羅地獄に落ちてゐると言ふのでせうか。——蓮生殿俺が
悪いのです。濟みません。濟みません。

蓮生。いや、そんな事を言はれると、却つて苦しくなる。俺さへ諍ちやうがは
なければこんな事にはなりはしなかつたのだ。今御坊が言つ
た言葉は一つ一つ俺の聲だ。……俺は駄目だ。

盛蓮。では御坊も。

蓮生。俺は家も捨て、妻子も捨て、武士も捨てたが、我慢の心ばかり
はどうしても捨てられない。

盛蓮。蓮生殿！

蓮生。盛蓮殿！

盛蓮。我を捨てよ、己を抑へよ。そんな事は言はれなくてもよく知
つてゐる。併し知つてゐながら、どうしても抑へられないこの
心をどうすればいいのだ。——靜空殿、俺は負けよう、負けよう
と努めてゐるのですが……

靜空。二人の苦しみは俺も長い事苦しんで來たことだ。併し盛蓮
殿強ひて負けようとするのは、又一つの勝つ事ではないか。

盛蓮。さうでせうか。

靜空。無理をせずと、そのまゝに進みなさい。

盛蓮。それが俺には出来ないんです

静空。いや、尤だ。併し今の人は只矯めることを修業と思つてゐるやうであるが、修業といふものは、無い物を有るやうに見せることではない。早い話が馬は牛の様に強くない。それを強くしようとしても、それは無理な話だ。……萬物、人々、その柄その氣稟の儘に押進んで行つたら、それでいゝのではないだらうか。それが自然法爾といふものではあるまいか。

盛蓮。そんな風にしたら、一層我が強くなりはしないでせうか。

静空。深い事はよく解らないが、突抜けたらいゝのだと思ふ。

盛蓮。併し俺のやうな勝氣な者は……

静空。馬はその速い歩みの爲に、人はその氣質の爲に、一生苦しむものだ。併しその間に、(蓮生突然立上る)どうしなすつた。

蓮生。いや、何でもありません。(竈の所に行つて、釜を下す)

盛蓮。御坊はこんな氣持でも働けるのか。

蓮生。俺には理窟はよく解らないのだ。

盛蓮。それは、こんな事を長々と喋つてゐた處が何にもならないが、併し俺には今は……

蓮生。いや、御坊はさうしてゐるが、もう俺一人で出来ること

だ。(蓮生は板の間に上つて食卓を列べる)

静空。あ、忘れてゐた。蓮生殿、濟まぬが、そこに豆があるのだが。

蓮生。どこです。

静空。うむ、そこ、そこ。

蓮生。あ、ありました。

静空は豆を受取ると、入口の處へ出て豆を撒く。白い鳩が澤山はたくと庭に下りて来る。蓮生は食卓の用意を終ると、木槌を取つて鮑を鳴らす。その音に鳩は驚いて一寸飛立つたが、すぐ又靜になる。

蓮生はなほ鮑を打ちつゞける。外は朝日が眩いやうである。

——幕——

——同志の人々——

註——□山本有三。名は勇造といひ、明治二十年栃木縣に生れ、東京帝國大學獨文科を卒業した。多くの戯曲集や翻譯の著がある。

□四半的。方八寸を基準として、四半的はその四分の一(四寸四方)、九半的は九分の一(約二寸七分四方)の大きさの的。

□安堵の下文。鎌倉時代、室町時代に、朝廷幕府、國司等が土地の所有又は任官などをみとめる意味を記して、その人に下した文書。

□本領歸附。本來の領地に落附くこと。

□佐竹の冠者。常陸の豪族佐竹秀義で、頼朝は平氏追討に先立つてこれを討つた。

□新日吉祭。近江の國坂本に鎮座する日吉神社の祭典。

□瀧口本所。瀧口とは清涼殿の北瀧口の陣に勤番する侍、本所は之を管轄する藏人所をいふ。

□凡下。武士でない一般平民をいふ。

□めつか。めつかち、片目のこと。

□馬手差。鎧通し。軍中で、太刀の外に右手の腰に差す短刀。

□鮑。合圖の板木。

□禪定殿下。太政大臣九條兼實。世に月輪關白といふ。

□自然法爾。諸法はそのまゝに眞如であるといふ意味で、具有せる觀智によつて解脱の域に達すること。

鑑賞——□熊谷直實といふ一個の人間を三幕三段に別けて描いてあるが、

一、第一幕では、直實のどういふ心持、又はどういふ方面を描いてあるか。性格としていかなる性格の人物に描き出されてゐるか。

一、第二幕ではどういふ氣持を描いてあるか。

一、第三幕ではどういふ氣持、又はどういふ方面を描いてあるか。又こゝでは、作者はどういふ意味を表はさうとしてゐるか。

等に留意し、且ついかなる事件、態度、言葉がそれらを表現してゐるかを考へて見るべきである。

□この三幕の中に描き出された事件は、事件相互の間及び事件と直實の氣持との間にいかなる關係があるかを考察して、直實の氣持の變化してゆく徑路をよく味はなければならぬ。

昭和二年十月十九日印刷
 昭和二年十月二十二日發行
 昭和三年三月二十三日訂正印刷
 昭和三年三月二十七日訂正發行



發行所

東京市神田區錦町一丁目
 振替口座東京四九九一番

現代文學讀本(第三版)全三冊

價定		昭和三年	
上卷	五拾貳錢	上卷	八拾六錢
中卷	五拾貳錢	中卷	八拾六錢
下卷	五拾五錢	下卷	九拾壹錢

編纂者

明治書院編輯部

代表者

鈴木友三郎

發行者

株式會社 明治書院

取締役社長 鈴木友三郎

印刷者

東京市神田區三崎町三丁目一番地
 細谷祐三

株式會社 明治書院

電話神出(25) 一四一四番

第二學年四組
小森喜代

広島大学図書

2000019638



皇紀 二五九五

三月

西曆 1935

日 SUN	月 MON	火 TUE	水 WED	木 THU	金 FRI	土 SAT
☼	☼	☼	☼	☼	1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31	☼	☼	☼	☼	☼	☼